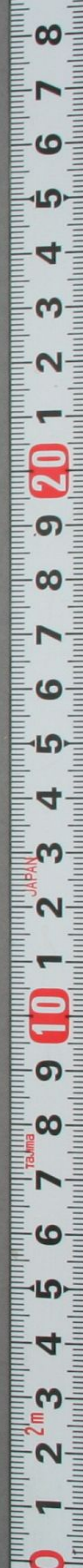


餘生偶錄

高年偶錄

昭和十四年三月起筆

特別  
14  
1919  
499





陸生偶錄

昭和十四年四月起筆

得歲月延歲月，得歡悅且歡悅，萬事乘除任在  
 天，何者愁腸千萬條，放心寬矣，畢竟窄，古今與  
 瘡必眉列，金谷每華眼，底蒼，誰陰多，葉不  
 鋒，頭五，陶階難，時為花名，范蠡湖，是苦，葉紫  
 白，臨潼會，上曉氣，堆，丹陽縣，葉蕭，都，絕時  
 未，頑，織，有，光，輝，運，退，英，金，無，難，色，道，道，且，子  
 聖，覺，心，利，此，方，如，流，味，少，粗，衣，淡，飲，足，家，多，美，養  
 得，漫，世，生，一，世，性。

右宋邵康公即夫之心歌，以此代序











本書を<sup>手記</sup>心と<sup>手記</sup>まきか、或は「<sup>手記</sup>生見録」とも名づくべき歟、  
<sup>手記</sup>生之二字或は其概を以て人知せざるやと知人の乞名を被  
<sup>手記</sup>答ふに「<sup>手記</sup>概いしむるも亦可、

此種書は統教の令をわがぬめ雜の<sup>手記</sup>まが五六冊あり  
皆長きものあり。或は他日「春城回廊」の一巻に収めべき歟

早大回廊録

十四年五月中央公論所載

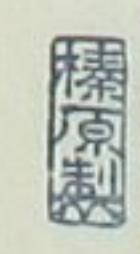
回廊刊行人の始末

戊寅春名報才七巻昭和十二年十月執筆

中野山と回廊

丁丑雜記第六巻より十二月二十日執筆

執筆



政治奔走時代の回廊

衆議院の憲政史の資料として全の法法を

筆記するに打つたものあり

遊文日記

支那遊文と遊文の日記とあり

北直抵詩話 長跋

詩話の後に附しきものあり







三日は用事ありしことありし人等も余の押書と終つ約束  
かあるのむむ其の爲り二十枚張と化と頼さんれこの十枚  
張の押書ハ尤も自合を煩ハレ此。此が本年四月●間の行  
事ハある。

以上の山玉き通しの中におも書け初々起書地書と  
扱ひ新法現代の技術は後者の地書と寄せ江戸没本に  
巻頭言を寄せり外他書にねちちく水郷地記と著作す  
数年の借金とせしむが定額預金ありしことと期限前  
て一時金融も若支関係ありしことと十八日同六十の可借  
入。

○研後千睡とと枕し就て是書の早終と通す、讀出の事あり



あるうん、アト讀書の時や遊樂せさましく讀書の就てのここと  
思ふも任かき、ノートを取つて見ると、まじりくも多般である。  
既に成段とまじりくも多し、自分か保まき名つけられよと  
ある、うじオビやしくよと耳讀とよい商人か點字の讀む  
のを指讀とよまきかえひある。塾や学校をいふ行かん。  
讀むのいろくを思ひ出して見ると、素讀、合讀、輪讀、  
編讀、後讀、疾讀、卒讀とある。疾讀卒讀は交  
験の準備讀も通すもの。讀むる者終つてしをとい  
ふる、音讀、朗讀、誦讀、かたき讀むもの、黙して黙  
讀かある。讀方の精粗も他、就てハ、通讀、精讀、沈  
讀、熟讀、譯讀、濫讀、誤讀等がある。讀書の場合  
ハ尤も多く、其場多くにわかれ、成讀もあつた、右の如



きし夏より氣あつく

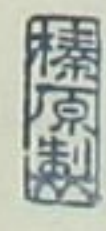
船後、騎後、服後、外後、車後、馬後、陣後

領後、店後、庫後、厠後、轆後、軍後、釣

後

と、いふ。領後ハ同ク彼國に後意を付ケル後也。店後ハ玉  
お倉の店頭ニ後むの意也。庫後ハ玉庫ニお物を  
取捨シテ後むの意也。亦等ノ部ノ意也。亦玉を倉庫  
の中ニ遊人比執心の讀み家と云ふ也。釣後ハ釣を  
垂ルルコトヲ讀者あるの意也。人オも有る、こゝん專ハ成後ハ  
るゝか、事ハ云ふ、さう、田舎く、岩を念ハれ、の意也。

こゝに書き置かば指シテ其業を授テ、身不地の



恭瑞三 昭和十四年一月廿九日



頭山翁の面目

天松居士 濱地八郎

頭山翁は清身障と愛と智とにし、此の人は口で物を云ず、體で物を云ふ人である。生きた人と死んだ人とを同じに心得て居る人である。人を相手にせずして天を相手にする人である。我が事をせずして人の事、國家の事のみをして

厭もせず、凍えもせず、暑さで家が焼け、品物がなくなれば、何時となく家も出来、品物にも不自由せぬ人である。爲さんと欲すれば即ち爲し、助けんと欲すれば即ち助け、與へんと欲すれば即ち與ふ更に己を顧みず。

居士此人と交ること四十餘年、

常に平然として會て變りたることなし。何時も丁寧親切にして此方よりも先覺として如何事に勉むるも及びたることなし。時間を約束すれば先に來て待つてゐる、不幸なことがあれば先に飛んで來る。損なことがあれば先に負ふ。讀んだ書物なら皆讀んで居る。何時でも空で讀む。

○ 佛を敬し、佛を敬び、朝夕の禮拜を怠らず。養生でも紳士でも一視同仁、先年印度人問題の末、翁曰く、自分はあの怒むべき印度人の命の爲めには自己を犠牲にする厭惜であつた。これは獨り印度人の爲めのみではない、我が國權の爲めであつた。翁の清身は東洋の平和の爲めの外に他意はない。

又翁の若き時或る旅箱の襪巻を著たまふ居士を訪問した事があつた。居士は其の歸つた後で頭山にも困つたもんだ、宿屋の著物のまゝにて、外出するとは餘りに無頓着過ぎると云うて家内に咄した。後に聞けばそれは或人が金の無心に頭山の宿に行きて金がないなら著物でも貸してくれといはれたので、二三日の約束で貸した所が、却々返して來ないので、宿屋の著物で平氣で用を達したのであつた

○ 其後翁は所用ありて阪大へ行くべく新橋のステーションに行き乗車券を買はんとせし時前によ、著物を借りたる人が翁を見て頭を擧げはせ度くない有様をかしきことに思ひ、おい君何處へ行く、と聲を掛け、さきより感汗に大阪に行きます、誠にむにやむにやと云ふを聞流し、さうか大阪に行くなら一緒に往かうと、乗車券を買ひ與へ、同車して大阪に行つたことがある。

○ それより數年後其の人は支那に渡り、萬金を働き出し、何か翁に報いんと思ふも翁の受けざる事を知り、大阪に於ける翁の種惜を返したと云ふことである。翁は貸したことを忘れ、借りた物は乾度返す人である。それは居士が四十餘年實見する所である。

頭山翁清話 浩然の氣だけは持つてゐます

○ 頭山翁と云ふ人は大臣になつても、極めて貧乏であつた。彼が好んで、遊びに行くに非常に喜んで會つた。

あなたは容顏憔悴などと褒めて大いに自重して下さいと云つた。他が行儀の悪いことを、知つてゐられて、行くと、あの醜態無比な人が他には、あなたは、自由に横になつて悠々として話して下さいと云つた。

誰かど、大臣へ贈物に買つて上げたものらしい、鐘の大きな時計を持つてゐられた。其頃は時計を持つてゐる者は殆んど無い時代で、時計の珍らしい時代だつた。其の時計を、小供が手毬を遊ぶやうな手つきで、弄んで話しをさ

された。いゝ氣のものだつた。そして大きな腹をさすりながらわたしは貧乏で他にも持たないが、わたしは浩然の氣だけは、こゝに持つてゐますよ、といかにも元氣に云つて居られた。あんな大臣は今頃は居ないわ













此頃希間々山陽の詩書に起す一丸下の若千ある中に右の八巻  
府二首がある。是が口伝五相に據つたものなげ。中の魚と  
或一丸即ち右の其書と同一の物なり。

100



























家に来りしかな

あふこは歌ふもその葉たなふ  
あまにほさても  
何と思てよ

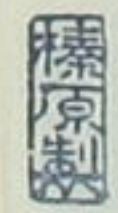
あま走らうらわさしなめく  
いさ遊ぶ力のやあ  
秋ん

西の照りのくよう  
さき血・燃ゆるかうん  
業  
平の歌

うつにもあが懐ん  
身を伸ぬ母の  
涙をさもや  
ゆめあとも

抱念も子々と  
語らふおとら  
き父とらう  
か娘  
傷ま

君あつて見ると  
あつとき  
一駄の草の  
一つとせ



まはこなる 春物を見る

いさかひふまけ  
て泣けども  
まを  
あな  
放たす  
ゆら  
ま  
のふ

生きたる  
あな  
あ書と  
ゆゑの  
やう  
か  
と  
ひ  
く  
撫  
こ  
う  
細き  
指

あつ里の  
休  
活  
よ  
ま  
く  
似  
て  
胸  
あ  
わ  
く  
親  
の  
あ  
の  
涙  
く  
京  
池  
う  
ま

足輕  
か  
ま  
に  
筋  
ん  
て  
栗  
の  
文  
の  
あ  
ら  
ま  
喜  
ま  
笑  
み  
か  
は  
す  
旅

大い  
な  
る  
浪  
の  
巻  
く  
悲  
み  
の  
汐  
浸  
く  
似  
つ  
お  
け  
き  
ふ  
一  
き  
く

浦底の中  
に  
ま  
ら  
く  
と  
せ  
一  
灯  
の  
ま  
ば  
ら  
ん  
暗  
し  
夜



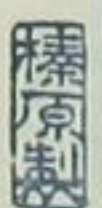
の寺泊

五丈原におけしまでもおん慈悲にゆるんで依り奉る

の御佛

山田教誠は花也のべこすんのあるの<sup>昔</sup>金花也の住持也の言を  
富守の言あり彼人の田舎なるに四十年一暮れと托して終焉を告  
げし和歌のゆゑ文章をいふ念をすくこととくしこすぬ<sup>昔</sup>記を  
とる言いと戒めしこととくしこすぬ<sup>昔</sup>日御もあつしこすぬ<sup>昔</sup>  
ある(八月六日記)

○漢書に因へて我々の地名が原意を失つたものなるをいふ北  
海道の名ハ概ねアイヌ語に多く意味があるのこゝに文藝漢字  
をハててみるも原意の<sup>昔</sup>留めし由一なる。渡辺の寒更後  
る<sup>昔</sup>十原の神<sup>昔</sup>方<sup>昔</sup>道<sup>昔</sup>に<sup>昔</sup>此<sup>昔</sup>地<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>真<sup>昔</sup>意<sup>昔</sup>を<sup>昔</sup>描<sup>昔</sup>し<sup>昔</sup>る<sup>昔</sup>漢



ま<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>す<sup>昔</sup>り<sup>昔</sup>ん<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>漢<sup>昔</sup>海<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>傳<sup>昔</sup>い<sup>昔</sup>ふ<sup>昔</sup>ん<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>い<sup>昔</sup>へ<sup>昔</sup>る<sup>昔</sup>も<sup>昔</sup>ある<sup>昔</sup>ん<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>い<sup>昔</sup>や<sup>昔</sup>ん  
今上高地とすの所も神河内が本名にありてむ名の方又意味がある  
神河内をグチとすふのも地形がしく奇せんことある也信州の確  
秋も温泉のありずからるるにアイヌ語の *Uchi* といふは  
ぬ<sup>昔</sup>た<sup>昔</sup>ま<sup>昔</sup>ん<sup>昔</sup>ハ<sup>昔</sup>湯<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>熱<sup>昔</sup>い<sup>昔</sup>ふ<sup>昔</sup>草<sup>昔</sup>津<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>邊<sup>昔</sup>も<sup>昔</sup>奥<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>を<sup>昔</sup>約<sup>昔</sup>  
し<sup>昔</sup>く<sup>昔</sup>さ<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>い<sup>昔</sup>ふ<sup>昔</sup>説<sup>昔</sup>も<sup>昔</sup>あり<sup>昔</sup>アイヌ語<sup>昔</sup>津<sup>昔</sup>騰<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>い<sup>昔</sup>ふ<sup>昔</sup>  
の<sup>昔</sup>こ<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>を<sup>昔</sup>考<sup>昔</sup>へ<sup>昔</sup>る<sup>昔</sup>信<sup>昔</sup>州<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>温<sup>昔</sup>泉<sup>昔</sup>に<sup>昔</sup>登<sup>昔</sup>崎<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>名<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>あり<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>湯<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>  
ま<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>アイヌ語<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>言<sup>昔</sup>から<sup>昔</sup>来<sup>昔</sup>て<sup>昔</sup>此<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>と<sup>昔</sup>思<sup>昔</sup>へ<sup>昔</sup>る<sup>昔</sup>こ<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>言<sup>昔</sup>味<sup>昔</sup>が<sup>昔</sup>あ<sup>昔</sup>  
り<sup>昔</sup>登<sup>昔</sup>崎<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>字<sup>昔</sup>を<sup>昔</sup>究<sup>昔</sup>て<sup>昔</sup>ハ<sup>昔</sup>原<sup>昔</sup>意<sup>昔</sup>に<sup>昔</sup>渡<sup>昔</sup>り<sup>昔</sup>す<sup>昔</sup>。尚<sup>昔</sup>ほ<sup>昔</sup>北<sup>昔</sup>野  
を<sup>昔</sup>い<sup>昔</sup>ふ<sup>昔</sup>一<sup>昔</sup>中<sup>昔</sup>野<sup>昔</sup>利<sup>昔</sup>一<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>説<sup>昔</sup>を<sup>昔</sup>説<sup>昔</sup>ん<sup>昔</sup>む<sup>昔</sup>の<sup>昔</sup>説<sup>昔</sup>を<sup>昔</sup>定<sup>昔</sup>め<sup>昔</sup>北<sup>昔</sup>池<sup>昔</sup>を<sup>昔</sup>也







けいも、向守全泊の勝を以て表し、既述を往らう心、如何に  
楚せしむ、自分の化か、然るに勝をえんも、天下の才勝の  
天下の冠等と云えども、即ち此せんが、全泊の優る萬、唯  
此奇景唯在、於に勝る、溪流無きことか、缺點がある、あれど  
山歌枕、鉄ととよの、何事か、交通不便、殊勝な地、  
山歌の才勝、多し、絶えぬといふ、向守全泊、せんを、  
る、あつと、あつと、め、義、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
違ふ、但し歌人の、勝者、あつと、四修、家、の、  
あつと、せん、せん、せん、せん、せん、せん、せん、せん、  
想像を馳せ、あつと、彼等と、白守全泊の、現地を、  
心懐ん、魂、戦と、天下の、冠、えと、も、  
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
目、考、一、の、歌、人、の、  
教、性、動、振、び、其、  
標

天下の才勝を以て表し、既述を往らう心、如何に  
楚せしむ、自分の化か、然るに勝をえんも、天下の才勝の  
天下の冠等と云えども、即ち此せんが、全泊の優る萬、唯  
此奇景唯在、於に勝る、溪流無きことか、缺點がある、あれど  
山歌枕、鉄ととよの、何事か、交通不便、殊勝な地、  
山歌の才勝、多し、絶えぬといふ、向守全泊、せんを、  
る、あつと、あつと、め、義、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
違ふ、但し歌人の、勝者、あつと、四修、家、の、  
あつと、せん、せん、せん、せん、せん、せん、せん、せん、  
想像を馳せ、あつと、彼等と、白守全泊の、現地を、  
心懐ん、魂、戦と、天下の、冠、えと、も、  
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
目、考、一、の、歌、人、の、  
教、性、動、振、び、其、



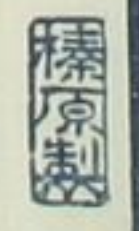
の露伴、此の出版に絶賛す、すも、此の書に於ては例の如く、  
いろいろの材料、その考証あり、中へ就て、國外の歌一編を、  
古く歌の形式と外へ、その歌を、考証と進んで、各字の御  
和漢の多し、及んで、思ひ出た、此の自今、四書刊行、  
をやつて、これ、後、志、御伴を、訪ふ、露伴、ハ、其の、  
和漢の類を、各所、不、集、あ、四、種、及、人、と、云、あ、れ、を、  
ん、と、つ、和、漢、の、体、を、研、究、し、た、後、果、然、と、皆、同、体、と、あ、る、の、ん、  
失、せ、し、と、云、あ、れ、と、思、ひ、出、す、か、露、伴、の、漸、り、性、の、

端、い、と、ん、か、知、ん、か、彼、ん、が、考、証、的、の、文、の、お、ろ、ろ、か、か、  
と、御、伴、の、折、り、と、あ、る、こ、と、表、す、ま、ま、御、伴、の、  
の、露、伴、の、隨、筆、日、光、琳、の、書、漢、に、後、す、又、か、あ、る、の、思、ひ、  
こ、こ、か、あ、る、久、保、の、若、徳、が、京都、の、海、橋、の、歌、妓、を、お、千、と、稱、を、  
又、つ、け、し、ま、る、と、あ、る、こ、こ、千、鳥、が、死、ん、び、き、た、り、を、歌、妓、と、あ、る、千、鳥、  
を、見、よ、と、云、あ、れ、と、歌、妓、の、歌、妓、と、い、ひ、お、千、と、云、あ、る、千、鳥、の、あ、る、形、  
の、思、ひ、出、す、こ、こ、ヤ、三、角、形、の、よ、の、心、と、云、あ、れ、を、お、千、と、云、あ、る、  
あ、る、の、光、琳、の、千、鳥、が、死、ん、び、き、た、り、を、歌、妓、と、い、ひ、お、千、と、云、あ、る、  
之、ん、を、お、千、と、云、あ、れ、と、歌、妓、の、歌、妓、と、い、ひ、お、千、と、云、あ、る、  
を、感、ず、し、と、云、あ、れ、と、思、ひ、出、す、か、光、琳、の、書、漢、に、  
あ、る、お、千、と、云、あ、れ、と、思、ひ、出、す、か、光、琳、の、書、漢、に、  
か、あ、る、と、云、あ、れ、と、思、ひ、出、す、か、光、琳、の、書、漢、に、



此の後の彩色は能登東から来てゐると同じやうに彼のの  
畫の字畫もあつて一能高歌の風格を爲すものも又  
餘り出た言近であると思へば、彼は平城の藝苑に  
分つた地味を占めたのは、その女の好む所の法に胎動し  
てゐる、その一派を考へる上つたものと考へる。其の  
舞臺の畫が永く又歌とあつて珍重せし、又歌の舞臺の  
舞臺の畫が永く又歌とあつて珍重せし、又歌の舞臺の

○平田氏の歌集と稱する一又二三首とあり  
其がそのうちの一は、  
秋の  
飽き足る命懸て一回とある。又その一は、  
若し日のあつ



五頭おうー素破、歌はくと湯山の末々あるあつ  
あつきのあつ

老く七老とせん、わが舟の碎けちるやと、んを幾  
かな

その遠く時つ岩とせん、に浪押し、あけと舟、あ  
のあつ

あは海も舟も、あつとくれとあつ、あつとあつ  
日の沈む時

○神家の火元白雪の法か、杜荀鶴の詩に

三伏御前、枝一衾、並無竹、塔屋廊、各様不、又須山  
六、遠海心中、火自涼



こり待回意

〇五丁尻力近若平あ又学史と後み今人の和歌二三と  
わす

花の色に霞にこそ見えすも香とひんぬすめまの  
山風道正

今朝又んか夜のまふん斬ん伏して起きよあかしの  
女郎花のまふら

惜めよ後の書さくかほるゝおろよ家のすけし  
かふくま

捨つとらふに愛せといふ一と一とわんふ  
思ふ秋の夜月

いつこも住まんずばぬ、住まむあふまはまのいろ  
藤原

のーばーろーせん

遠くもあゝ嵐のまふら **福** 指りみる人目おははかお

おとほらば

照すもせす日暮りもそとぬここの夜月花をめて

あふけり 大い

行もも心にしめを思ふもいかに涙のまら ちうにけす

甘の香のまふらとさくらんおとほえまはしめおと

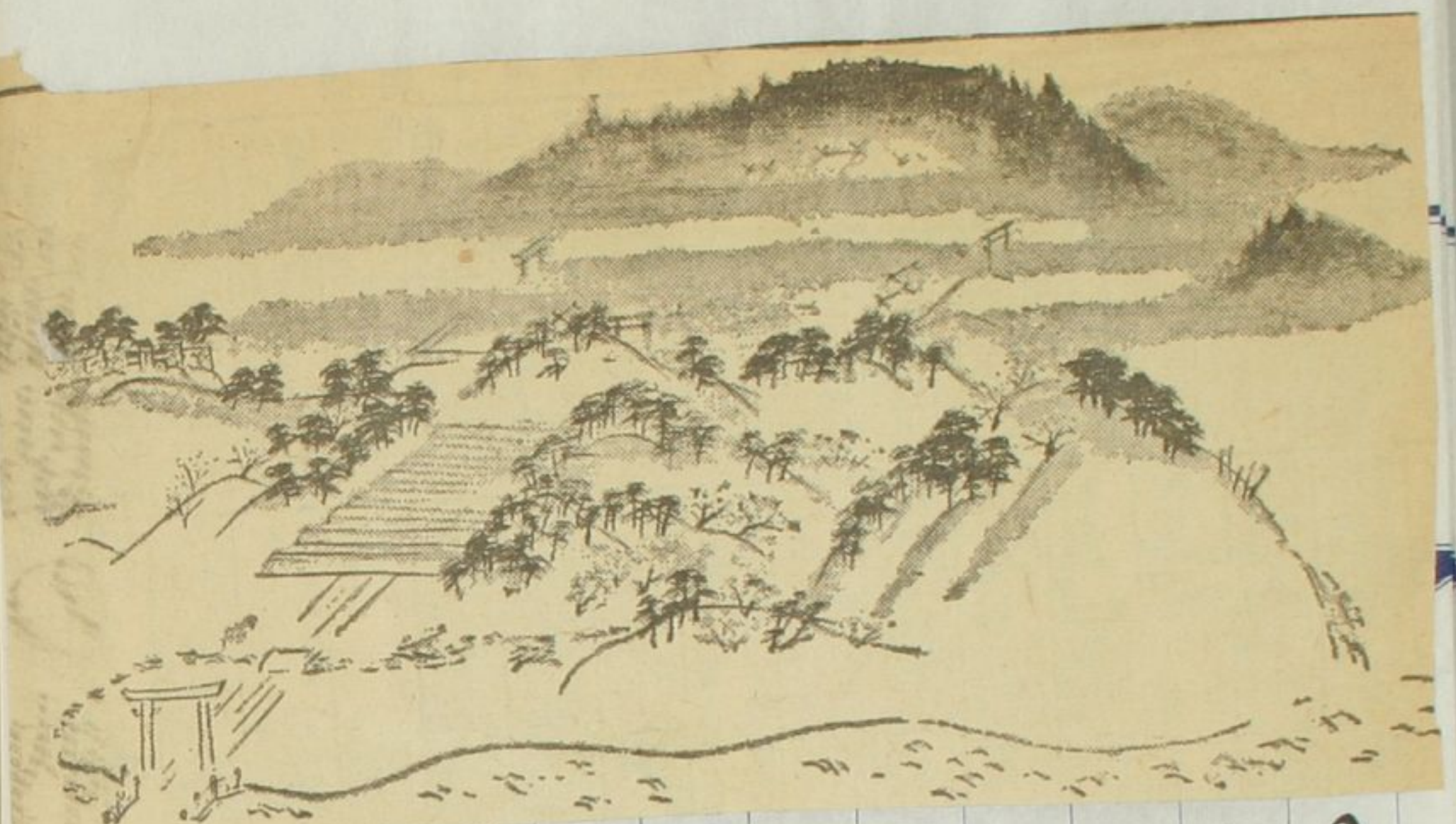
身もまん 新志

胸はもえ袖り流しとんつ、火あに入るまよとま

まのまふれすかまろ消ゆる夜をとも形ににおきて

秋のりくま





靖國神社

地域と修治

すまふ後

あるが、修治

すまふと近所

の天壇

元北とも中本

ももコノ位を不



伯耆親大山横  
が、

日本精神を尊ぶる横山大観畫  
伯耆、先日、下谷區の有力者が  
ら、區内遺蹟へ贈るために、靖  
國神社を描いて呉れと頼まれた  
一日

ない、狭いのが國圖が難然とし  
てゐるからだつた。大觀畫師の  
藝術的良心は遂にこの依託畫の  
御筆を辭退したのである。こ  
んなことを申しては誠に相違ま  
ないが、今の靖國神社は、あん  
まりお粗末です。私の拙い筆で  
は描けません、つくづく現状に  
對して不潔を感じました。私の  
理想としては、神域擴張は勿論  
ですが、出来れば社殿の背後を  
山下するか、地盛りをして社殿  
を高くするかしたいのです。参  
道は現在の坂一杯の石段とし、  
段々は九ツ、舊行社のある所も  
山にして松と山櫻、楓を植ゑ、  
社殿の裏山は杉の森にする。神  
域は坪で圍み、三ヶ所の鳥居か  
ら入り、城内に掘り抜き井戸を  
掘り、この水を坂下の参道へ流  
して御手洗とし、一の鳥居は  
堀を渡つた所に建て、木造  
でありたい。電車やバスの車掌  
に注意されなくても前を通れば  
自然に頭が下がり、襟を正した  
くなる様にした方がいいです。  
身命を賭して國家に殉じた思  
害に對してする事ですから、  
政府だけでなく全國民がすべ  
きでせう。藝術も徳教化しな  
くてはなりません。國民も眞  
心から神社を拜む様にならな  
くてはなりません。

かちうし欲いと思  
ふことと青い川が  
流神全の境域が可  
く了るいから天壇  
又擬し七か所の靖國  
神社境内七天壇の  
地域はあつてと  
忠へてあつた代  
のは五人あつた時三  
條山場寺の地  
區は三十万坪も  
のきれにたか、と

藤原製

を思ふも大抵此をれするが現在の家じりんを修治か出来るか  
どうか、横山大観のあまをうかがふに揚ぐの如くであるが大抵社殿  
のある下と丘はあつたの、然るに九か所を考へて九個のあ  
つたもの、即ち修治か出来るか、森林帯で修治か落るもの、  
即ち一の、修治かの、こんな庭園を、作るに及ぶ、可成り大い  
なることか、肝要である、九か所、下は鳥居を設けるものも修治か  
するもの、九か所、上は参道、の、上り口とする、軍人今昔のやうな  
修治か物の修治かの意味である、地形上あつた境域は  
包合するからか、修治か。祖傳あつたか、見ると、九か所、上は、修治か  
する、森林を修治かやうに、修治か、修治か、修治か、修治か、  
修治か、修治か、修治か、修治か、修治か、修治か、修治か、修治か、







○在大阪の書田群三郎が父祖の記述を「徳川後嘉録」として出  
版し、その書名を「徳川後嘉録」として、此人の白井村の人の、先代が宗政政の  
書に「此の記述を採つて」とあるが、此の書名を「徳川後嘉録」の  
人であるが、親としてあるが、此の書名を「徳川後嘉録」の  
つたことか、江戸、五年式、期、此の書名を「徳川後嘉録」の  
つたことか、江戸、五年式、期、此の書名を「徳川後嘉録」の  
つたことか、江戸、五年式、期、此の書名を「徳川後嘉録」の



持廻りも面倒のありて大庄屋其他改め場所又役人の定まりも  
いろいろ接待をせしむる相寄りの迷惑をうけ、いろいろの費用を  
したること、元禄の改葬、諸貴族の申渡があつたこと、由つて  
推測せしむ、其の布令を右に掲ぐ

宗門奉行

近年凶厄勝ニテ在中一統困窮ノ趣ニ付宗門御政ニ御北書付の  
通被仰付候に相心得下役中へも可申付候

書付

一 近頃田畑作勝ニテ在中一統困窮ノ時節、御得心、毎春宗門  
御政ニ付て下方失費の少迷惑と及候趣に付所役人廻在中  
人馬過不足跡付所取扱止候旨申付奉り、御書付不物先格  
成趣相寄き大庄屋一各に申付、止意の御内引掛候こと

一 一式上より御取賄被成、大庄屋小庄屋、言の御政一様  
入念相勤、其の一切不相構候御申付候

一 来春より南北工注用上等一人並、手州注用方二人、附添相  
廻り注用取付候御取付候、人馬過不足又ハ差掛候

一 公私の同辨注用注用上等一方、申渡可致奉り候

一 廻在の御役人末々迄止意所、大庄屋小庄屋並、寺社  
御役目所出入の御物の品、御書付も書物持出候御堅可  
為御用候、亦御用の御同等、御書付申付候

一 多量御紙、早殿草鞋等の御品御分入用の御書付、  
大庄屋小庄屋等、相勤御書付、相勤御書付、御用候も、  
御用上等方、相勤御書付

一 御書付の儀、一式受取の書、申付置、先七右の書、



- ・御後人末々直ニ用向申候御聊公の事等と無用候
- ・金車の儀上り認め候在候相心付一候也書路斗
- ・大庄屋定より上下一候御高仕舞三候候、病後廻り
- ・小頭並ニ干附の高夜中廻村の事ニ付別殿夜合并申
- ・被下候
- ・結信御改場是迄、菟園の事未奉と御後付御事申候
- ・御付候
- ・鋪越の儀美草越由付候是、先々送送りの御理候
- ・大庄屋中、中付候書付書相付、下下後干附事と御得
- ・一、申下候
- ・大庄屋定、墨障子道垣取候等一切相止下りの御相心
- ・御付候申下置候

標原製

- ・病後先々、近々病入、高草、相掛候人夫病人百更村にて
- ・給為踏一、〇候
- ・看付先々、近年高草、為所、高草法、及以前より
- ・干附とある法、〇候
- ・大庄屋定、止者別割
- ・上の御、一、〇候
- ・次の御、注用上、字、〇候
- ・三の御、小頭
- ・四の御、是程、注用方、〇候
- ・町家法、改、〇候、在、中、〇候、被、御、付、候

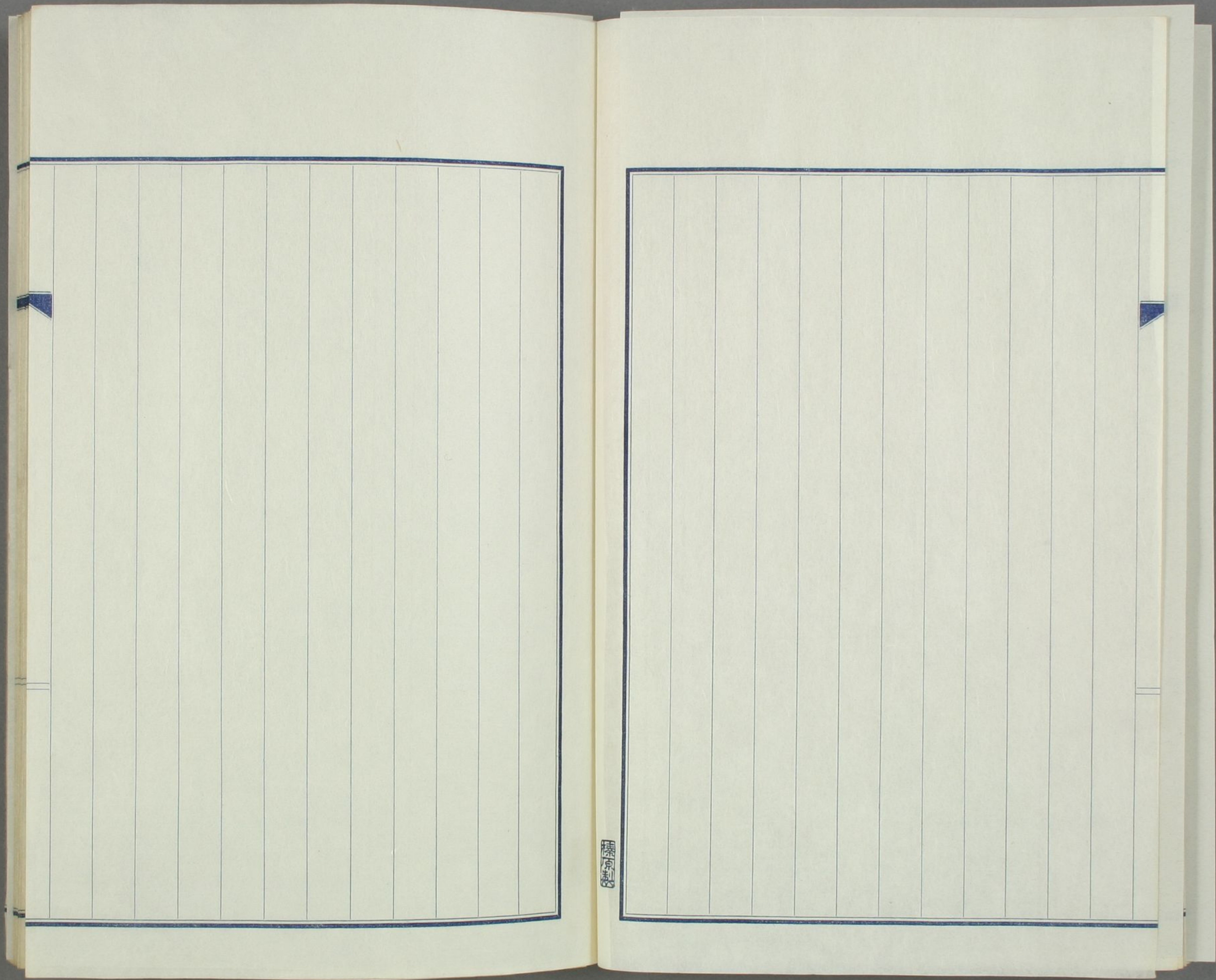
已上

此船、被、あ、り、〇、候、を、〇、候、を、〇、候、と、〇、候、人、出、候、〇、候









補河世



○皇軍の連くん重長と空輝うりちう持の蛾眉山、遊けし  
相変るゝ家海を放つてゐる、日英合決に柱げし英の筋脈  
を以て、所持の氣を擡み英の動も怨言を云ふてるん、英回分  
すむの關係もあつて、日英合決の原則を今もいふてゐる、  
持の動も氣を擡み、英の動も怨言を云ふてゐる、  
この所へ、木回の左指あつてゐる、英の動も怨言を云ふてゐる、  
あふ、持も木回をいふてゐる、最早断き、魔よあつてゐる、高は、  
つてゐる、英回もあつてゐる、面日日本もあつてゐる、  
あつてゐる、和塗の氣を擡み、英の動も怨言を云ふてゐる、  
日本もあつてゐる、和塗の氣を擡み、英の動も怨言を云ふてゐる、  
の向に、和塗の氣を擡み、英の動も怨言を云ふてゐる、  
和塗の氣を擡み、英の動も怨言を云ふてゐる、



たし



英外相 極東策の弱點暴露

【ロンドン本社特電三日發】ハリファックス英外相は三日の上院で演説中支那問題に言及したが、大體はひび古されたことを繰返したに過ぎない、表面は非常に強硬のやうで英政府の政策の不變更を説き、日本の反英運動を厳しく駁論したが、二つの重大な點で弱味を暴露したのは注目すべきである、その一は通商條約廢棄問題で、米國の例に倣ふことは考へられないではないが、通商條約廢棄はよほど慎重に考慮しないと云ふ、



いし、かつ自治領との意見の交換が絶対に必要である、これはチェンバレン首相も言明したがハリファックス外相が再び繰返したのは意味が深い、第二は英國が法幣の支持を續けるかどうかについて、法幣の支持を續ければ支那には都合がよいが、英國としては現在他の多くの國に財政的義務を負ひ、考慮を拂はねばならない立場にあることを忘れるわけには行かぬ

と述べて暗に法幣にこれ以上單獨につき込むのを躊躇する意向を示した點である、通商問題に關しては米國と別に折衝中だが、法幣支持で米國が積極的援助を承諾しない形勢であり、法幣問題では英國も策に窮してある事實がこゝに反映してゐる、しかして結論としては昨年以來の仲介論を繰返して「極東問題に關する眞の目的は現在の紛争の公正妥當な解決を發見するにある、英國が仲介者たり得る時期が来るかも知れない事は來らんことを望むもの」と述べた、これもまた目新しいことではないがこの際再確認したことは注目されてよい【寫眞はハリファックス外相】

【ロンドン三日發同電】ハリファックス英外相は三日上院において議員の質問に答へ次の如き要旨の言明をなした  
一 日本政府は英國政府に對してその極東政策を變更せしめるやう要請したこともなく、またかゝる要請を受けたとしても英國政府は拒否したであらう  
一 英國政府は侵略を看做しはしない、しかし支那における日本の特殊の立場は承認する用意が十分ある  
極東問題に對する英米佛三國の政策的根本目的は頗る密接かつ同一であり、英國政府は絶えずその意圖乃至行動に關し米佛兩國政府に對し情報と與へるのを怠つたことはない  
一 英國政府は治外法權の問題は平和が克復した時、完全な獨立國たる支那政府との間に討議する用意を有してゐる  
一 スピーア中佐事件、天津の封鎖強行、次第に増加する排英運動の存続はいつれも英國政府の最も重視する間である

「極東問題に對する英米佛三國の政策的根本目的は頗る密接かつ同一であり、英國政府は絶えずその意圖乃至行動に關し米佛兩國政府に對し情報と與へるのを怠つたことはない」  
「英國政府は治外法權の問題は平和が克復した時、完全な獨立國たる支那政府との間に討議する用意を有してゐる」  
「スピーア中佐事件、天津の封鎖強行、次第に増加する排英運動の存続はいつれも英國政府の最も重視する間である」

標準製

出征の





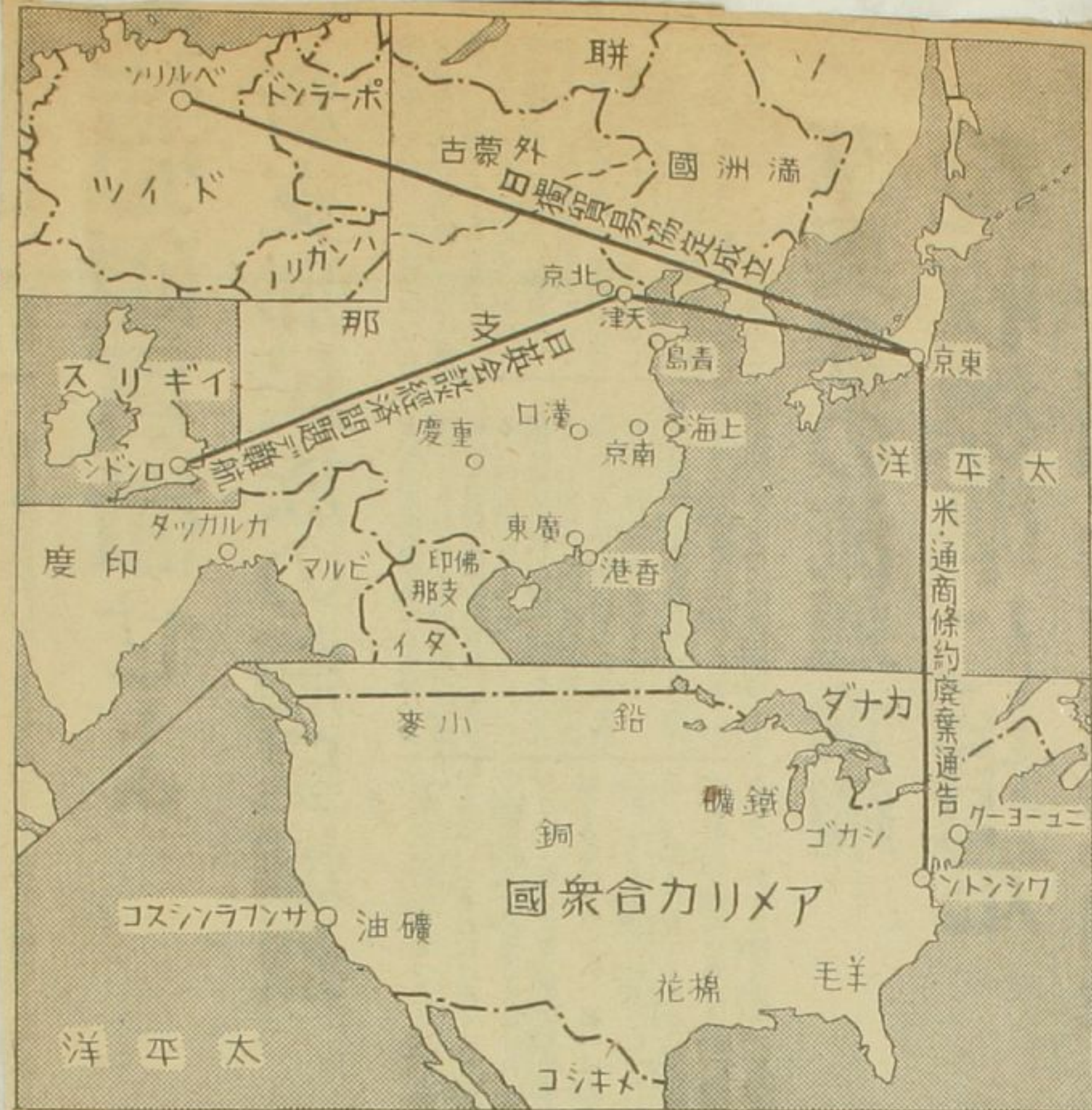


この日依ると英園の全く田舎状態を打聞の策を得たる  
なり。駐英大使も訓令か一日とわくんでゐる。日本の法別を  
せぬ。名義をたがふ。英の強き法別を欲する。よめり  
やうである。英が現に頭痛と病んでゐる。歐洲の諸國  
双方の法別を講ずる英の欲する所なる。英の早もたず  
味の干近から歐洲諸國がある。その早もたず東方を  
歐洲に專らする。原則を講ずる。英の早もたず日本の  
を皆人に此の公認をせしむる。現にの停戦も如何せんとする。英の  
きりし及英の日本の方を支拂ひの内に入れたる。感入  
る。英の早もたずしてゐる。其の原因は此の停戦である。の  
は、治め問題と行政問題。不可分の問題で、引放す。は、治め  
も何もうい。英の早もたずしてゐる。英の早もたずの  
格差をな

藤原製

何せんとする。英の早もたずしてゐる。四民政府の由つて格差を守ると  
する。格差を守らる。利が意味とまの。納ん。其の  
那を成す。格差を守ると。格差を守ると。格差を守ると。  
の。或行も拘泥する。現に自家の格差を譲渡する  
道である。英園の支拂ひ格差を譲渡する。供する。是れ  
する。格差を守ると。格差を守ると。格差を守ると。英園の  
つて格差を守ると。格差を守ると。格差を守ると。英園の  
五日記





### 時局週圖

日米通商條約の廢棄に呼應するが如く日米貿易協定の成立が發表された。この協定の結果は單に日米間の貿易額が増加するばかりでなく、兩國間の經濟關係は相互依存性を増加し、戰時平時を通じて必要なる資材をドイツから一層多量に供給される。わが國の生産力に充てんに拍車をかけ、國力の充實に寄與することを得るわけである。

日米通商條約の廢棄とともに日米會談は經濟問題の討議で難航を示し、英國は勢物にわが主張を拒否せんとするが如き様子を見せはじめた。米國の突進の條約廢棄はいろいろに傳へられてゐるが、來年の改選を控へたルーズヴェルト大統領の對内的人氣挽回策との見方も多い英國が自己本位に解釋して米國

からの援兵と信するならば、われにはドイツの物心離面にわたる支持がある。

ウオルター・リップマンは支那における米國の立場を大體次の如く説明したことがある。

支那における日、英、米はじめ諸列強の投資額を見るに米國の投資額は列強投資總額の十六分の一、英國の六分の一にも過ぎないのである。

米國の對日支那經濟關係について見るに、日本國內における米國資本の利子額及び投資額は支那におけるよりも夥多である。世界貿易においても日本との對立は日英の對立や英米の對立ほど激しいものではない。しかも日本は米國の第三の顧客であり日本は支那より二倍乃至三倍の米國生産物を輸入してゐる。更に米國は滿洲國の成立によつて米國の對滿貿易が防鎖されると心配したが、滿洲國成立以前の貿易に對し滿洲國成立後の對滿貿易は二倍以上になり、上昇の氣勢を示してゐたのである。米國の極東貿易通のダウソンドはこれ等のことを力説して來た。政治的に日本は米國の排日移民法案以來米國に遷移ばかりして來た米國今回の行動は日本の信譽を無視したものだといはざるを得ない。

日米の貿易關係を見るに昨年度における日本の米國からの輸入額は九億一千五百萬圓で、總輸入額の廿七億圓の三割四分、對米輸出額は四億二千五百萬圓で日本は總輸出額の廿六億五千六百萬圓の一割六分、日本が米國にとつて如何に大切な顧客であるか、わかる。米國からの輸入品の主要なものは棉、石油、銅、鐵、農産品など日本からの輸出は生糸をはじめ植物性油脂、鐵、農産品、玩具、絹織物、罐詰食品、茶、繻織物、硝子などである。







# 原則の全支適用諒解

## 協力を希望せば許容

### 奏上後平沼首相語る

【武州金澤發】平沼首相は廿二日午後一時東京を出發午後二時一日濱濱市金澤東區旅館に落つた後同四時葉山御用邸に伺候、有田・クレイギー東京會議の經過並に結果を委曲奏上し御下殿に報告、約一時間にして午後五時退出した、ついで湯後内府と約廿分會見、午後五時五十分東區旅館に到着した、午後八時同旅館で記者團に對し左の如く語つた

#### 日英會談

今度の會談で一番苦心したのは取崩論を先に出したことだが、これは當然やらねばならぬことだから非常な決心の下にやつたわけだ、これで時を越えたといへるだらうが、これから現地交渉があるからまた安心は出来ぬ、しかし取崩がきつたのだから現地交渉も順調にゆくだらう、この原則は支那全般に亘るものであるから單に天津に限つたことではない、この點はクレイギー大使も十分のみ込んでの話をたつたから決して誤解はない、これで英國が日露支の相互關係を認めるならば英國の在支利益は東亞新秩序と無難しない範圍内で認めるつもりだ、また英國が今後東亞新秩序に協力したいといふならばこれを受け容れてよいと思ふ、日露戰爭直後は外國の利益の侵入することは危懼だつたし當時はこれを排斥してゐたが、今日は情勢

も變り二重差支ないことである、今後蔣政權に對する英國のクレチット設定なども行はれまいと思ふ、蔣政權に對する武器の輸出は個々の商人が勝手にやることだが、これも對我利權行爲の一つとして算へねばならないからこれも次第に途絶せらるだらう、要するに英國政府はかかる行爲を防ぐためにも在支英國官憲は勿論一際英國人にも本會議結果の趣旨を徹底させてくれることと思ふが、この點は特にこちらからも希望してゐるといふことだ

#### 排英運動

#### 對歐洲策

國內の排英運動も今後政府の方針に反するものは取締る方針である  
對歐洲策については既定方針通りやつてゆくつもりだ、日英會談とは何の關係もないしこれはこれで考へてゆけばよいことだ

まは問題は別であるといふ意見である、たゞ一つはナンシヤル・ニュース紙だけは東京會議と海幣の暴落を結びつけて「英國政府が東京會議の結果、海幣の支持を中止した」といふセンセーショナルなニュースを傳へて注目をひいた、その要旨は

○虎臨三月廿一日午一〇時頃北河廿界政府の推移を視察すことか日課である。平沼首相は廿二日午後二時東京を出發午後二時一日濱濱市金澤東區旅館に落つた後同四時葉山御用邸に伺候、有田・クレイギー東京會議の經過並に結果を委曲奏上し御下殿に報告、約一時間にして午後五時退出した、ついで湯後内府と約廿分會見、午後五時五十分東區旅館に到着した、午後八時同旅館で記者團に對し左の如く語つた

○虎臨三月廿一日午一〇時頃北河廿界政府の推移を視察すことか日課である。平沼首相は廿二日午後二時東京を出發午後二時一日濱濱市金澤東區旅館に落つた後同四時葉山御用邸に伺候、有田・クレイギー東京會議の經過並に結果を委曲奏上し御下殿に報告、約一時間にして午後五時退出した、ついで湯後内府と約廿分會見、午後五時五十分東區旅館に到着した、午後八時同旅館で記者團に對し左の如く語つた

○虎臨三月廿一日午一〇時頃北河廿界政府の推移を視察すことか日課である。平沼首相は廿二日午後二時東京を出發午後二時一日濱濱市金澤東區旅館に落つた後同四時葉山御用邸に伺候、有田・クレイギー東京會議の經過並に結果を委曲奏上し御下殿に報告、約一時間にして午後五時退出した、ついで湯後内府と約廿分會見、午後五時五十分東區旅館に到着した、午後八時同旅館で記者團に對し左の如く語つた

○虎臨三月廿一日午一〇時頃北河廿界政府の推移を視察すことか日課である。平沼首相は廿二日午後二時東京を出發午後二時一日濱濱市金澤東區旅館に落つた後同四時葉山御用邸に伺候、有田・クレイギー東京會議の經過並に結果を委曲奏上し御下殿に報告、約一時間にして午後五時退出した、ついで湯後内府と約廿分會見、午後五時五十分東區旅館に到着した、午後八時同旅館で記者團に對し左の如く語つた











病痴のつんくしかあてをき敬とて印法と書き足しけり  
理をかくて見て、五六頁の序文が出来た、言の人は示す考ある  
青いれもむまのいけを、自分のもの、行歴心もあるから、これ  
を反故とて、七思をさし、いかに出た、随筆の多分、自分の  
の最後の随筆、とあつくと思ふから、其の末尾にぬめるこ  
と、これ、随筆、と頁も三頁と出るのと、よかから、せめて  
三頁と十頁位と、いかに思つて、いかにかくて、印の流るる、印  
影の流るる、いかに思ふが、さかぬ、いかにせよ、さかぬ、さかぬ  
てゐる、印は印が、印の改刊の随筆、とわつて、いかに、と  
七あるが、せんを再出すること、欲するから、収めて、随  
筆の名に、いかに、朱、照、す、や、ん、と、い、は、



印ハ金石の最ふり、いかにあつた、が、家字が、家形、さかぬ、あり、刻法、と、朱、白、の  
凹凸、あり、いかに、希、字、と、錯、字、の間、と、巧、を、弄、する、の、印、と、画、法、が、あ、つ、た、一、寸  
登、り、来、島、の、二、字、を、見、る、雄、雌、の、鳥、が、死、な、し、抱、擁、し、た、り、題、が、あ、つ、た、朱、字  
ハ、山、嶺、の、雄、雌、の、題、が、あ、つ、た、白、字、ハ、河、海、の、題、が、あ、つ、た、支、那、の、雄、雌、の、題、が、あ、つ、た  
ハ、印、を、認、り、し、た、万、寸、の、天、地、に、能、く、あ、つ、た、浩、陽、江、洋、の、勢、を、具、く、  
千、山、紫、翠、月、長、行、の、奇、を、備、あ、つ、た、紅、が、真、と、其、の、題、が、あ、つ、た  
ハ、自、分、ハ、今、試、み、し、印、文、を、藉、り、印、の、趣、法、を、形、容、を、見、か、雨、霞、入、此、  
し、ハ、印、の、め、と、云、へ、朱、白、重、疊、と、山、も、あ、つ、た、と、云、へ、鴻、臨、と、此、と、い、は、  
鴻、臨、海、と、云、へ、或、ハ、花、蝶、比、し、し、ハ、花、舞、蝶、舞、と、喻、ひ、言、ふ、元、  
陳、林、の、趣、あ、つ、た、春、深、柳、春、香、り、趣、あ、つ、た、霜、寒、紅、玉、の、  
い、ち、よ、う、の、印、文、を、見、自、ら、い、か、い、印、の、画、趣、を、言、ひ、あ、つ、た、更、に、い、か、い、と



水ありと、移軍天に彌つと如せ飛ぶるとその詩。山一く印の画紙を  
 して形を容れしあり、其の布衣踏履を極めれば、怪山怪人尺  
 地をく、山川湖水と侵りぬ、山を断つて、其の地があらうと、畫と其の  
 を一にす。金石の中、形方寸をくると、其の詩傳画をを寫すは、  
 以上ハ、山、川、湖、水、の、形、を、一、に、す、と、い、ふ、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、  
 其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、

故人其美相の、山、洋、志、は、遠、子、と、故、人、が、印、行、し、ぬ、人、と、い、ふ、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、  
 此、の、形、代、に、其、の、手、續、を、傳、へ、し、ぬ、其、の、名、刺、を、と、こ、り、と、い、ふ、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、  
 行、し、ぬ、其、の、名、刺、を、と、こ、り、と、い、ふ、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、  
 此、の、形、代、に、其、の、手、續、を、傳、へ、し、ぬ、其、の、名、刺、を、と、こ、り、と、い、ふ、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、  
 行、し、ぬ、其、の、名、刺、を、と、こ、り、と、い、ふ、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、其、の、詩、傳、画、を、を、寫、す、は、

藤原

古川長次郎 (夏草集) 三宅良彦 (草木集)

谷中現 (詩人集) 谷中現 (詩人集)

大田五次郎 (西山) 市川三右

杉村元碩 (眼科集) 清水玄長 (眼科集)

今井宗彦 (眼科集) 小川次郎 (眼科集)

古川長次郎 (眼科集) 小川次郎 (眼科集)

森重勘兵衛 (眼科集) 水心子白布 (眼科集)

成島邦之助 成島仙花

長尾良運 (眼科集) 二宮柳亭 (眼科集)

加藤彦吉 (眼科集) 加藤彦吉 (眼科集)

加藤彦吉 (眼科集) 加藤彦吉 (眼科集)



# 『坪内逍遙』の刊行に際して

市 島 春 城

逍遙君と自分の交は五十年の長きに渉り、其の交は並々のものでなかつた。東京大學で机を並べた時も親しかつたが、早大時代には益々深く交はり、其間に言ふべきことも少からずあるが、それはすべて省くとして、君が熱海に居を構へてからの交りは特に忘れ難いものがある。自分は病後保養の爲め熱海に一週二週居つたこともあり、一年の首めには此地に赴くのが例で、其都度毎日君の莊を訪ふて、朝より正午まで應接したが、多くの場合君の文藝談を聴聞して自分の貧乏腦を利した。或る時は共に節を曳いて梅園其他の勝區を訪ひ、歩しながら君の迷り出る快談に耳を傾けた。君の談話は莊を出る時から始まり、梅園を訪ふても梅も風景もそつちのけにして、君の快談は續き、無意識の間についてとなく踵を廻らして歸路につき、君の莊に歸つても談の盡きないこともあつた。君の話題は文藝百端の事に渉り、或は近く閱讀された西洋文藝家の所説を語られたり、或は昨今推敲中の脚本の内容を語られたり、外國文學の批評をされたりしたが話題の最も多きは君の本領とする演劇に關してであつた。

自分は時に君を訪ふて、數日君の莊に宿泊して家人として、取扱を受けたこともあつた。君の不眠症は此時分君を連夜悩ましたが、君は不眠を利用して思索することが常で、朝餐の食卓に於て昨夜はコンナ事に考へつ

いたなど、語られたこともあつた。晩食には對酌を特に愉快に感じ、深更まで君の快談を聴いた中に、君の胸中秘を漏らされたことも一再ならずあつた。勿論それは文藝上の事であつたが、種々の腹案などを聞き得たのは、多くは對酌の時であつた。自分は君の書齋に寢臥して一夜シミク、感じたことは君と自分とは同窓の友人ではあるが、君に接する毎に種々の教を受けてゐるから、君は自分の師である。

自分は君の門人であるのみならず、俗に言ふ「内弟子」であると、考へたことがあり、今もそれを忘れない。内弟子と云ふは師の家に寄宿してゐる門人を云ふので、他の門人より餘分の教を受ける機會のあるのは内弟子で、内弟子は師の堂を窺ひ得るから早く藝にも達する、他の門人の内弟子を羨むのも此故である。自分は友人と門人と二重の資格を有したから、普通の内弟子よりも更に仕合であつた。君は自分の爲めとあれば、働きかけに進んで種々の事を説かれ、胸中に秘めあることでも、惜むことなく説かれた。自分はこれに由つて、尤も乏しきを感じてゐた近世文藝の大略を君に由つて識ることを得た。君は全く自分の恩人である。友人と呼ぶのは勿體ないのである。併し不肖の自分は君の最も熱心に幾十回か説かれたことを充分受け入れることが出来なかつた。それは多く演劇の方面にある。何故か自分は性來演劇に餘り趣味を感じないので、君が沸くが如く説かるゝ演劇談を聴いては頗る快味を感じるが、さて

それをシミク、受け入れて、演劇好とは成り得なかつた。君は曾つて自分に云はれた、君（自分の事）は何事にも趣味を解する人であるのに、何故に演劇にのみ趣味を持ち得ないのか、君にして若し自分と同趣味であつたならば、君の助けを藉ることが多かつたらうにと。自分は君の内弟子と自ら許しながら、其甲斐のなかつたことを自ら顧みて根然たらざるを得ないのである。

逍遙君叢を易へて既に五年、徒らに生を偷んでゐる自分は、君の傳記を編纂するに當り、長い間の君との交遊に對して、誼としてお手傳をせねばならぬのに、既に老いてそれが出来なくなつた。幸に君の門下に、おのづから其人があつて、多岐複雑なる明治文學の材料を遺憾なく蒐集整理した柳田氏があり、文筆に長じ殊に師の藝術事跡に精通する河竹氏あつて、刻苦幾年、完備の詳傳を作り得たのは、實に大慶至極で、恐らく君の莞爾として満足すること、思ふ。自分は此の傳記のどの頁にも多少の干渉があるので讀みもて行くと、宛がら故人の湧くが如き能辯を聴くが如き思がある。在りし日の君を思ふの情に堪へざるものがある。

この文は近刊の『坪内逍遙』詳傳の爲めに書かれた——『坪内逍遙の巻尾に書す』——の一節で、特に筆者市島先生の御許しを得て轉載しました。







石緑雨たなと敬服の本音を漏した。(またセ、ラ笑ふか)——註。 園點は筆者。因に此の文章は緑雨が三十四歳の折の作である。

古いやつぢやかきのふ京橋區

ことしもまんまと尾張町新町

知十どのへ。何のかのと纏ま

らぬ小田原、いやでもぢきに

あら玉三丁目緑雨より。

移つたは花の散際、當坐の枕詞を蛙鳴くとも申したれど、けふ此頃は鋤返したる小田原の佗住居、袖口の寒いに少しは俳味も覚えながら、庭先の枯枝つく／＼と眺め入つて、あゝ憎い悴をモンカ持つたにしても、こんな時裏口からそつと頭下げて來たら、勘當許すといふであらうと戸籍面を見てもタツタ一人、淋しがつて居る折柄料らざりき御狀到來、ヤレ／＼嬉しや、昔の知り合からと封推切つて讀下せば何の事ぢや、知十老は紙屑拾ひになられたさうな、御書きすての御反古にてもとはナント不見識を申さるゝではないか、よろづ鼻先の強いが勝ときはまつたに、今では糞蟲とてまかう迄の弱音は吹くまい、全體が此書捨とあるはどんな化物、先づこれからが氣に喰はぬ、そも／＼貴老はそれがしを誰と思ふて

標

であらうとも、廿字詰一枚いくらでも買込むものなら、健腕を揮への何のと肚では藏普請の土方扱ひにする氣でも、御書捨もよし、御反古もよし、飽迄うやく／＼しい商ひ巧者といふ事もありけなれど、本來がタゞで持つて行くならモウ一度胸ぢや、オイ緑雨、何か書かぬか、おらが誌上へ載せてくれるワと、ノウ知十老なせ斯うは申されぬ、ト申してこれから出直されてもそれは遅い、一年が一年まるで忘れて居ても、師走となればそろそろ初荷の支度、あいつも數ぢやと、急におもひ出されるだけ、ソナ前申す通りの大家の餘祿でがなあちらからも肩はござい、こちらからも肩はござい、今やそれがしはお斷り口上を歳暮の折包、八方へ使ひ分けて居る、貴老の方もヤツパリ當分はお斷りなれど、當つて碎けるは男と豆腐、拾ひたいが病ひなら是非もない事、其内春永ともなれば路次の外へ投げて置かぬでもないのサ、マアそれ迄はどうなと勝手に新々派、鼓吹でも横着でも泣かずに遊ばつしやれと、イヤこれは／＼、返事と思つたを原稿紙へ書いてしまつた、關羽のひよつ子髯黒の醒雪もこれをやつたと見える、前號参照、ハ、ア分つた、これが即ち御かきすての御反古かヨシさう來れば主客顛倒、オイと呼べなどは死んでも教へぬ、コリヤ／＼知十この一文、そちに取らずぞ。明治三四の

ぢや、清和源氏何代目かツイ忘れたれど、國は日本、時は明治の文壇に知らぬ者と申したら親類ばかり、緑雨といへば先生といはずに置かれぬ金箔附の大家、勿論俗界では氣違ひにも金箔が附くさうなれど、いつも大家で候ふと腹の減つたらしい顔をせぬだけでも、千松よりは遙にうは手と書いてジャウズとよむ、一字一句苟くもせざる大家に向つて、狼狽へたりな知十老、書捨があると思はつしやるか、それがし未曾て御の字のつく反古を持つた事がござらぬ、何々、有れば疾うの事本町へ宛て、輸出したらうとや、一寸しても其さもしさで俱に與に大家が語れやうか、貴老も御ぞんじ、山谷の栗山善四郎ナ、よし、八百善と申さぬ所が大家ぢやぞよ、あれへ參つて鯛の目玉の棄てるのをくれと言つて、かしこまりました、これだけ棄てますといふ鯛の目玉が有らうものか有るまいものか、ツモリにも知れた話ぢや、知十老、貴老を藤村は若返つたと申されたが、渠も當節では信濃國とせず長野縣としると、郵便局で仰有つた、北佐久郡の居候、山猿にはチト色が白過ぎるかと迄、それがしから貴老を見れば大げけの大げけのモット力を入れて大げけげ、東京で此花の名所を淺草公園とは氣が附くまい、紙屑拾つて史的研究、フ、ン御方便などでも申さうかい、よしんばそれがしの本業が屑製造

十二月、三日の晩に考へて四日の朝に如斯に候、早々頓首。 郵券を貼つてからおもへらく、かうも無意味の手紙がお酒を呑まぬ李太白、たゞのお人に書けやうか、大家なりやこそ大家なりやこそ。

門松の緑雨君へ

春先づ知十より

オイ緑雨、何か書かぬかと云ふ手もまんざら持合せのないでもないが、それは先づ貴君緑雨といふ仁などの使ふ變手でもさういつた向へは正面から尋常に向ふのが無事であらうト送つた手紙でさへツケ／＼コウ罵倒される。どうせコウ出ればア、の一通りでは納らぬ。それへ迂濶に逆手などをかけて飛んだあのうへの臆を冷すほどまでにはまだ筆碌もしない。實は副申も再復もこゝに併載し、飛沫を秋骨君にまであびせてやらうとしたが「開書にては無之候物騒に付御斷り申置候」とのお入念、それを正面に聴て差控へた。紙屑拾ひが屑のひるひ控へをする、ソんな事で商賣がなるものか。筆碌とはそれだと又罵られるかも知れぬ。しかし一切逆手を封じて何事も正面からである。こゝには「恭しく尊稿賜はり、御蔭にて誌面大光彩を放ち可申」と、至て有合せの仕入れ向きの辭誼を正面から表して置く、頓首。







三十七  
知十郎  
井田  
現原  
由排  
難相  
山・水  
田・雨  
百地  
三山  
四三  
年  
月  
新  
十

藤 齋

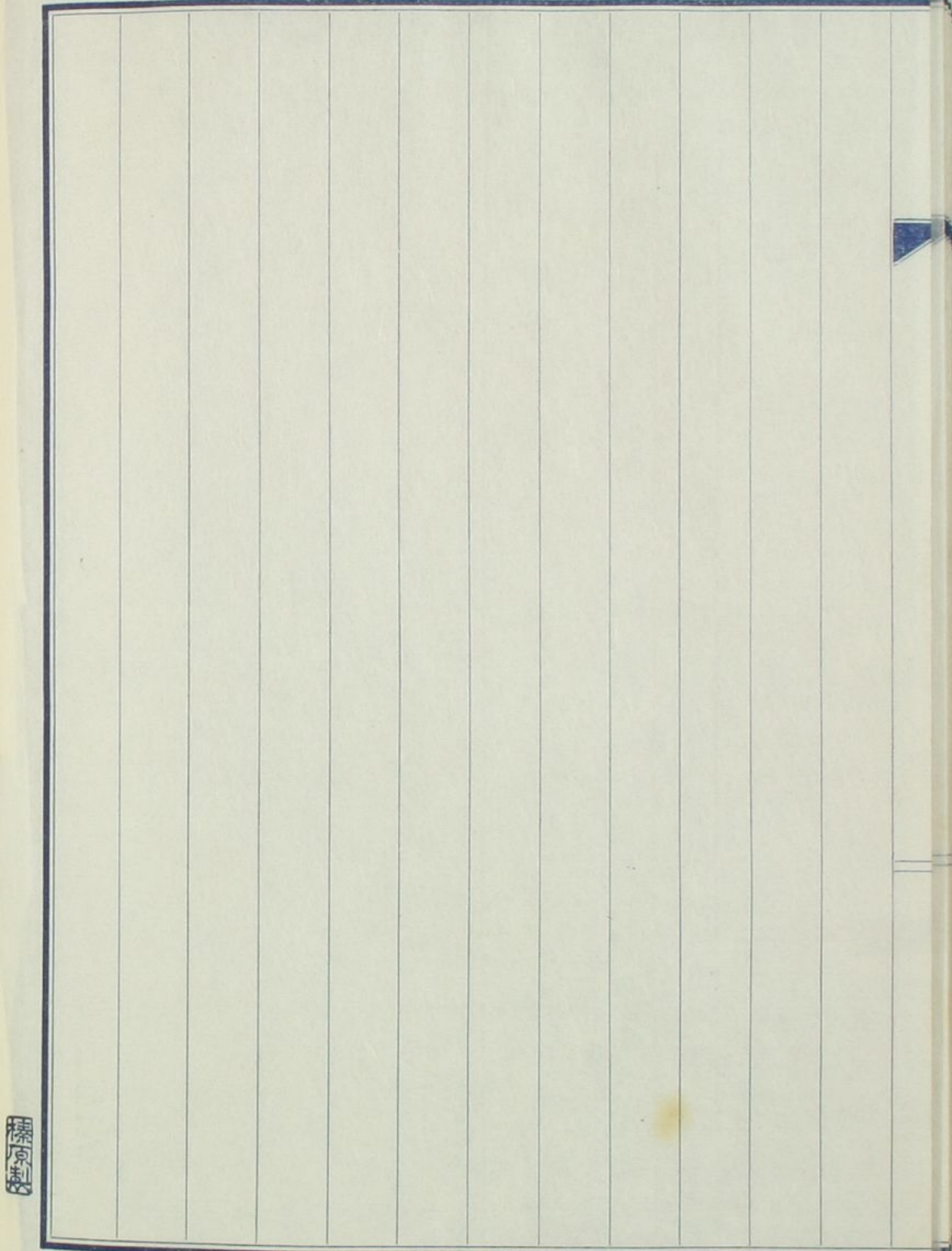
であらうとも、廿字詰一枚いくらでも買込むものなら、健腕を揮への何のと肚では藏普請の土方扱ひにする氣でも、御書捨もよし、御反古もよし、飽迄うや／＼しい商ひ巧者といふ事もありけなれど、本来がタゞで持つて行くならモウ一度胸ぢや、オイ緑雨、何か書かぬか、おらが誌上へ載せてくれるワと、ノウ知十老なゼ斯うは申されぬ、ト申してこれから出直されてもそれは遅い、一年が一年まるで忘れて居ても、師走となればそろそろ初荷の支度、あいつも數ぢやと、急におもひ出されるだけが、ソナ前申す通りの大家の餘祿でがなあちらからも屑はござい、こちらからも屑はござい、今やそれがしはお斷り口上を歳暮の折包、八方へ使ひ分けて居る、貴老の方もヤツパリ當分はお斷りなれど、當つて碎けるは男と豆腐、拾ひたいが病ひなら是非もない事、其内春永ともなれば路次の外へ投げて置かぬでもないのサ、マアそれ迄はどうなと勝手に新々派、鼓吹でも横着でも泣かずに遊ばつしやれと、イヤこれは／＼、返事と思つたを原稿紙へ書いてしまつた、關羽のひよつ子髯黒の醒雪もこれをやつたと見える、前號参照、ハ、ア分つた、これが即ち御かきすての御反古かヨシさう来れば主客顛倒、オイと呼べなどゝは死んでも教へぬ、コリヤ／＼知十の一文、そちに取らずぞ。明治三四の

十二月、三日の晩に考へて四日の朝に如斯に候、早々頓首。郵券を貼つてからおもへらく、かうも無意味の手紙がお酒を呑まぬ李太白、たゞのお人に書けやうか、大家なりやこそ大家なりやこそ。

門松の緑雨君へ

春先づ知十より

オイ緑雨、何か書かぬかと云ふ手もまんざら持合せのないでもないが、それは先づ貴君緑雨といふ仁などの使ふ變手ですういつた向へは正面から尋常に向ふのが無事であらうト送つた手紙でさへツケ／＼コウ罵倒される。どうせコウ出ればア、の一通りでは納らぬ。それへ迂濶に逆手などをかけて飛んだあのうへの膽を冷すほどまでにはまだ筆碌もしない。實は副申も再復もこゝに併載し、飛沫を秋骨君にまであびせてやらうとしたが「開書にては無之候物騒に付御斷り申置候」とのお入念、それを正面に聴て差控へた。紙屑拾ひが屑のひろひ控へをする、ソんな事で商賣がなるものか。筆碌とはそれだと又罵られるかも知れぬ。しかし一切逆手を封じて何事も正面からである。こゝには「恭しく尊稿賜はり、御蔭にて誌面大光彩を放ち可申」と、至て有合せの仕入れ向きの辭誼を正面から表して置く、頓首。



藤 齋

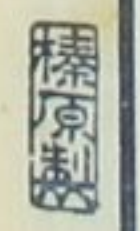






家守のまゝ得たことを恐るゝ所ありし所より  
朽命詩を添くして恐るゝ歎彼れは正しや保記を心し  
りて之を自ら作を致す自ら作の経歴を述す  
六利巧のこゝろ可なり符のありし時と云ふ  
時々の時を得たる詩集なり、又其共の古跡を  
かゝるまゝし、昭和十四年七月十日録す

余、案中、手紙竹島の木米に似て心し、内中二點あり、長六寸六  
分の楕圓形を肉を、粘着細密の山ありと書す、全之を致す  
其印と見しと云ふ、松原印とあるを以て、何れか  
州又模刻と曰ひ、新河の某印と称す、其を以て、  
名曰く、瀧山と云ふ、竹島の模し得たるも、其故あること  
知らぬ。



余の印房多く名家の私印を冠すも、梁名、長六分の印  
を缺く、此種、印水あり、詩可く、傳へ、龜山書、  
竹根印、鈿、木板、刻字、云々、と、  
龍と刻す、其、  
雪、方、元、刀、と、  
と、  
柴、中、  
材、の、  
所、  
る、



樂翁公遺印 印文貞卿字公

蜀成都

杜少陵

先生草

堂古瓦



歲次 庚午

初秋

雪齋

刀

雪齋公增山氏勢制長島領主文政 庚午文化七年也西來約公五年三歲也

抱生晋手拓



東山の侍心と到法中初めてすべしと増山氏は是が法終也とて  
別産起すこととありて書を用ゆる眠業を多量に服して  
早く自入と片つくと業したることありしに就て氣を揉ん  
だりの執事格の生田七郎に帯を解て我を思はうらふれぬ  
夜深更も寝静やくも病室をすべしとて道遠が眠業を  
飲まんとす別所究ん入つて眠業の業を奪取し是を  
の上、投け棄てたのい、道遠の飯想に病れたとす生田の忠  
義主のつとも悪きありありに傳ひて八月八日己未夜突  
の園入せ業業を投け棄てた不心と上腹に痛し無地なる  
つれ。此の園連して道遠が絶る山のふもとに又道遠の死  
以後道遠の業はあつたとす生田が病室復ぬるるといふ業























昨夜安んずるに及ぶ(又云)博士(の長)を以て、  
博士、又云、  
安んずる。



人の世の事位流士に傾倒した人むあつたを自分も一時交つた。去の事  
糸鉤子の各余に服したる終焉の碑をこの地に建てた時の事古田七巻  
合して夏夜に雙鶴飲に枕を無しての事。其ま古田の全然酒量の趣  
い人で酒を喜ぶこと甚しく、酒の女也も余は酒と禁下ると注  
是より時、自分の腹を従はさうだが、彼てあつ酒の中風と云つた  
人の悲愴の流しを始め、此者人の全身を流し、利けず、合人の  
の公の事、任かせ、書得何と云ふのも合さず、夫も便の事、海し  
家人と親すこと非ざるむあつたが、その一、壽命を保つて家人の  
病り果てると、白人の心を抱き、後正の正なることを知り、栗の  
と、此法は入る日、身を流したるも、人を流すも、此即時此言  
と、思ふに、此むあつたが、喜田の酒を飲む、胃腸に死んだと云ふこと  
● 然るに、此も得るものな。

標本製

中風を醫すもの薬と云ふは、贈るもの、中風の古の薬や  
まが、あつた。赤茶の代りに常用するものが、互つとして、茶葉  
と云ふに、白人もあつた。この茶のまじり、茶の小枝を細  
かに刻んだ、よむ葉にして飲むと、見ると、よむ、茶のやうな  
と、飲む、よむ、よむ、よむ、茶葉の、修り、用也、茶  
にして、茶、共に二回服して、效驗を、あつた、よむ、茶、贈  
者の原書と、あつた。



















遺域とすか俣に此國の事あり記を得たから、卷末に收めて  
此酒<sup>酒</sup>を供す。

幸四夜伴の他筆や竹頭を流し見ると、則ち「大公望」の  
一筆があら、又のさき。釣冬夜伴が抄したうまよとてうまつて  
るこゝに後みして物くと、例のあつた者証つくめだが、何れも  
三十の前の人心か、いこの人か、其名が望地か何れか、い  
ハツキリし。文王を拾ういあけし、前におてんやをしてわ  
たか、肉屋をしてあれた、<sup>行</sup>合くすい、露伴七川柳の歌  
れとある。

釣んまよか、い、文王をむく、実り  
じしとてあれまよと、文王をむく、実り

戦時物語の遺る、缺乏してくから、物を惜しんが、女取り不  
て、いさゝか、少く工夫すんが、喜ぶるへき、いさゝかの、役まの、いさ  
くとも、誰れやらの歌を思ひ出さす、三く、世の、十の、同い、や  
昔履も、六、三、い、い、竹筒の皮」

又酒はニ云く

人醒我獨醉、我醉人皆憂、  
酒為酒我為我、我有酒

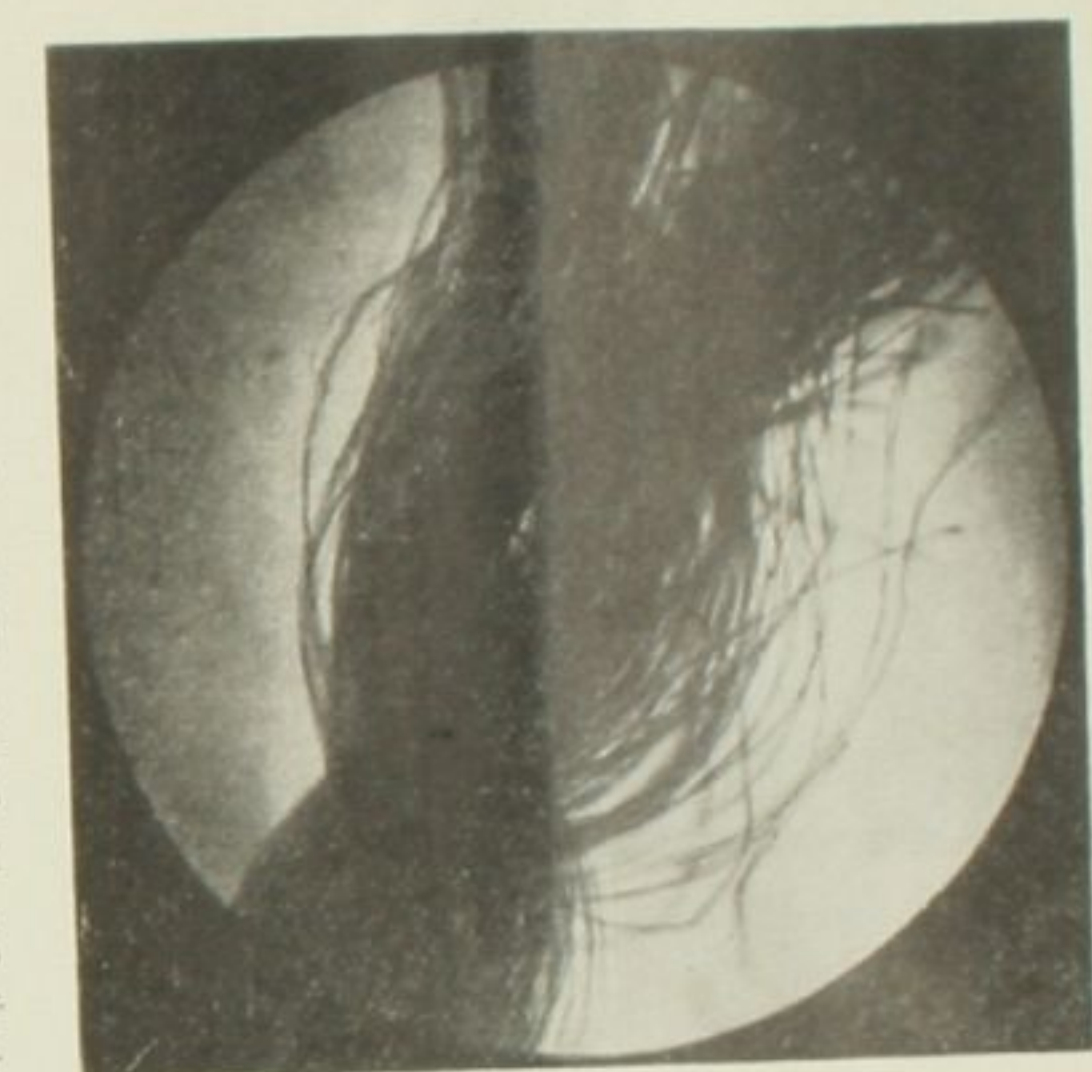




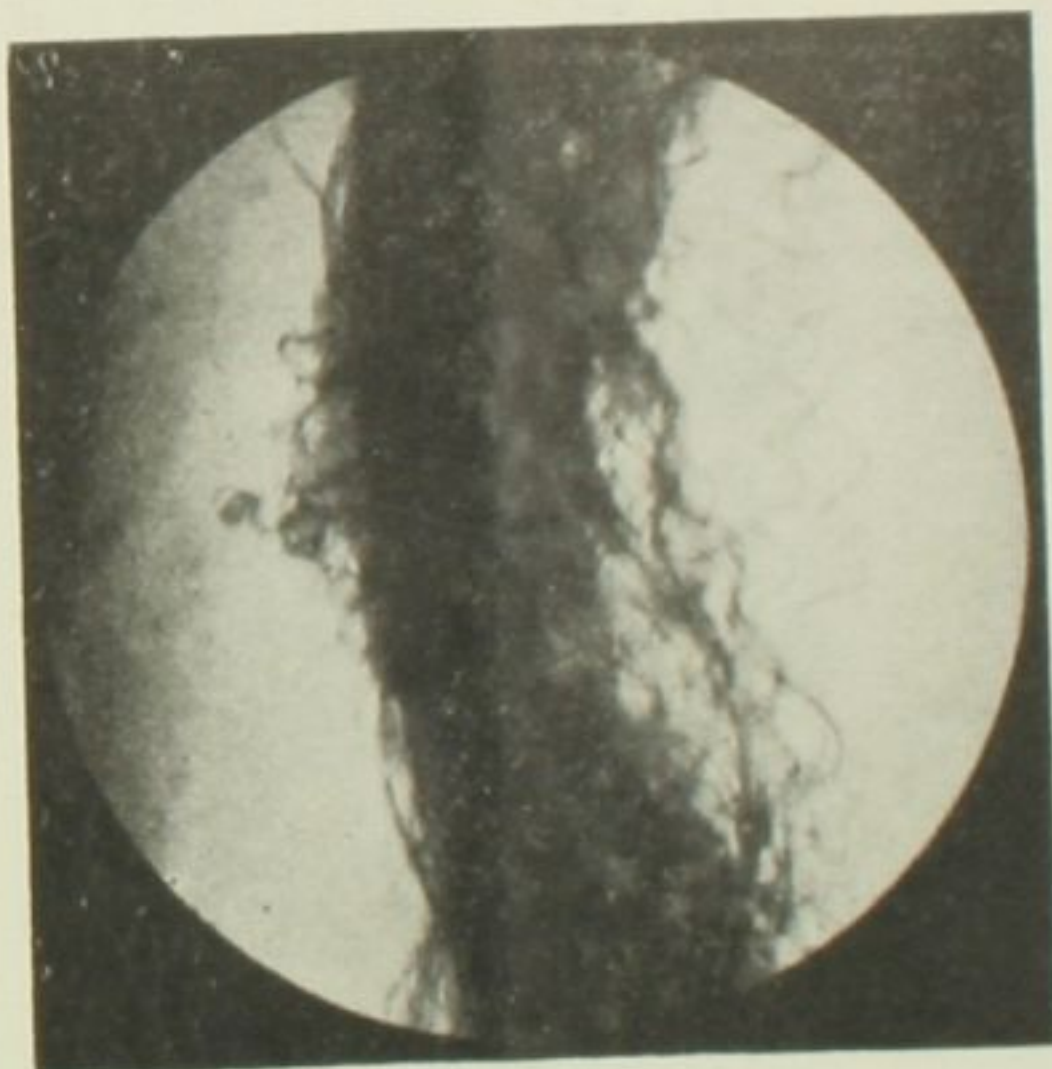


に、このハスイトを「蓮絲」と書いてゐる。この御時勢に、ハスイトに對して「蓮絲」なる漢字をあてるのは誤りであるなどとはいはないが、私が煩を厭はず、漢字を用ふる場合に、特に「藕絲」なる文字を用ひてゐるのは如上の理由によるのである。

こゝに面白い事は、支那では古來藕絲なる文字を眞のハスイトの意でなくて、最上の絹絲の意に用ひてゐる事である。



第2圖 A 絹絲



第2圖 B 藕絲

第一圖の絹絲及藕絲の各一本を約30倍に廣大したるもの

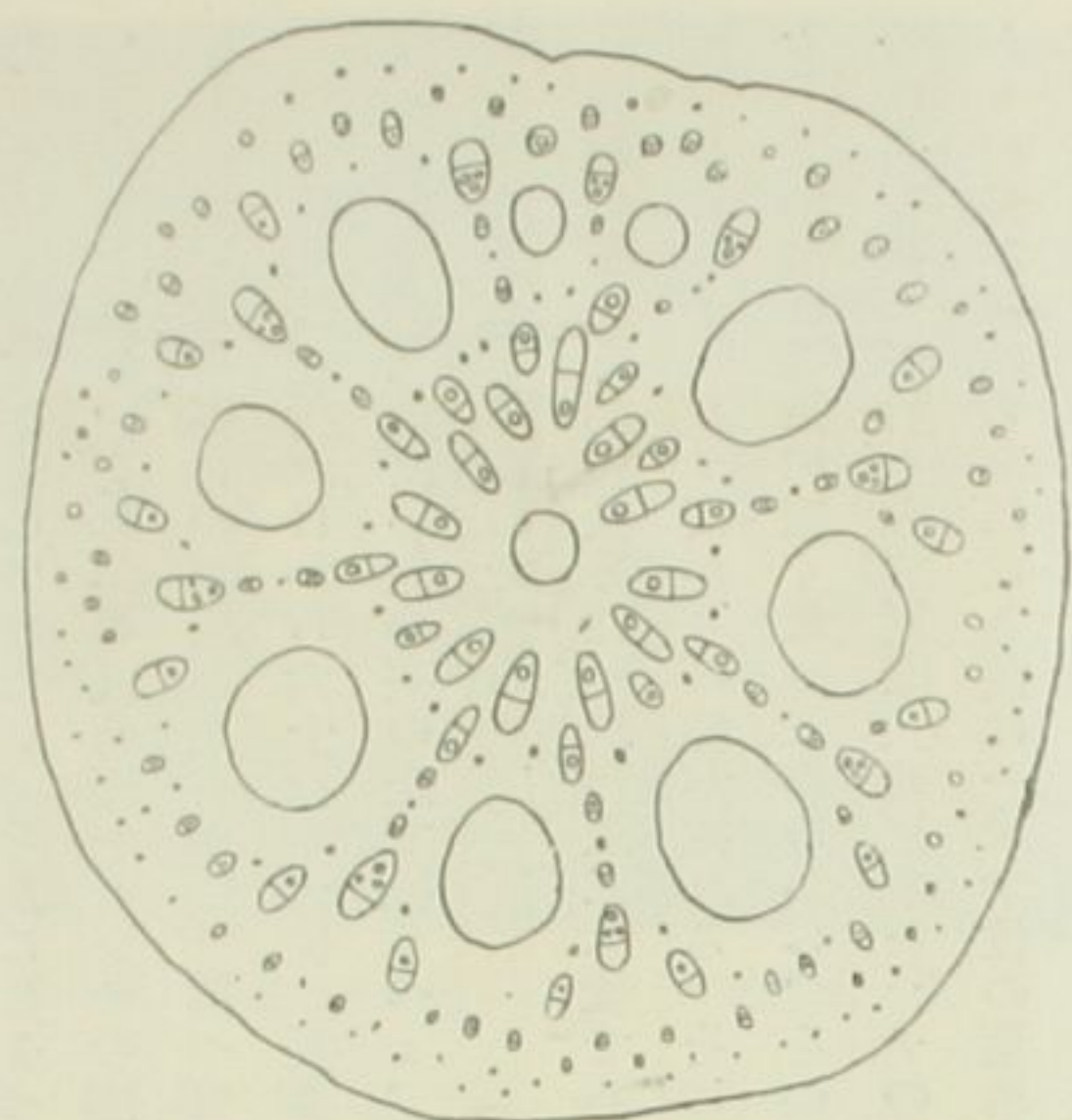
元來絹絲は、支那では世界中で最も早く作られてゐたのであるが、私はハスの根や、葉柄から引出した絲は人類に利用された絲なるもの、最初のものであり、絹絲は寧ろ其の後になつて實用となつたものではないかと考へてゐる。然もこの絹絲はいつでも容易に繭から引き出されるが然し、多量に採り得ない藕絲に劣らず、色艶からいつて古來貴重なものとしてされてゐるから、絹絲の最上なるものを藕絲になぞらへたものと思はれる。支那で藕絲なる文字は古くから用ひられてゐる。即ち唐の杜市の詩にも「公子調氷水、佳人雪藕絲」などといつて

ゐる。當時は貴族間でも夏期に氷を食べる事は容易でなく、非常に贅澤なものであつたらしいが、斯やうな場合に、氷水に對して美人の引き出した藕絲を夫になぞらへてゐる。また陸放翁の詩にも「細腰美人藕絲裳」といふやうな句がある。この場合に藕絲といふのは、實は絹絲の美稱であると

註が加へてある。尙幾つかの同じやうな例を擧げる事は出来るが、とにかく昔から支那では藕絲を非常に貴んでゐた事がわかる。

又藕絲なる文字には、この如く貴重な織物の材料とする絹絲の美稱の意ばかりでなく、全く別の意味で用ゐられてゐる。即ち夫は、法華玄義にある「見惑頓斷如破石、思惑漸斷如藕絲」の如く、思ひきりのわるい纏綿たる情緒をあらはす場合である。志士郭沫若が、久しく亡命してゐた我國を去つて國難に赴いた時の詩中に「斷藕絲」の文字があつた。

採絲の方法 この藕絲は如何してとるかといふに、これは前にもいつた如く、蓮根からでも、葉柄からでも、其他何所からでも採れるものであるが、今試みに、食用の蓮根を手折つて見れば、其切口から白い絲が澤山引き出される。この絲は蓮根中にある維管束の導管から出てくるのであつて、この導管は肉眼ですぐに見える大きな八個乃至十個の孔とは全然別個のものである。今蓮根の横断面を熟視すれば、凡二三百個の導管の點在してゐる事がわかる。この導管の壁から螺旋になつてゐる絲が解けてくり出されるのであるが、その一本一本は、三四乃至二十條の繊細な無色の絲の束であるか



第3圖 蓮根の横断面 ×12  
10個の藕孔と數百の維管束との排列  
維管束中にある一個又は二三個の導管より藕絲が出る

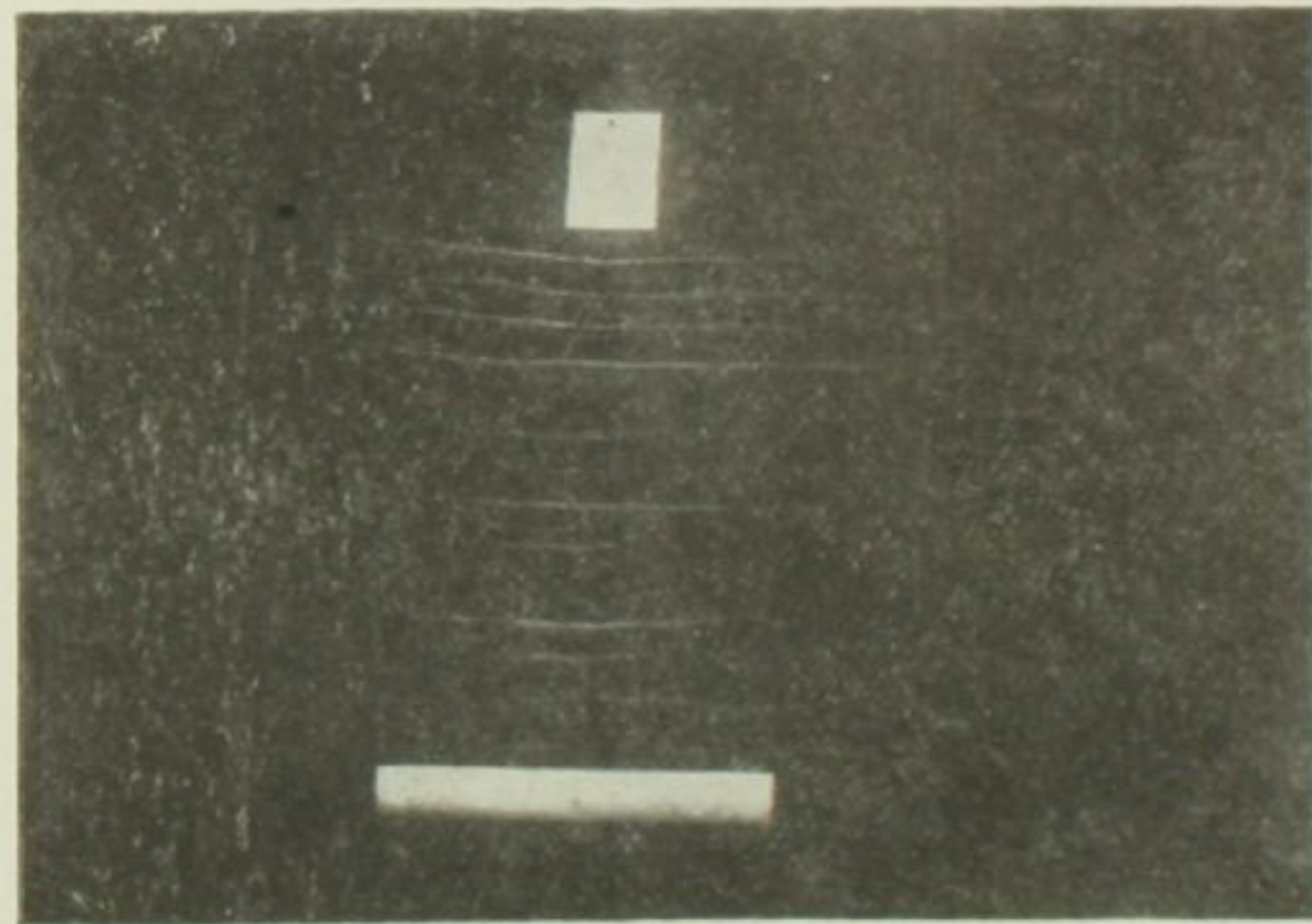


ら、一本の蓮根から出る絲を捻り合はせると、實に數千本の繊細な絲が集まつて一本の所謂藕絲を作つてゐる事になるのである。(第3圖及第4圖)

通例藕絲を多量に集めやうとする場合に、最も採り易いのは葉柄からであるが、この藕絲は誰にでも容易に採れるもので、決して特別な技巧などを要するものではない。それには先づ葉柄の表面にある刺を庖丁で削り落し、それから五乃至十センチの間隔を置いて小刀で淺く傷を付け、その傷口の兩端を左右兩手で持つて折り、逆に捻つて左右に引き出せば、折れ口から六十センチ位の長さの絲が出てくる。この絲を膝の上か黒つぼい色の臺の上で捻りつゝ、順次につなぎ合はせて長い絲に拵へ上げるのである。

**採絲の量** 葉柄の長さは一米乃至二米位であり、五乃至十センチの葉柄から六十センチばかりの絲が採れる。そして技術上、其中央部は太くて兩端は次第に細くなつてゐるから、その細い部分を順次に重ね合はせて捻つて行くと、實際五乃至十センチの葉柄から二十センチばかりの絲が採れる事になる故に一米半位の葉柄から採れる絲の長さは約五六米である。

斯くして採り出された藕絲は捻り方がわるいとフワ／＼であり、比較的に軽いものであり、そしてこの一匁を採るに葉柄二、三十貫目を用意せねばならない。この二、三十貫の葉柄は水田約一畝分である。即ち、一反歩より十匁、一町歩より百匁の絲を採り得るわけである。故に之を経費に見積れば藕絲は實



第4圖 8セムの蓮莖より引出した絲。莖の上部と下部とにより出る絲に長短が見られる。一般に上部の方が長い

に純金に匹敵する價額となるのである。

**採絲の時期**

それから、採絲の時期であるが、それは九月中旬、地中に深く蓮根の完成した後でなくてはならない。こ



第5圖 蓮莖より採絲の作業 (千葉縣木更津)

れより以前に葉柄を取らんとすれば、未だ蓮根とならない細い地下莖(密、「はい」とか「つる」といふ)を踏んで生長を害する恐れが多分にあり、又これより早く葉を取り除けば、同化作用を営む機關がなくなるので、營養不良となり、地下莖の發育を害し、秋になつて満足な蓮根が出来ない。故に藕絲を採る好時期は、蓮根の完成した九月中旬以後、葉の枯れてしまふ十一月月上旬まで約二ヶ月間だけであらねばならない。

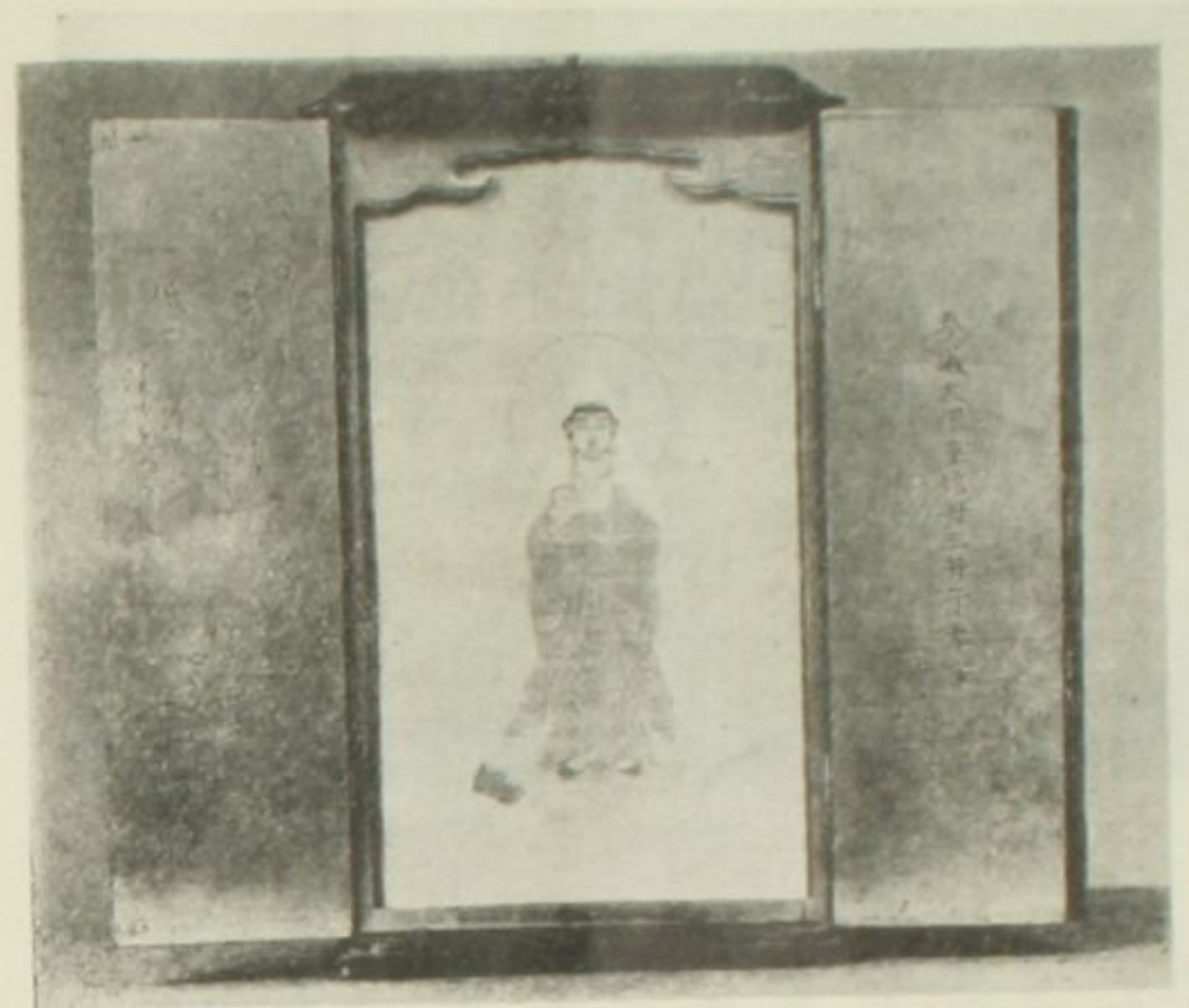


第6圖 經絲・緯絲共に藕絲を用ひた平織 約方8匁 (木更津中學校蔵)

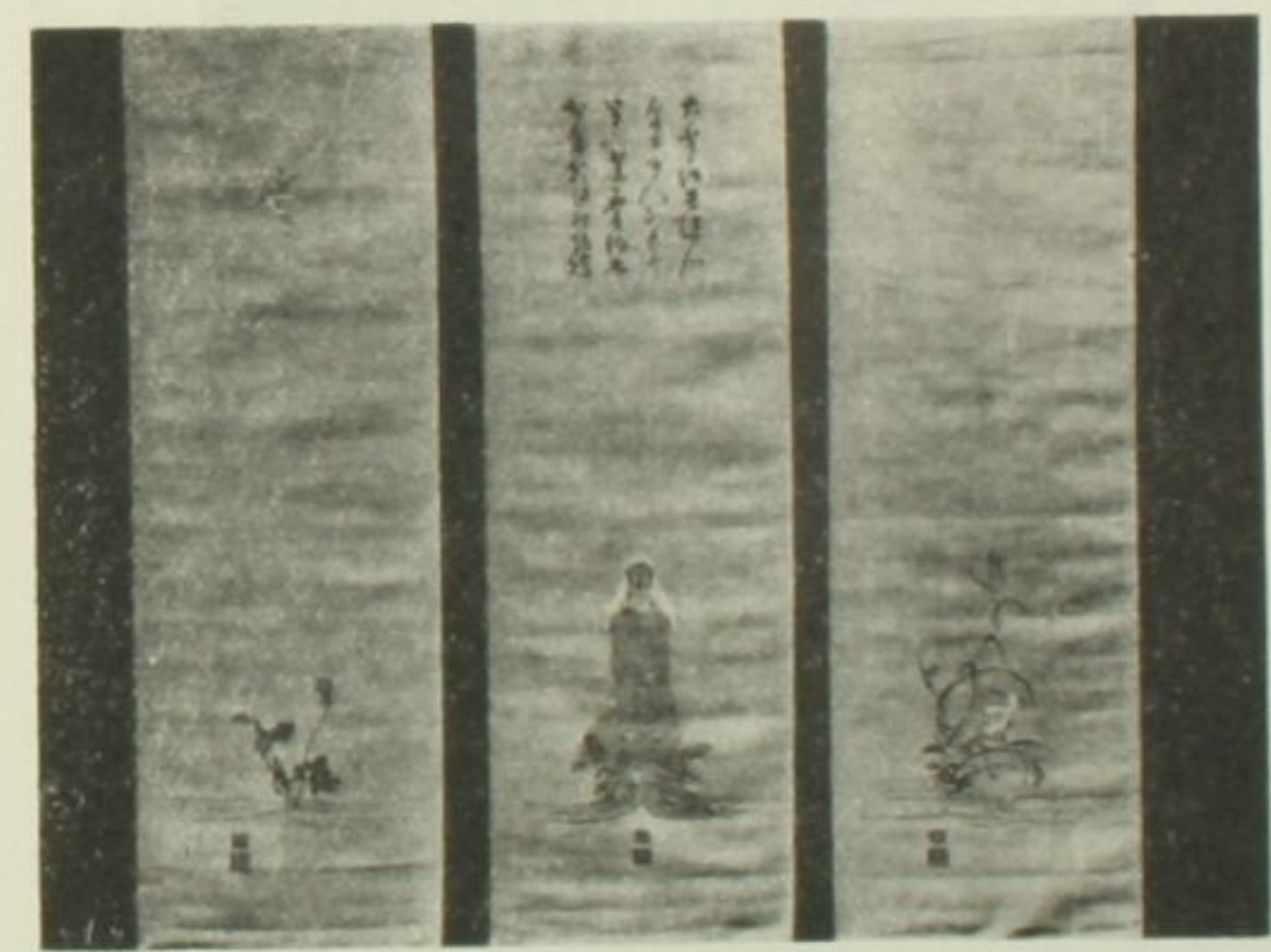
**藕絲織** 前にも述べた如く、藕絲織は支那にもない事はないうであるが、それは多く絹織物であるらしく、そして必ずしも佛教信仰と關係してゐない。然し我國の藕絲織といへば、夫は佛教信仰から發足しないものは全然ないといつてよ



く、そして現在各地の寺院や在家に秘蔵されてゐる蕪絲織なるもの、中には眞偽の確かでないものが多い。我國に於ける蕪絲織説話の最初に、智光、清海、當麻の三曼茶羅がある。この中最も著名なものは當麻曼茶羅である。



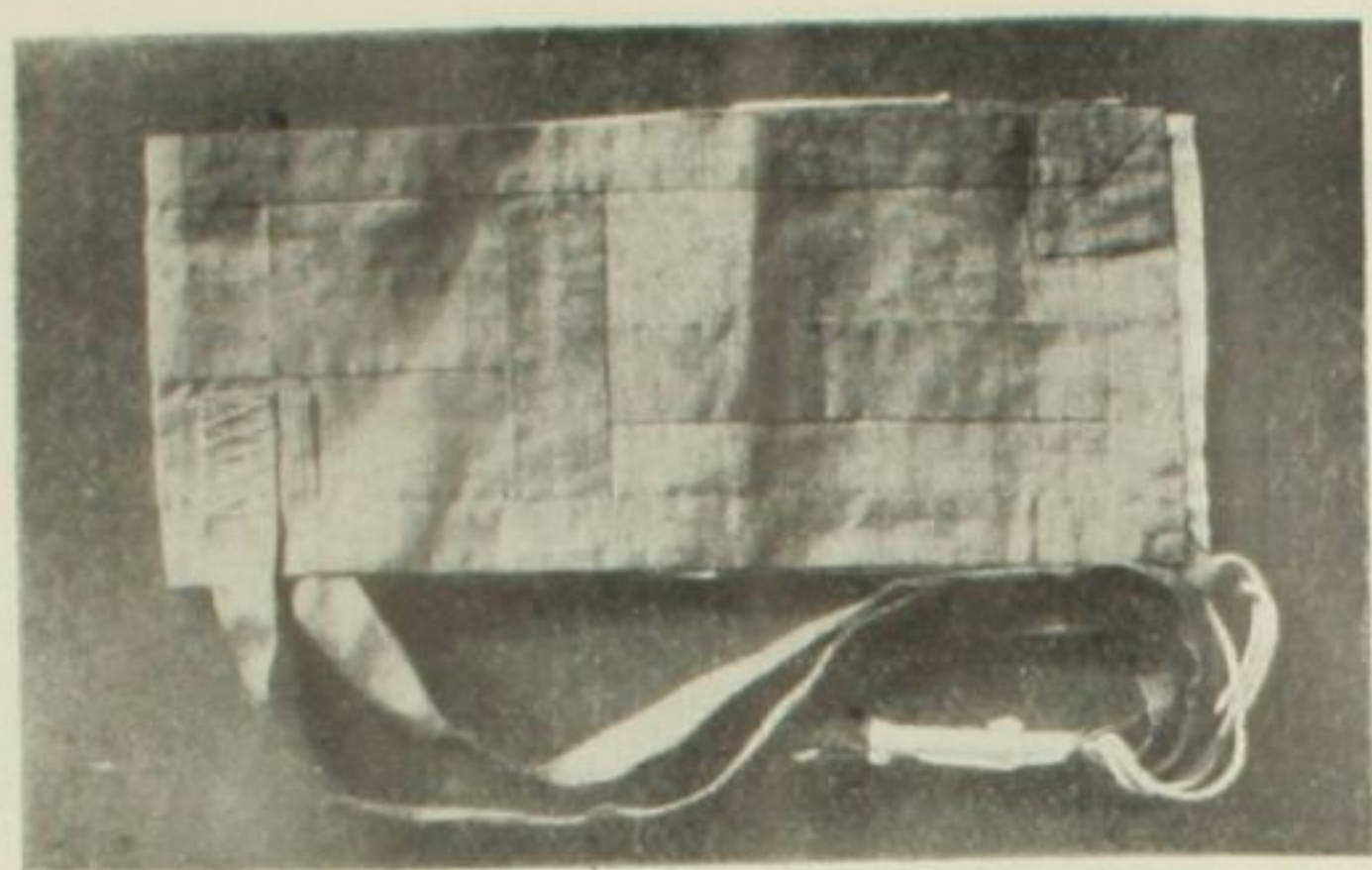
第7圖 大隈重信侯母堂三井子刀自採絲、京都西陣伊達彌介織成の蕪絲育兒觀音像(明治十一年)、(東京淺草寺藏) 縦31×横19匁



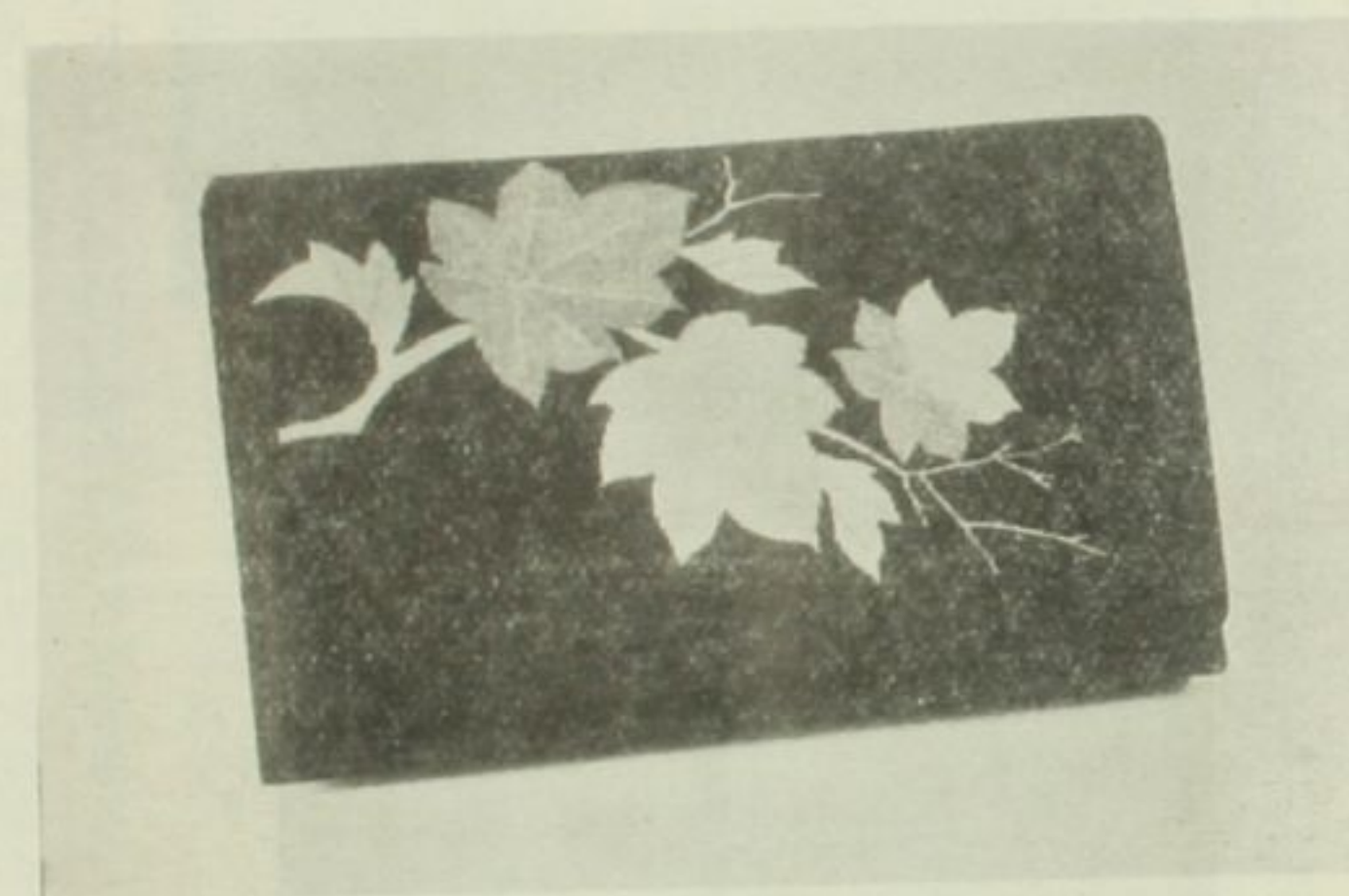
第8圖 大隈重信侯母堂三井子刀自採絲、西陣伊達虎一織成の蕪絲諸集三編對(明治二十六年作)、(東京西原雲照寺藏) 縦110.9×横35.5匁

西學聖聰著『當麻曼茶羅疏』第八卷に、次の文字がある。日本に第一に出現なる智光曼茶羅、第二超昇寺曼茶羅等皆連絲を以て地絹とし、何れも大権を以て筆者となし書顯する

所也。就中當麻曼茶羅は連絲を五色に染めて織顯する所の大曼茶羅なり。即ち、これら三曼茶羅は何れも蕪絲織であると記してあるが、蕪絲云々の事は疑はしい。そして最著名なる當麻曼茶羅については、大體次の如き傳説がついてゐる。(鎌倉前期に作られた當麻曼茶羅縁起による)



第9圖 蕪絲混織の加行袈裟(明治40年頃作) (大和 中宮寺藏)



第10圖 蕪絲織ハンドバッグ(模様圖案は正倉院女官衣五色唐織よりとる) 21×23匁 (昭和13年作) (東京 飯森家藏)

五色に染め、化女の援助をかりて、同年六月二十三日朝、方一丈五尺(實は方一丈四尺)の淨土變相を現出した大曼茶羅を織上げた、といふのである。



この説話は、信仰の事であるから、深い科學的検討を加へる事は差控へるが、常識的に考へて、色々無理な事がある。此縁起は今少し現代的に作り直して見れば如何とさへ考へてゐるのである。其無理と思ふ節々は、一蓮華採取の場所なる近江では蓮の産出量の少ない事、二蓮華採取の時期の早い事、三蒐集した蓮華の量と現存せる大曼荼羅の大きさ、四これを綴織とするに要する日数と絲の量などの間に大なる矛盾の潜んでゐる事である。そして亦私は當麻曼荼羅の表面より剝離した塵埃の粉末より未だ藕絲を發見しないのである。

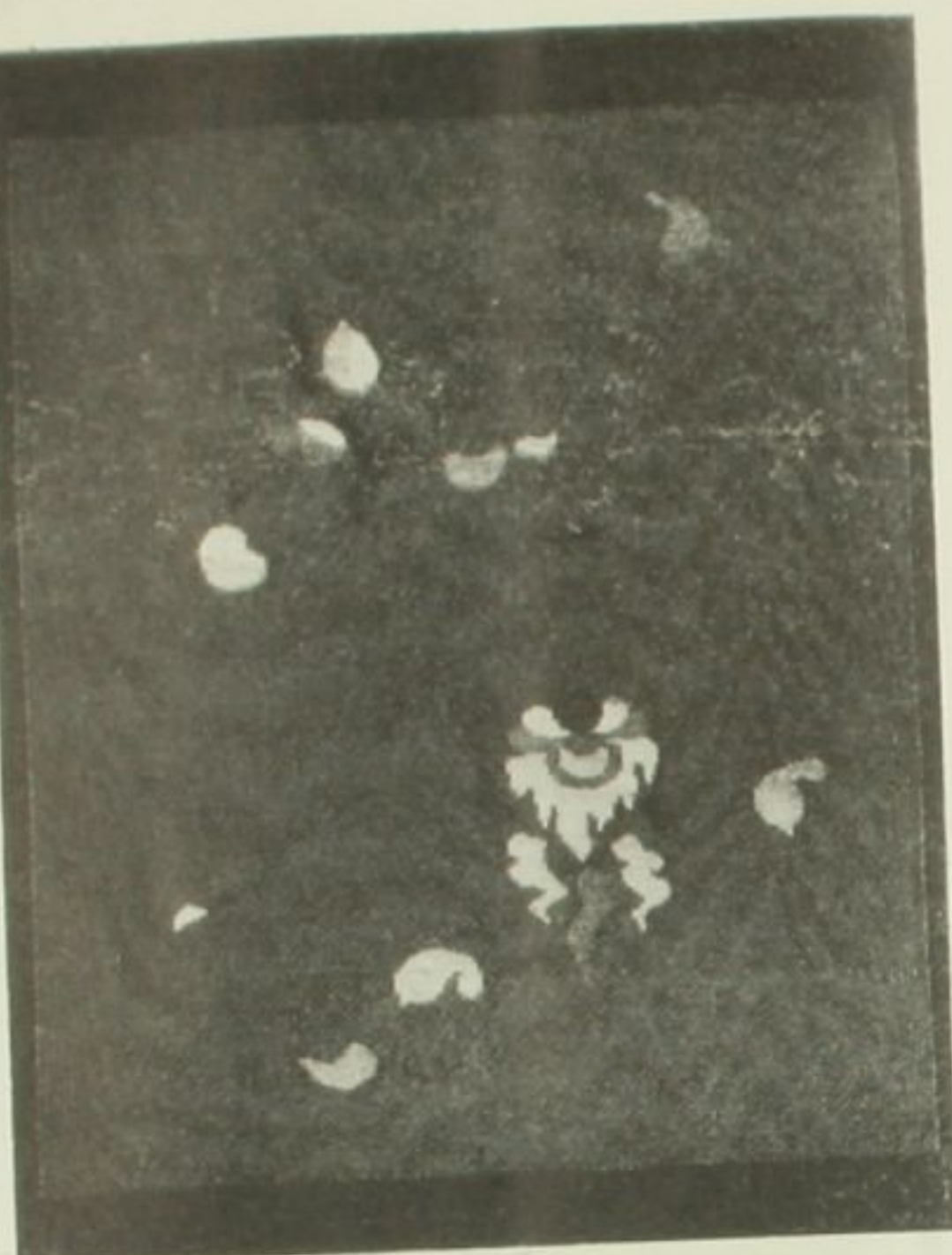
斯くの如き次第で、當麻曼荼羅原本が果して傳説の如く藕絲織成品であるかどうかを断定する事には聊か躊躇してゐるのであるが然し、この傳説は、足利時代には謡曲『當麻』及『雲雀山』となり、又後年徳川時代には脚本となり、今日に至るまで我國の上下至る所に喧傳されたため、篤信なる佛教徒が親しく藕絲を探り、これを以つて大小の佛像を織出したり、又平織の布片を作つて、此上に繪畫又は文字を書き顯はしたなどした幾多の例を見てゐるのである。



第11圖 藕絲織敷物（模様圖案は法隆寺聖武天皇御得紋様よりとる）  
21×21匁（昭和13年作）  
（東京大隈侯爵家藏）

我國に見られる藕絲織 今日迄に私の見てゐる藕絲織の最古のものは、寛文十一年冬（皇紀二三三一年、西暦一六七一年）小倉藩主小笠原忠貞室水貞院によつて寄進され、現に同地廣壽山福聚寺に藏されてゐる三幅對の佛畫である。これの藕絲は染められてゐない白無地で、紺地の布上に織出されて居り、金泥で黄蘗の隱元が銘を記してゐる。次は元祿六年春（皇紀二三三三年、西暦一六九三年）平戸侯松浦任公室松林院によりて寄進され、現に播州網干龍門寺に藏せられる涅槃

繡像の地布である。次は寛延四年冬（皇紀二四一一年、西暦一七五一年）尾張遠山景供室靈鷲院より大和當麻寺中之坊に寄進されてゐる藕絲九條袈裟である。これは緯絲を藕絲とした平織地である。次は享和三年春（皇紀二四六三年、西暦一八〇三年）江戸忍岡大島柔藏母辨女が不忍池より蓮華を探り、これより絲を紡ぐ事十年にして素布一幅を自ら織り出したるものに、輪王寺公澄親王の「不可思議大辨才天」の八字を染筆されたもので、現に東京上野不忍池に藏されてゐる。



第12圖 藕絲織厨額（模様圖案は法隆寺什物縫製紋をとる）18×24匁（昭和13年作）  
（大和當麻寺護念院藏）

明治年間に及んでは、明治十一年秋侯爵母堂大隈三井子の採絲、京都西陣伊達彌介の織成した藕絲青兒觀音像四十二體（第7圖）及び明治二十六年春同じく大隈三井子の米壽賀に京都西陣伊達虎二の織成した藕絲弘法大師像九十體がある。これらは何れも染色された紋織で、我國各地の神社佛閣や知名の家に藏されてゐる。又明治二十六年秋殘餘の藕絲により特製の紋織三幅對の佛畫が東京西原雲照寺に寄進されてゐる。（第8圖）又平織のものでは、京都袋中庵及大和中宮寺（第9圖）にあるものは袈裟となり東京淺草寺にあるものは圖幅となつてゐる。これら

織物の絲の使用法を見るに、經絲は常に絹絲で緯絲のみが藕絲である。そしてこれらのすべての藕絲織は、篤き信仰の所産であつて、何れも我國に於ける婦人の忍従の徳を示さないものはない。實に作られし素布一枚の中に、數年乃至十數年の歲月が織込まれてゐる事を知つて私は、古人の作りし藕絲織に對する度に、感激憤懣はさるものがあるのである。



最近に於ける藕絲織 ハスの研究途上、遇々當麻曼荼羅原本に接するの機会を得、それは絹絲の織織である事を知つたので私は、東京田村千恵氏と謀り、數個の藕絲織織の作成を試みた。(第10、11、12、13圖)これらは何れも方一尺以内の小なる作品であるが、美術工藝品としての將來を見んとして今日織成に努めてゐる。まだ研究が不十分であるが、採絲は最初東京上野不忍蓮池の蓮莖を以つてし僅かに四匁を得たが、昨秋は千葉縣木更津で採絲し數十匁を得る事が出来た。そして染色には今日迄はシリウス染料を用ひたが、今後種々の染料を試みて見る積りである。そして織成法は主として最古の手法なる綴織を用ひたいと思ふてゐる。



第13圖 藕絲織扇額 (模樣圖案はある國寶よりとる) 19×25匁 (昭和14年作) (東京淺草寺藏)

往時篤き佛教信仰の所産であつた藕絲織は、今は純粹なる美術工藝品として作成されつゝあるのである。果してこの國に於いて幾個の藕絲織物を作成し得るかは永き將來の事に屬するが、私は私の生涯中に願くは百個の藕絲織を見て瞑目し之を適當な方法を以つて、數千年の後世に傳へ、そして亦許さるゝならば一千五百年前の天平時代に出来たといふ方一丈五尺の大圖相を、中將姫傳説の故事に順ひ、眞に藕絲を以つて織成したいといふ念願を持つてゐる。皇天の加護豊かにして生を此地に享けた私の此一念が、因縁あつて、いつの日にか、この國に於いて達成され得るならば、冥加何物か之に過ぐるものがあるであらう。茲に望洋の感を抱持して擲筆する。

(昭和十四年五月二十日東京都上落合天心樓書室に於いて)

蓮の研究家大賀博士から寄せて来た藕絲織のパンフレットを  
 讀み、何のこゝろとなく、博士の三四年前、研究の初め、大隈先生の  
 田子の稻上、愛宕、羅と取柄へんた燈籠、俄え等々、就て其の  
 考を取つたこと、あるつゝ、未だ起るゝまで、時々研究の途  
 果の致生も、さき白人も、おもしろく思ひ、さうして、一々考さ  
 ぬ、おもしろく、おもしろい、此のパンフレット、取柄の、さき、大隈  
 さん、さき、さき、おもしろい、ある、さき、大隈、さき、大隈、  
 の、さき、おもしろい、さき、おもしろい、さき、おもしろい、  
 大隈、さき、おもしろい、さき、おもしろい、さき、おもしろい、  
 大隈、さき、おもしろい、さき、おもしろい、さき、おもしろい、







此の如く後述が出来るまで遂に始末しれども又陰の話を此宛で  
た。手紙は全体所の便書の手紙と書物と云ふの二、書物にあり、  
先を包む書物に即ち此の代りであるとする事の事である事  
ことであるが、此の所元書物に極端の例である。

大野某十平の軍書、此宛かひとく持ててやせんと各所の引違  
凡そうしとある、今の某大の産と云ふことと云ふが、此人は陸軍の軍書  
多岐之り、今も御里福家仲仕の書役の職にあり、と云ふが、此の  
日書物を多岐之り、早大の某宛に出身して、左の事、此の宛を  
き信書でも云ふれ、と云ふことと云ふ。

明治十二年十一月廿四日時の東京府知事芳川殿に公全四の



直轄を後に登念して、重なる大から放逐して、四人の学生を入学  
せしめ、その如く云ふれ、其の四人の学生は、今の後現大  
に、下の泥驥、下平の名が、他の三人は、奥田義人、長谷川  
即、日登、いよ泥の最年、少く十八才である。奥田は日登、皆  
官界に相なり、地位を占められ、平泥は、大内登巻、的の成り、皆  
ある。

吉田皇政の書物、その間、親も、その人地、か、ゆ、る、を、  
極高、その、一、敵、する、を、い、て、無、か、つ、れ、い、か、此、人、り、木、村、某、高、と  
云ふ、其、来、る、も、交、り、も、深、り、つ、れ、と、云、ふ、が、此、人、の、後、後、其、の、知、る、事、  
高、の、有、に、怕、し、れ、と、云、ふ、此、程、初、め、し、た、る、新、話、に、由、り、知、る、こ、と、を  
得、れ、。







下村	奥平	寺崎
大親	西村	大竹
安田	雲梯	長田
古川	中江	宮崎
馬場	中野	青山
江木	芳賀	山川
柏村	御	井口
西村(支別)	鈴木	橋本

西村(支別)

向崎を漢詩人が夢香洲と雅化し、三保の松原を雅化し、  
詩人が多し、ひもろひ。山梨松川、三保山、この人、左の女、  
詩がある。

海心美勢、十里、烟浮、中有幽人宅、松深不可  
求

紅方の字ハ松ヲ擬スル也、  
紅方の字ハ松ヲ擬スル也、  
紅方の字ハ松ヲ擬スル也、

友人松平唐園の子去征して還りて唐園詩あり

芳年一年相見難、  
大以、洞道官深卷甲行、  
寂無名、馳驅難效涓埃報、



霞の尾花と栞をうら尾花の霞と栞とをうら何んぞ名文句  
にあたり

越後人間八十年、予は北後を仰み刻して関防をえたい  
と思ふてある。

高橋是清の栞をうら欝然「受災如受福」とある、予然思ふに  
アハロギユスひあるが「美の合甘高のあふ栞は、栞を愛しを幸とする事」の  
市字あることを人の發憤の多く災厄が其道守城ひある

栞の和歌に



「楽の好みの書を幸ふとうら一竟へつとちて思ふとき  
好書愛書の文験する人」此の歌の味を解くは「思ふ」とある

「松茸重月の風望栞奏」の法を刻して近人の印をえり、當つて下  
村親山の余の著書に「画」の一幅が、恰も此の巻端に合致すること  
を思ひたまふ、又「月夜」の涼を納んで平板の石上に安臥  
し、侍者俵らに笛を吹く、高麗予の意に「通ふよあそび」の余の  
架中い無し、



今昔物語の七人の滝草と一カ一住とよあるよあだが時代の  
及映り佛の利生や怪異の説るゝか多しけいも、意味のまゝ  
注も少くうあゝいどこととエソツプを注ひ心也也  
すも、今、高瀬に束ねんと後人にも無くうと思ふと、其  
外も、此方にも、ロントも得て現代の注も止してある。七  
の分三回止まらう。自分か注して、其を感くれば、修うの  
程であるが、中にも左の如く、二ある、其を感くれば

罪におそれた注

花子と路の注

其を佛教

足才金を振つて山をゆく注

色好みの男妻を元振つて失敗の注











挿録

鐘一撞出さく一撞遠くしちん

そのあ初歌くくやうい流ん行く

音まくと海井戸溢るあのみ 師徳

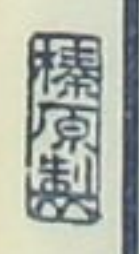
信心のあに世のさき(遠く)へ

涼徹す銅羅ん心身をも澄す竹

勿体うや祝の日の紙衣の九十年

お寺の人、うけりお寺寺の句かよふふあ思ふ

支那の俗語に「三蘇熟喫羊肉」とういがある、三蘇の文に  
而して初め羊肉を食へ、書生が羊肉を喫する、蘇は海で  
あると、西洋にも「ベーコン」を解せやうといふ、ベーコンを食



あまの誘ひある上のベーコンは大豆を煮しり名で、下のベーコン  
ハムを煮たものである、共に美食を成す所也

常々白じり近路を求めし止まざるといふおぢある、予嘗ては  
谷み丸に支那の出産を相い、活のる云く、あり器を由つてど  
ん形もする、那の由果あを、余は信乎らあ、近路を  
求めし止まざるを典故とせよと説く

徳永重原に二つの侍士那あり、而して三場の那あり、何  
れと、内へ云く徳永理茶エとの外に、福曲とあり、仕舞いとよ  
す、徳永の白人君の死道にも侍士ありと、徳永由つて我  
れ三場と那とすといふ





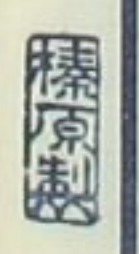


俗間では、七八百年以前の福島潟は非常に廣大であつたと信ぜられて居るけれども、潟の東岸だけに就いて見ても北は佐々木村砂山から南は神山村榎に至るまで、明瞭な湖岸砂堆が續き其の大部分に彌生式、祝部式等の土器が相當多量に出土し、西岸に於ても長浦村大月・浦木・土地亀がら葛塚町・法花鳥屋・黒山を経て佐々木村へかけて同様の出土品があり、殊に法花鳥屋・城山以北に於ては縄紋式土器も石器も出土するから、從來の想像説を覆すに十分な證據となる。現在の福島潟水面に寶曆年間山本丈右衛門の開發以後出來たといふ内沼沖・新鼻同新田・前新田等の耕地一圓を加ふれば、約三百年前に完成した正保圖の示す潟の數字と殆んど一致する。而かも其の耕地の大部分は人工に依り存在するので、然らずんば今日に於ても正保圖と略同一の湖面を擁するであらう。

前新田では例年三月三日に開發の恩人山本丈右衛門の法要をして來たが、明治十七年に其の基本金を失つてから自然消滅になつたといふ。新鼻新田の神社は「開潟神社」と稱する珍らしい社名だが、祭神は山本丈右衛門と齋藤七郎次。

古書に於てある、尚前新田の次十七年、寶曆年間潟を  
 開き、山本丈右衛門、高取七郎次を祀り開潟神社と  
 云ふとあることと、又、特記して置く、

皇軍の支那と祝ふこと、要地と占領し支那の支那を失地し  
 るが、海の方角に皇軍をお鎮せよと今、海の無の國と云  
 うつれ。



田中ちよ山のおの和歌集千首と得れ。又中へ今心を  
 此の八座取の右の二歌ひあり。

おのが身を汚し、うらむ七廿の寸を清く、お八高望  
 取にして

自分の郷國越後の香檳に、七月十五夜、何を望んで、月が又遠し  
 て、四洲のうらむと、いへる、おの村の夜合を待た、他人の畑か  
 野菜を、とを奪取し、と云ふ、おのうらむこと、西行法師  
 師が畑泥棒の代表者の如く、西行が泥棒の代表者の如く、西  
 つて、この西行法師の、馬鹿の如く、西行法師の、ウリを、  
 の、西行法師の、ウリを、と云ふ、西行法師の、ウリを、と云ふ、  
 の、西行法師の、ウリを、と云ふ、西行法師の、ウリを、と云ふ、



志路の地が教つてゐるから切抜をして居ておくれ。

大分一印橋土が湯河の善苗店に河内蓮の字より四五百年地  
中ニ埋没すのよみあると云はん。自分も其五粒を母給ふると銀三  
二匁も所持しを指さぬ。果して橋土の言ふことごとく、生きて居る外  
どうふを疑はざるべからば、植物園に試みれば果ては主派の草芽  
しれと云ふ

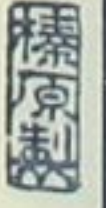
自分の意花の回考や書畫は皆な四散して今も殆んど一物も留まらぬ  
此より書印日録に出て、皆のと、皆も死んで今もそのことと思を  
する。此頃も是頃り所文在詩實日録が来たから、裁くをえりし、  
自分の名があらうから、よく見ると、當つて不存した山陽の某の  
他蔡微の菊道に行ひあつた。美の既も忘れしおれたが、これ又余  
の爲記かある。余の鬼魂も言ふと、その公漸や、思ひ去りた。  
この左も、珍重しと、そのも言ふべから、百二十五日の候が所し  
るあつた。

清美社の社の新葉五郎の海堂に横山大観が聖画の古紙  
を押さへることゝ、そのれと、そのあが、其聖画の縦二間幅四間と



いふ大さきよみ大親畢生の大書と聞くが、まゝ同くは紙の早  
大田忠政に明時の大書とせり此時特別に此二湖四方の紙が  
大親の手元は遺存しこゝろを引くといふは、**東本**に板書抄  
に於ては、**早大**のと并ひ様とせり、大書とせり後の  
世又遺存しあり。

維新成敗の事しに吾郷里み原と坂田諸藩とよふ人の義軍  
の属して来り吾の家を宿しを家宛ての書簡もあつたが、氏  
程正木直孝の書に随筆と云ふこと、此人は秋月藩士の坂田九  
郎右二門諸藩の子と思はれ、此の諸藩の番付次第の何であつて  
相方の名字もあつた、正木は往年熱海に入浴中又余し、種々  
讀つたことが書畫骨董雜誌に出せぬ。



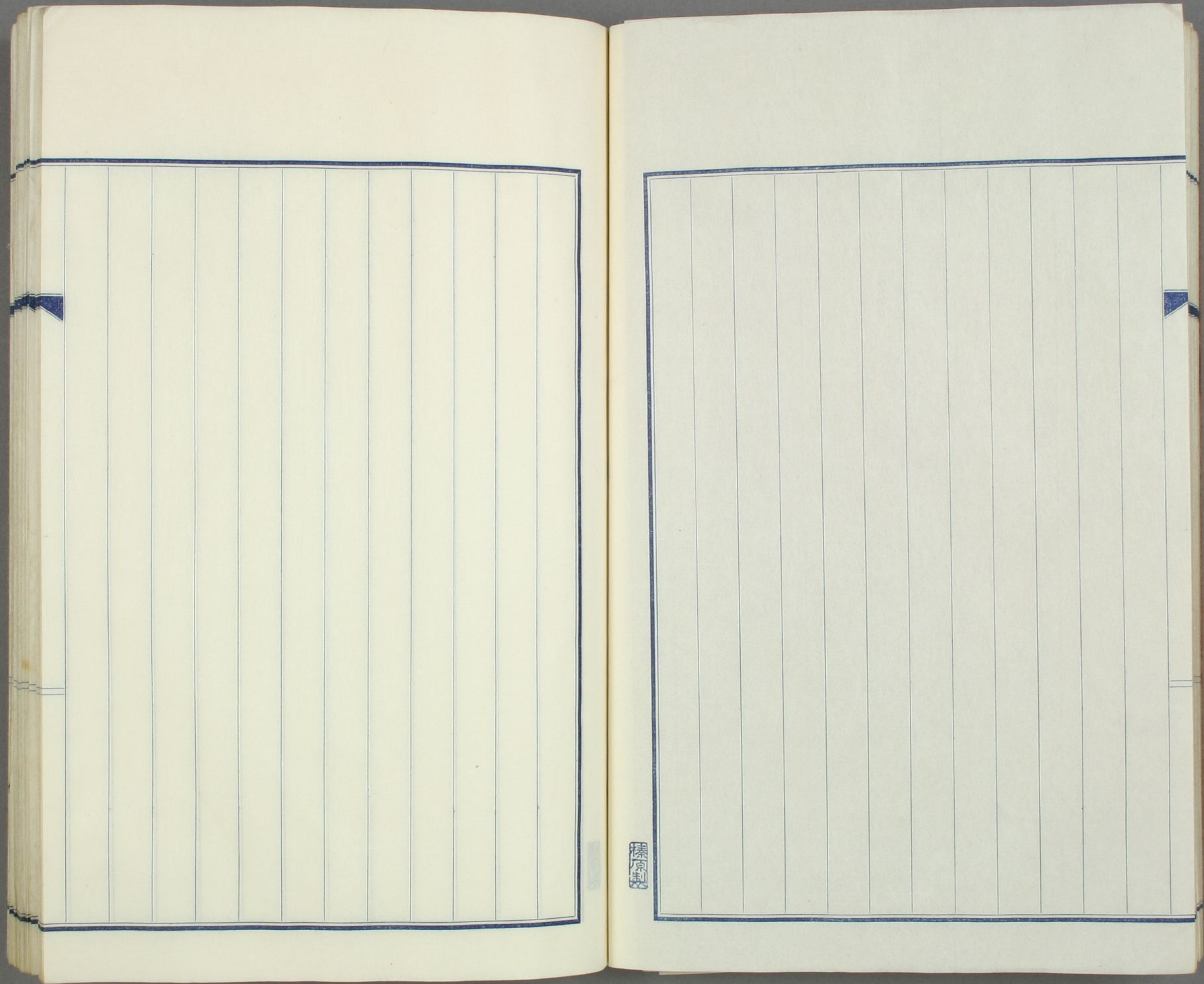
淑女がふるあめりかに袖を濡さずと云ふ外人を望つた時代は下田、  
来れハリスの伽をいふが、**唐**におまといふは、**ロマンス**と稱したのも、**異**  
**理**と興つたが、日本婦人と外人のロマンスは後をあらうラウがお玉もあんな  
モルガンお雪もあつた、**七**の時の淑女は、**牡丹**とあんなに女  
々ある。此等の内美徳の爲に富豪のモルガンは、**後**稱せんは、**祇園**  
名妓雪や、**書**がけの、**明**法の初二の、**素**、**肌**刻の、**評**義として  
備はして来れたラウが、**認**めん、**終**に夫婦と云ふお玉も、**外**國  
久しく在つて、**配**偶が、**段**して帰國したのが、**唐**人お雪のやうに、**外**國  
言ひ能く、**漸**や、**外**國人の、**憎**んたか、**あ**らうか、**あ**らうか、**後**等  
の外國と、**互**りし時のことを、**さ**も、**思**はつてゐる。**緋**牡丹も、**あ**つても、**相**あ  
おせし、**い**は、**歴**からう、**彼**れ、**口**こ、**や**の、**大**官、**を**、**相**手、**し**て、**軍**事、**の**  
末も、**こ**の、**世**に、**あ**つた。

末もこの世にあつた



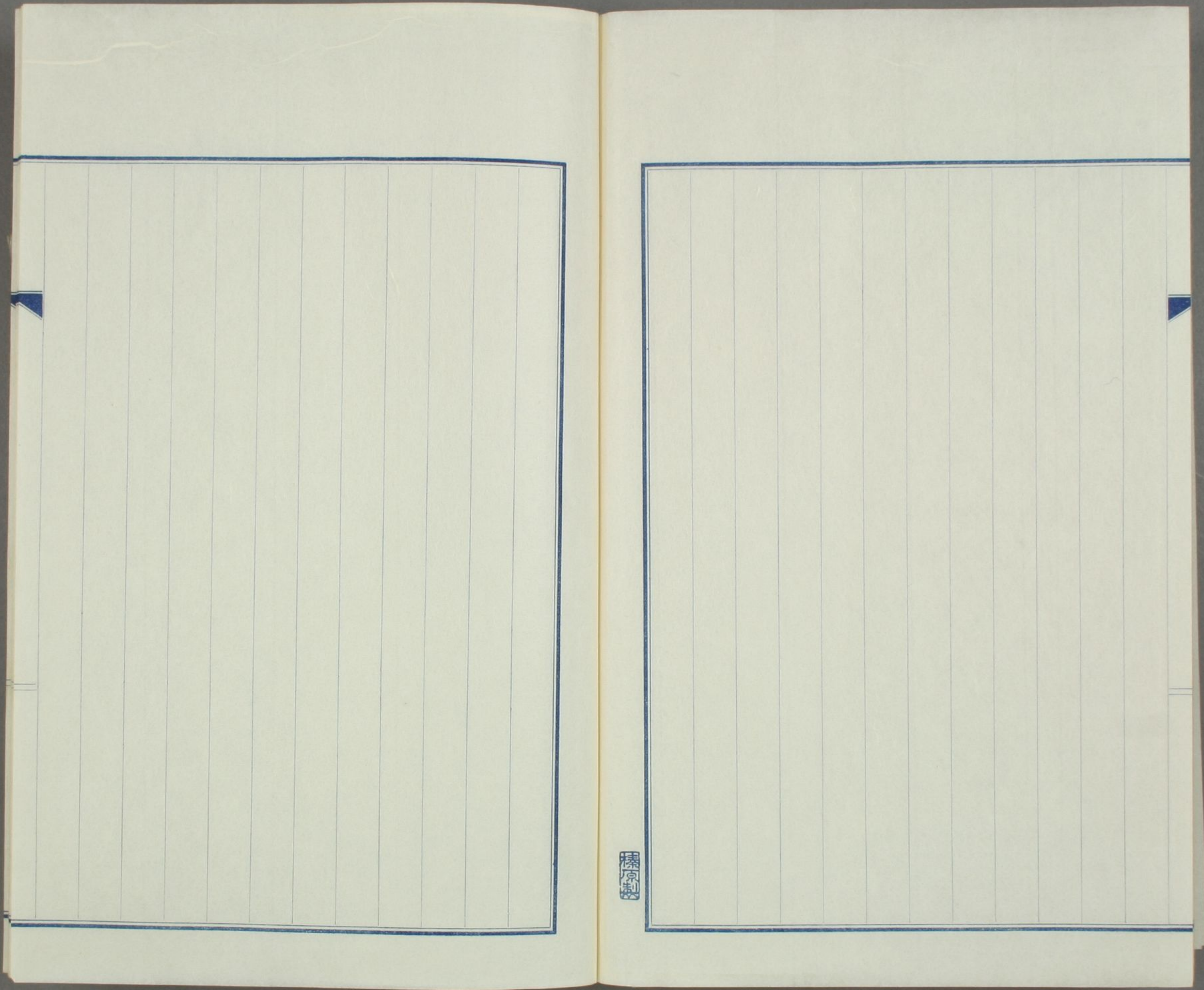






三才圖會





標印



# ビール雑談 (下)

日本内地でビールはどれ位醸造石  
 一、五、六十萬石、樽が五十萬石と  
 別なつてゐる。百五十萬石といふと  
 一、寸見當がつかぬがこれを細かく  
 し分けると四ダース入り一箱が一斗  
 七升であるから百五十萬石では八  
 百八十二萬三千五百二十九箱、ダ  
 ースに直すと三千五百二十九萬四  
 千六百六十六ダース即ち四億二千三百  
 五十二萬九千三百九十二本といふ  
 ことになる。日本人一人當り四本  
 支那四億の民に分けてやつても二  
 千五百本以上は残る。ビールの醸造  
 工場は不足が目立つてゐるといふ。こ  
 れはその製造原料たる曹達灰の統  
 制又戦地へ輸送された曹達の運不  
 能等からであるといふ。それでビ  
 ールの醸造技術は近世の醸造技術に  
 勝るとも劣らぬものを造り得たる

米	二七、八三七
獨逸	二〇、四〇八
英本	一四、〇六四
佛	九、二七五
ベルギー	七、六四五
日本	九、六七

(單位千石)

ことは醸造に値する一と醸造され  
 たが、これは御世無しの旨味で  
 近年日本のビール醸造技術が如何  
 に高度に發達したかを立証するも  
 のである。現に日本のビールはア  
 フリカ、近東諸國、英領印度、關印  
 南洋、海峽植民地、香港、フィリ  
 ッピン、ハワイ、北米等へ輸出せ  
 られてゐる。又皇威に浴してから  
 蒙古人、滿人等も盛んにビールを  
 飲むやうになつた。



「信濃では月と佛とあらが蕎麥」と一茶が詠ひ、その一茶と蕎麥に對して、「そのむかし一茶の賞でしおらが蕎麥 美穂」信濃では一茶と月とおらが蕎麥 貫一」など、信州の俳人が詠んでゐるやうに、信州では一茶と蕎麥は自慢の名産なのである。しかし柏原・更級・松川・戸隠山と、それぞれ産地が違ひ味覺も違ふが、この句の持つ意では、おらが蕎麥即一茶蕎麥としての聲を強くひびかしてゐるのである。そこで東京にも新宿と大森に一茶庵と名乗る蕎麥屋があり、新橋の「梓」と云ふ小料理屋では「おらが蕎麥」(信州に於ける煮掛け蕎麥である)なるものを喰べさせてゐる。それから高圓

寺の一莊庵(廢業す)と云ふ蕎麥屋でも信濃蕎麥を味はせて、燐票に「そばとろやこれは一茶の知らぬ味」など、威張つてゐたことがあつた。藤澤在の鶴沼の驛前にも一茶庵といふ蕎麥屋がある。このほか日本橋に一茶蘆と云ふ酒亭があつて、すべて山國作りで、女給などもモンペを穿かせてゐる。なほ柏原では一茶饅頭を賣つてゐた(このほか一茶茶桶・一茶布巾などがある)。それから長野市には「豆しぐれ(味噌納豆)」と云ふものがあり、容器(一輪挿しの花瓶として用ゐらる)に一茶の「初時雨夕飯買に出たりけり」その他の時雨の句を刻みて、この名を附けたもので、地方色の濃い味覺を湛えてゐる。また、東京には本郷湯島六丁目の船橋屋藏江で「一茶もなか」を賣つてゐて、看板に一茶の像と「われと来て遊べや親のない雀」の句とが書いてある。銀座の「ちもと」では「一茶まんじゅう」を賣つてゐるが、近頃各所のデパートでも一茶饅頭を賣つてゐる。一茶は粗末な生活をしてゐた。それで喰ひ意地が張つてゐたから、斯く喰べ物に名を遺してゐたといふことよりも、いかに一茶の名が大衆的であるかといふことを、眼中に置きたい。

藤原製

江戸圖彙

始末屋

文久版「江戸久居計」の挿畫なり、吉原のよろし



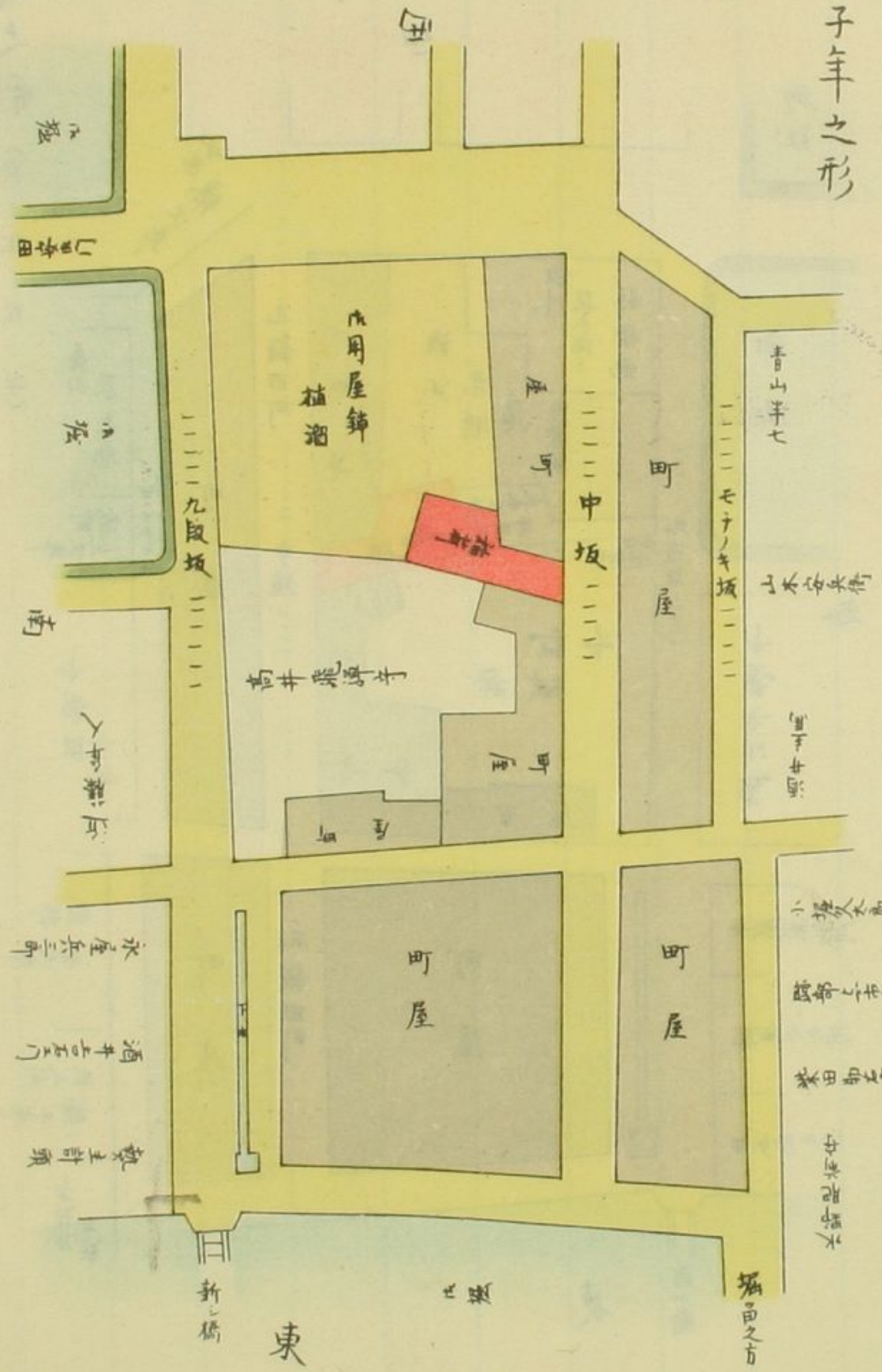
き娼家にてはなきことなれども、翠朝支拂の出来ぬは、娼家に止めて歸るを許さず、よつて手紙など書きて友達に遣して無心し、或は妓夫と伴つて金策に出掛くるもあり、さまざま、すれども才覺

し得ぬは、娼家より始末屋といふへ引渡し、始末屋にて衣類を剥ぎ、持物を取上げて、賣らしめて償はしむ、さて赤裸にて追出されもせぬゆゑ、古合羽とか古襦袢やらのものを與へて、肌膚を掩はするを例とす、この始末屋といふもの、何時よりありしものか、安政の假宅以後に出来たるらしく思はる、尙考ふべし。



本見容内

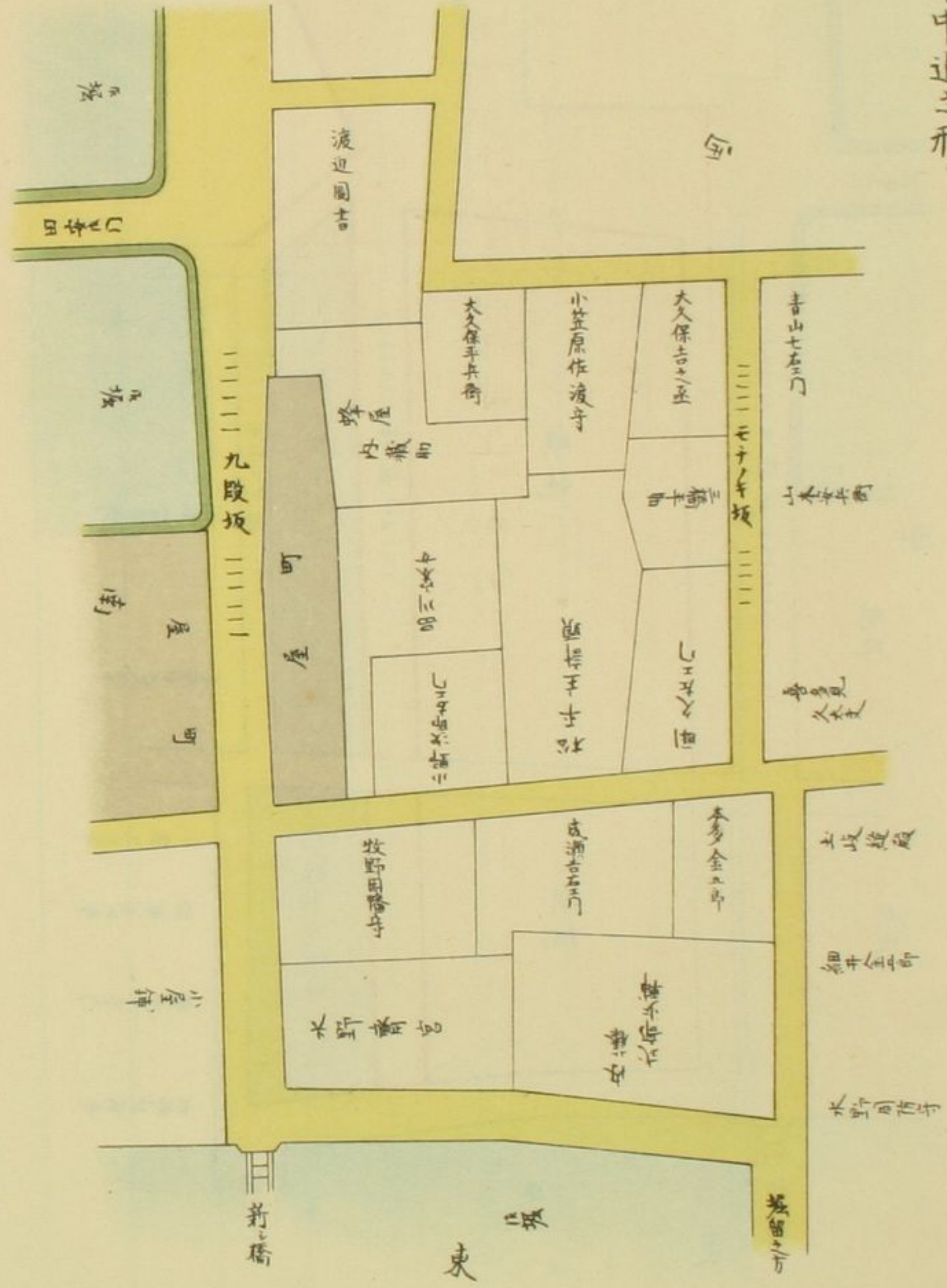
享保五子年之形



享保五子年

本見容内

延宝以前より  
貞享年中迄之形



延宝以前より  
貞享年中迄之形

貞享年中

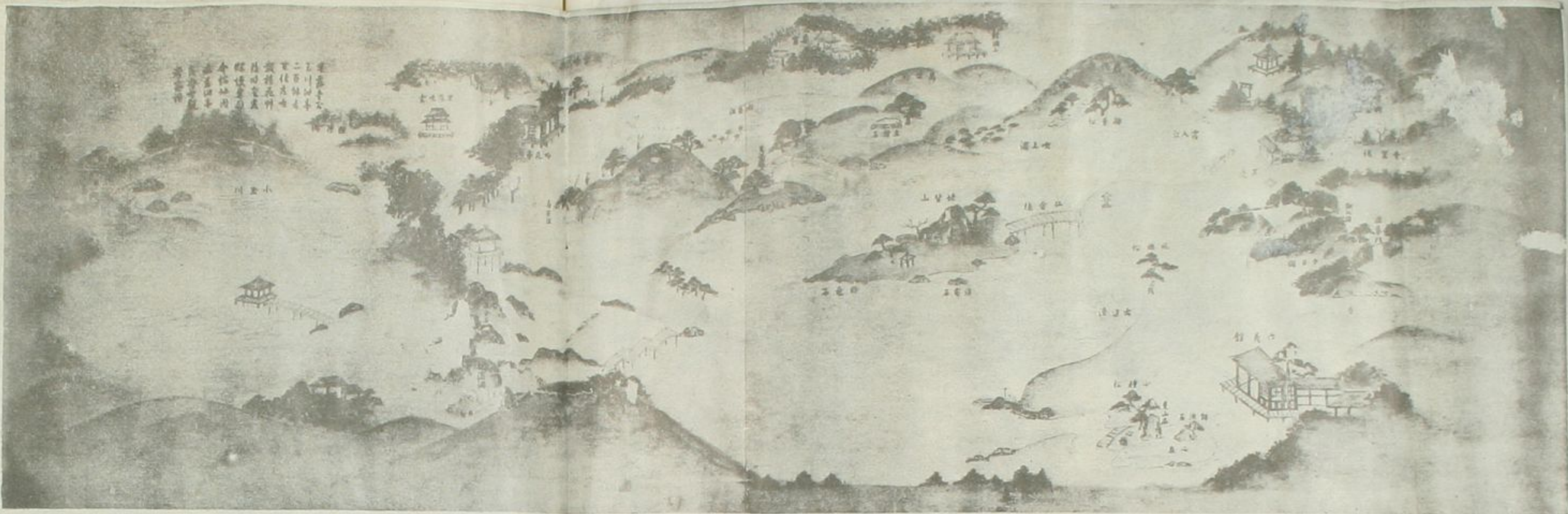












六義園は元祿の末年、大和郡山藩主柳澤出羽守保明（後に吉保）の築造に成る江戸時代の代表的名園にして、明治初年以來岩崎男爵家駒込別邸となつてよく保存せられ、本年四月本市に寄附せられたのである。

此地は往古の染井村の一部で地域廣潤、環境閑靜な豪地に位し、寛永末年以降加賀藩邸に充てられてきたが、元祿八年四月、時の將軍綱吉の信任極めて厚い老中柳澤吉保の下屋敷地として、附近四萬六千餘坪を賜與せられた。吉保は和漢の學に通じ殊に詩歌の道に精しく、又林泉の嗜趣にも深く、此處に第館林泉の工を起すや自ら設計指揮の任に當り、想を練り工を督して費を惜まず、拮据經營七年半を経て、元祿十五年十月遂に、都下屈指の宏壯幽雅な大庭園を完成し、園を六義園、館を六義館と命じ、景勝十八境を選び、自ら六義園記を作つて其の由来を記した。當時の諸侯の、此の造園を援けて樹石等を献じた者も尠くなかつたといふ。全園の布置結構は悉く之を和歌の六義に象り、吉保が包蔵する文學趣味を遺憾なく活現した事は本園の特徴とする處である。六義とは古來和歌の眞髓と稱せられる風、賦、比、興、雅、頌の六體で、園中八十八境の名勝は亦古來和歌の濫觴と傳へられる「八雲立つ出雲八重垣」の古歌に因んだものである。

六義園一度成るや、その名聲頗る高く、既に元祿十四年四月には綱吉將軍の生母桂昌院の來觀あり、殊に將軍綱吉の來臨は前後十數回に亘り、造庭に關し援助を吝まなかつたといふ。而して元祿十六年三月には將軍息女鶴姫、八重姫及び日光門跡公法親王の來遊等あり、貴賓の招宴も一再ならず催された。かくて費永三年十月に至り、靈元上皇に於かせられては本園の雅趣を聞召されて「六義園十二境八景」を勅撰し給ひ、月卿雲客の詠歌を添へて之を吉保に下賜あらせられた事は世に著名なことである。この外、林大學頭信篤、萩生徂徠、服部南郭、細井廣澤等當時著名の文人墨客碩學の來遊する者多く何れも詩歌を題し、雅名普く天下に布くに至つた。

六義園は江戸時代諸侯の藩邸の後園に多く見る處の所謂回遊式築山山水庭であつて、今創築當初に成つた「柳澤侯六義園全圖（上圖）」によつてその梗概を窺ふに、東西に稍長く擴がる園地は、周圍に亭々たる喬木生ひ茂る小丘陵を周らし、その東端に近い藩主の別荘六義館の前には水量豊富な千川上水の水を注ぐ大泉水を湛え、中島を築き、泉水の周圍には築山、細流、苑路、橋梁等を配し、庭門（遊藝門）を入つて右廻りし全園を回遊する規模と思はれる。この外、「千里場」と呼ぶ馬場、「觀德場」と呼ぶ射場を首め、花園、菜園、竹林、釣魚池が園の外周に布置されてゐたが、現在では失はれ大泉水を中心とする園の核心のみとなつた。

名勝八十八境の中主なるものは、築山丘園には「藤代峠」、「義姑射山」、「技折峯」、「衣手岡」、「靈潭坂」、「池邊汀渚」には「出汐澳」、「宿月灣」、「拾玉渚」、「玉藻磯」、「水香江」、溪流には「紀川上」、「麴溪流」、山路林道には「尋芳徑」、「藻蓮木道」、「篠下道」、「珠道」、橋梁には「仙禽橋」、「藤波橋」、「渡月橋」、「龜浮橋」、「千鳥橋」、巨岩怪石には「見山石」、「詞花石」、「龍和歌石」、「三疊石」、「花笠洲」、名木には「風雅松」、「筆麴松」、「名掛松」等であつて、何れも古今の名歌を寫したものである。是等の名勝には書家細井廣澤筆に成る銘石を建てて標した。園亭には「吟花亭」、「蘆邊亭」、「放鶴亭」等の茶室小席、禪房「龍華庵」、阿彌陀佛を祀る「甘露味堂」、毘沙門天像を安置した「久護山」、大和大神の神を祀る「三輪社」等の堂宇、田舎屋「藤の里」なども園中の各所に設けられた。而して「藤代峠」は園中隨一の景勝で富岳筑波の眺望に宜しく一名富士見山と呼び、こゝに「將軍腰掛石」が傳存せられてゐる。

吉保は寶永六年六月致仕して本園に退引し保山と號して専ら風雅に餘生を送つたが、正徳四年十一月二日六義館に卒してより、園觀漸く荒廢に委し、寛政初年の頃廢類殊に甚しく、文化七年頃一度復舊の工が起されたが「夕日岡」、「心泉」、「六義館」、「蘆邊亭」、「放鶴亭」の景勝小席は遂に再現を見ず、池泉又千川上水の池廢と撲を一にして園景は往年の幽邃典雅を傳ふるものなきに至つた。

かくて明治初年に至り岩崎彌太郎氏は本園並に近隣の藤堂、安藤、前田の各氏邸を併せて地域十二萬餘坪を別邸となし、江戸時代以來の地割意匠を襲用して園景を補參し又茶亭、堂宇若干を新設し或は泰山木等の外國樹種を新植して往時の盛觀に復するを得、爾來管理維持宜しきを得て現在に於ては最もよく舊規模を遺す庭園の一として尊重せられてゐるのである。

岩崎家は曩に大正十三年深川別邸清澄園を本市に寄附せられたが、昭和十三年四月再び本園の地三萬餘坪を市民の休養觀賞に供するための公開庭園として、その附屬する一切の施設と共に擧げて本市に提供せられたのである。

本市は本園を受領後、之が公開に必要な假施設を了し、十月を期して公開するに至つたのであるが、將來は史蹟名勝庭園として保存管理の徹底を期し、且つ諸般の觀賞設備を施して廣く市民の利用に供し、以て寄贈者の好意に應へんとするものであれば來覽者は此の趣旨に添はれんことを切望する。

尚、靈元上皇勅撰の十二境八景は左の如くである。  
初岡、妹背山、藤代峠、嶺花園、玉藻磯、新玉松、若松原、霞入江、出汐澳、蘆邊、紀川上、藤里、（以上十二境）  
若浦春曙、筑波陰翳、吟花夕照、東寂幽鐘、軒端山月、蘆邊水禽、紀川涼風、土峰晴雪。  
（以上八景）



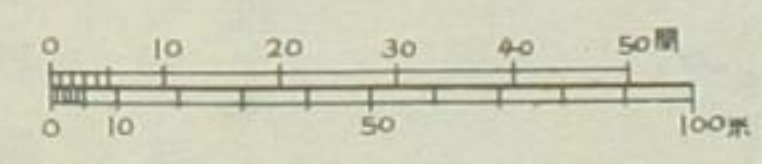


日念記變事



橋溝蘆の出ひ思

圖面平園義六



- 凡例
- ① 事務所
  - ② 桃ノ茶屋
  - ③ 瀧見ノ茶屋
  - ④ 吟花亭
  - ⑤ 熱海ノ茶屋
  - ⑥ つゞじノ茶屋
  - ⑦ 蘆邊ノ茶屋
  - ⑧ 公衆便所

寄開面位  
 附園積本  
 昭和三十二年十月十六日  
 昭和三十二年四月廿七日  
 本郷區駒込上富士前町  
 九九九七平米二二  
 三〇、二四九坪一六

昭和十三年十月十四日發行  
 編輯  
 東京市役所











近時 雜感

—(下)—

秋山靜暉

山復山の盆地の夏の朝は霧がひどい。七月七日の夜、明前、女の子が手に茶碗を大事さうに持つて青田の畦を踏々と歸つて来るのが影繪の様に見える。又反対に畦を一目散に走つて行く女の子もある。その女の子は里芋の畠に行くと腰を屈めて他の子供達の様に何かやつて居る。

これは私の故里の風景ではない。田園を、そして山國を故郷に持つ人々には、恐らくこの想ひ出があるのではあるまいか。その昔、牽牛織姫の古事を引張り出す事もあるまい。七月七日は七夕祭である。里芋の葉に下りた眞珠の様な露を集めてこれを硯に受け、紅紫様々の紙に思ひく、の句を書いて若竹に結びつけ、栗、柿、さつま芋や枝豆などを供へて七夕様を祭るのである。何と雅びな床しい行事ではあるまいか。そしてそこにも亦書道と離れぬ縁のある事を見逃してはならない。

私は十年この方水について或る小さな研究と云ふか想を凝して、そして亦楽しみ味つて居るのであるが、書道人が墨を磨るにあつて水のよしあしを考へないでは居られないと思ふ。

比田井天來先生が五十鈴の川水を以て大本營の標札を書かれた事は當時の新聞にも出た事だから大方御承知の事と思ふが、昨年の文展に、横山大觀畫伯がやはり五十鈴の川水で伊勢の大廟を謹寫されたこと何つた事がたまになく床しく思はれたが、私も五十鈴の川水を硯に受けた時の敏度な氣持が今でも思ひ出される。私は旅に出ると大抵その土地の水を汲んで硯に磨り

味ふことを楽しみにして居る。更にそれが土地別でなく、一日経つた水とか、雪の水とか、雨の水とか、へちまの水とか、更に凝つては酒をまて硯に飲ませて種々様々の味を味つて獨り楽しんで来たのだつた。さうした事に心を置いて居ると自然に水の良否から来る墨の色の影響又はのびが判つて来る。

酒は勿論問題にならないが茶や湯は蒸溜水と同じくさらつとすきて水の生命が感じられない。古い水と新しい水は勿論新しい水がよいに違いない。天來先生は、大分古くなつた五十鈴の水であつたが、變質して居たものではあるまいか。尤も富士の金明水の水のやうに腐らぬと云ふものがあるが、これとても何處までか限度が判らぬ。かうした水は一ツの信仰であるから、或は科學的の考へ方はしない

方がよいのかもしれない。鑛物の多い水はかたくて墨のびない。特に鑛分の多いのはいかぬ様で、桑名や下田で使つた水は、海邊の町のせいがよくなかつた。その弊大島で海水を汲んで磨つた時は墨色は出なかつたが、のびがよかつたのも面白い。雪も雨もそれぞれの味の違ひがある。だ

東京では初に降つたものと三日も降りつづいたものと二日とはその差がある。それは空中の塵埃、細菌などによるものではないかと思ふ。松花堂だつたか、江戸の水をけなして京の水を讚へた古事を想つて、今の鴨川の水を汲んだが、今の鴨川の水ならたいた相違も感じられなかつた。水道はや、よい位であるが、井戸水は流石に東京より京の水がよい。水道なら山の水だか何處でも變るまいと思ふとあてが外れる。東京より横濱の水の方がよほどよい。水道で特別によいと思つたのは富山縣の高岡と伊豆の伊東であつた。高岡は湧き水だと云ふ話だつたが、自分がその話をすると、水は日本でも一か二だと自慢して居た。山の水も方々で汲んだが、これは概して火山帯の處は駄目の様である。これは鑛物が多い爲であるまいか。たゞ富士の金明、銀明(これは雪を解したものであらう)の水はさすがにやらかであつたりして居る。墨の味の出るの

何も知らない子供が、七夕様に供へると云ふその床しさを傳へて、里芋の葉にたまつた露を硯に受けて床しさを我々書道人が等に閉に附す事は許されぬ。昔の人はそんな事を別に科學的に解剖した譯ではないが、ちやんと合理的にそれを今に傳へて居るのである。書道が自然に連がる神祕と云ふものを、これまで究明し堪能して始めて味へる喜びである。それなのに水の事などおまひなしで二日も三日も置いた水を、平氣で使つて居るもの、自分の飲めもしない水を硯に飲して平氣で居るものが多いはあつたまいか。生命のない水で磨つた墨で書いた字に何の生命がこもるだらう。

綺麗な洗つた硯に新しくやはらかい水をついで靜に墨をする味ひこそ、書道人の持つ大きな喜びでなくてはならない。それなのに、近頃書道更生墨磨器なるものが現れて、これを重寶が手合のある事は、この喜びを知らずに時間が勿體ないからと、時に縛られた没雅の人である。機械に引廻されて自然の深さを汲めぬ悲しい人々である。かうした人々は今に字を書く器械でも出来たら一も二もなく賛成する人で、タイプライターでもた、いて居た方がましである。それはまだよ

いとして、展覽會などの席上揮毫に、薬で作つた墨汁を使つて平氣で居る人があつた。墨の色など勿論出るものでなく、墨の味など全くないものである。書道と云ふもの、判らぬ人なら兎も角、いやしくも口に書道を稱へる大家と目される人のうちにあるのである。書道

人の風上に置けぬ没趣味の人と云ふべく、全くお話にならぬ字書き屋風情である。こんな人こそペンキで看板でも書いて居ればよいのである。その他水、研究許りでなく墨にも紙にも筆にも無頓着で居る人が餘りにも多くはあ

印肉は金龍銀龍

まいか。風を引いた紙を使つて平氣で居たり、毛の弾力を無視して否それあるが爲めに書きにくいと許り根本を止めたりつて御丁寧にも漆で固めたり、さては自分の使つて居る筆が何で作つてあるかも知らず、墨の性質、硯の味等は様々である。

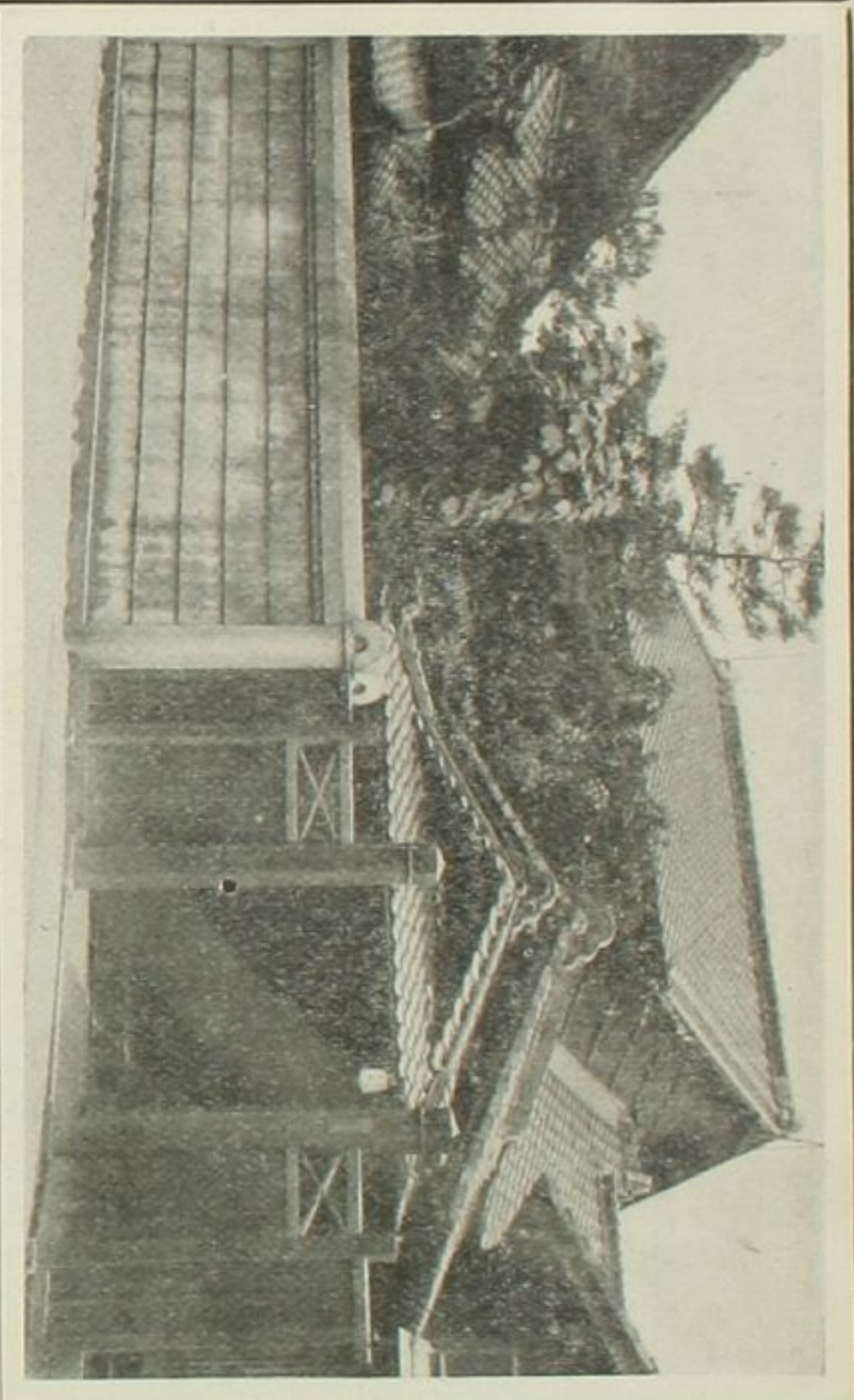
そんな事は當事者に任せ置いて、我々は字が上手に書ければよいのである。立派な藝術品を作ればよいのである、と云ふかもしれないが、さうしたもの味の判り、眞からそれを使ふ事が出来ないので立派な藝術を造る事は難しい。名工はその道具を大切にする。道具を愛し得ない様な者に何で立派なものが出来様か、と私は敢て云ふ。だがさう云ふ君もまだ愛が足りないと思

見えて、ろくなものも書けないではないか、と云はれたい言もないが、またこの道に足を入れてから十年こそこの若輩である。以前には讀めもしない意味も判らぬものを書いて平氣で居たのが、近頃漸くその方の勉強も一緒にして行かなければならぬものだと判つた位の若僧である。私は更にこれからを第一歩として、勉強もし探究もし、その苦しみを味ひとして行く氣である。

こんな事は云はずもがな



名古居工抄  
 坊の遺蹟  
 日家  
 甚心村の現  
 今停車場  
 改定也



弘文莊侍實言目所載

頼山陽自筆批正  
 (211) 菟道紀行

紀蔡微自筆稿本  
 全一卷 金百二十五圓

紀州の人紀蔡微（野呂介石の門人、文人  
 畫家、平素山陽竹田等と親しく、畫員とし  
 て藩侯に仕へ、五百石を食めりと云ふ、詳  
 しくは「竹田莊師友畫錄」に在り）が洛外  
 宇治の里に遊びし紀行の原稿に山陽自らが  
 例の達筆の朱もて訂正加削せしもの。卷末  
 の山陽の評語は左の如し。

彼瑣細可笑事而不俗、洵見筆力、是蓋  
 呈法主者、不得如尋常遊記、然終是記  
 文當得其體、故前後少加妄刪管在高意  
 耳 襄 僭 批

紙高五寸三分、全長八尺五寸餘、用紙白唐  
 紙。市島春城翁舊藏、春城清玩の印記、  
 又卷尾に翁の識語あり。保存良。

菟道紀行  
 庚寅四月初  
 醍醐法主。在洛陽下院。  
 以弟清菴。激野人也。何敢  
 居之。願惟蒙過者。有  
 年。因得恭候之席。  
 相繼進。菟道之行。  
 菟道者。若村也。時屬  
 苦天。濟勝之寄。是時  
 為得之。隆十日申。以  
 前事。翼日昧爽。乘輜  
 迺發。赴醍醐。山路傷多  
 野。蕭蕭。若葉。款。撲  
 輜。簾。自覺。時。醉。頓  
 醒。一絕句。已。是。別









# 百々山の講座

もとの日本の山々は、登山者が入つてから登られた跡ではなく、槍ヶ岳の麓に上人の故事の周知な

物産統制下の今年の山は、ビッケル、アイゼン、靴などの、従来の山道具が乏しくなる。がもと

る、立山にも木曾御嶽にも、杖にも、もとより東海第一の山、翠巒にも、手申脚絆に草鞋の紐がたく結びしめ、鋼杖や金剛杖を力に突いた吾等の祖先が、古い昔から登つてゐるのだ。とまで昔に遡らすとも、ほんの十七年前前に登

## 復活させてよい 古來の登山用具

### 草鞋や金剛杖の良さ

高から槍へと岩屋根をひいた私の體裁でも、ビッケルは五人の一に二本、ザイルは少し使つたが草鞋で歩いて道標の一枚岩の下に露したものである。山道具箱の底から、また拾つたれすに居る草鞋足袋や桐油紙など持ち出したが、それらの便

た。木の道はしつとりと、草つに紐をつけるといふ。草鞋は、よく叩いて軟け、てつと踵へ履いて平地と違つて全然足首を締めないやうに、乳を通した両方の紐を踵で二つ程絞つて高目に結びつけた。素人目にはバクバク脱げさうな履き方が一番楽だ

アイゼン一本爪や四本爪の日本古來のもので、大抵の雪は通れるし、草鞋の歩き方が上手になれ

は、雪でも岩でも中々工合のいいもので、余り道具が要らなくなる。但し私は急な雪で片足に二本爪をつけ片足草鞋のまゝ登つた時、ひどく歩きにくく滑つて危険な事があったから、道具が足りなくても片足草鞋は禁物と申上げる。

雨具一防水の丈夫な山用のでなければ、ベレーの都會用のレインコートは駄目なもので、それよりも毛織の上衣に防水をしておけばなほ可、昔ながらの着せざ(米立とも云ふ)や桐油紙を持つた方がいい。

着せざはなかく雨をはじくもので、日履ひにもなるし、休む時の敷物にも、時には雪後の種代用にもなる。しかも霧の日には、よく蒸氣を防ぐ事、恰も砂嚢袋にアンペラが、のと同種で、日本服には是非入用だ。昔の人はよく考へたものと思ふ。桐油紙は雨外傘にもテント代用にも便利なもので、私はいつもリユックサックに入れておき、この頃田舎でもなかく手に入りにくかつたのを惜しいと思ふ。

の用意が要るが、渡渉などは靴より便利なものである。草鞋下の足袋は、信州松本邊で賣つてゐた底の厚くて踵目の外へ出た、爪先と踵に別布をあつた深目の紐足袋がよかつたが、手製なら大きい目の明足袋を裏返して踵目を外にし、爪先と踵へ丈夫な別布を刺し子に

普通の藁の日に二足、歩き方は上手になれば一足足當。馴れぬうちは左右を時々取り換へると平均に渡る。要だけなく、ボロボロや腐など編みこんで作るとずつと持ちがいが、濡れた岩では滑り易い難がある。

スツク靴の類一テニス靴其他運動靴を用ひてもよいが、その時は底のゴムや革が厚くてギザギザのあるもの、靴紐より足裏上げを用ひ、厚い毛の靴下を網なり木綿なりの上に重ねると足が傷まない。そして右の道で指が痛さうな時は、古草鞋を履いて先きへ結びつけると防げるし、時には草鞋を履けばきも出来る。雪で滑つたら草鞋なら二つしぼると大分速

脚絆一私はふだんでも巻ゲートルよりも日本風の紐の脚絆の方が岩でも藪でも工合がいいと思つてゐる。脚絆用には紺甲斐絹で作るのも足置きがよくていいものだ。杖一長い金剛杖といふものはよく考へたものだ、時々思ふ事がある。扱ひつけないでビッケルを持つ危険さに思ひ至らば、今迄もあんなにビッケルは要らなかつたのではないかと、岩や悪處では手に下げる事も出来るやうに紐をつけ、しつかりした石突きの金具

をつけた方がよい。そして急な處では杖を山側へ斜に突けば、雪の上でも滑らないし、滑つた時にも止めいゝものである。雨具一防水の丈夫な山用のでなければ、ベレーの都會用のレインコートは駄目なもので、それよりも毛織の上衣に防水をしておけばなほ可、昔ながらの着せざ(米立とも云ふ)や桐油紙を持つた方がいい。

# 時局に甦る赤穂義士譚

## 孟子の裔に確な證據

### 戦線 勇士 武林唯七の戸籍調べ

北支那方面に活躍した勇士小野塚大郎中尉から本社に一通の書状が届いた。開いてみると、戦線に活躍した勇士の先覺朱舜水が水戸藩に仕

つたが、清は蒙古族であつたため心ある人はそれに仕へることをさうして四散した。治麻も當時の先覺朱舜水が水戸藩に仕

てゐたが、その後武林に改まつた治麻の血統は孟氏廿三代の時二人の兄弟があつた。兄は山東省

宗皇后はそこに孟子廟を建立し子孫は榮えたが、その後杭州に移つたもので六十一代治麻は清

見した藩市漢野菩提寺國家寺前の南湖院墓地にある「治麻の墓」は意外にも鄭殿の子孟子廟主によつて埋葬されたのである。

### 赤垣源藏の裔

【千葉藩】これも義士の一人、赤垣源藏の裔、千葉市郊外千城村の傷兵保護院養護所で「白衣の更生」めざして静かに養生してゐる津田源藏上曹兵として一昨年秋、源出征上海戦線に奮戦した赤垣長雄氏(三十一)板橋區練馬南町二の三

赤垣源藏の裔、千葉市郊外千城村の傷兵保護院養護所で「白衣の更生」めざして静かに養生してゐる津田源藏上曹兵として一昨年秋、源出征上海戦線に奮戦した赤垣長雄氏(三十一)板橋區練馬南町二の三

赤垣源藏の裔、千葉市郊外千城村の傷兵保護院養護所で「白衣の更生」めざして静かに養生してゐる津田源藏上曹兵として一昨年秋、源出征上海戦線に奮戦した赤垣長雄氏(三十一)板橋區練馬南町二の三



頭山翁清話 木戸、板垣、黒田  
木戸、板垣、黒田、徳川幕府の重臣、大坂の陣で活躍した。木戸は、板垣、黒田と共に、徳川幕府の改革を求め、幕府の弱体化を企図した。板垣は、幕府の改革を求め、幕府の弱体化を企図した。黒田は、幕府の改革を求め、幕府の弱体化を企図した。

### 頭山翁清話

#### 大隈、神鞭、三浦

大隈にも、なか／＼、面白い處もあつたやうぢや、三浦権と、神鞭知常とが、或時大隈を戒しめて、貴様は、何處でも、無暗にシヤベル、あれを慎しめ。と思つて、一切シヤベルの車に誓約させた。その上で何か公の席に出で、三人並んで座した。處が、大隈が、もう直ぐに立ち上つてシヤベル出した。三浦は、キカヌ氣の男だから、大隈の面を覗きつけて、

### 頭山翁清話

#### 勝海舟

勝の時に、一たび職位を奪ふせしより、擧止其の是を失ふ、猛省昨非を悟る、豈に又恥を思はざらんや、長く歎す、破産の下、百年文斯の如きか、幾生今いくばくぞ、生を盡むは死するに如かず、と云ふがある。明治政府に、仲間入りしこの迷懷を。

### 頭山翁清話

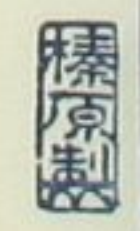
#### 西郷と吉井

西郷が、また若い時分、友人の、吉井友實の家に遊びに行つた。その時、傍に女中が来た。そいつに、西郷が気がついて、他のところに世話せぬかと云ひ出した。それはいと易いこと……然しほんとうか、それで、吉井が、それを聞いて、何で嘘をつかうか、といふので、吉井が、それら何日に連れて行く、と日約して、吉井が、その女を同行する事にした。約束の日には、西郷は、もう来る事と、心待ちして居た。然しなかなかやつて来ない、夜通し待つたが、終に吉井も、女も来なかつた。西郷は尋ね早退、吉井の宅に行つて、前日の違約を、きつ／＼詰つた吉井は、吃驚して、あの話はほんとうの事か。天下國家の事なら、眞剣と思ふけれども、女の事だから、これこそ戯談だと許り思つて居た。天下の大車なら誰人にも認る。然しこんな話は、貴様と俺との知己の間柄なればこそ話したので、それをなんぞ戯談などと云つて、違約して不誠實をするなら、以後絶交する。大いに怒つて、以來交らなかつたさうぢや。他の友人達が、心配して、いろいろ仲直りさせやうと骨折つたが、終に聴かなかつた。何でも、数年後、或機會で、友人等が、吉井に、前非を詫言ひさせてやつと再び交はるやうになつたさうぢや。八日附本稿、清話は誤植につき謹訂

### 頭山翁清話

#### 限の馳走に犬

西郷南洲は、饒が大層好きであつたさうぢや、そのことを、能く承知して居る大隈重信が、饒を御馳走致し度いから、是非御出で下さるやうにと西郷に案内をしたさうぢや、西郷は切角の事だから、御馳走にならう、然し一人でなく連れが有るから、その心算でと挨拶した。其日大隈は、饒を連れ、その分まで用意して、待ち受けたさうぢや、約束の時刻に、西郷がやつて来た、然し唯一人で来た、







# 大陸に志して

## 内原青年訓練所の一日

政府の青年訓練所は、戦時体制に適合して、青少年の志を鼓舞し、戦士として大陸へ送らうとする。この訓練所は、十六歳から十九歳までの青少年に呼びかけて一年余、この内原訓練所を以て、青少年の志を鼓舞し、戦士として大陸へ送らうとする。この訓練所は、十六歳から十九歳までの青少年に呼びかけて一年余、この内原訓練所を以て、青少年の志を鼓舞し、戦士として大陸へ送らうとする。

百余名の兵舎は土台から、出入口の細かなとまで全部、隊員の手に入れたものである。訓練所に入所した青少年は、渡前川の二ヶ月間をこの「日輪」で必要ならぬ訓練を受けるのである。なほ五十人から成る一個小隊が五個小隊で一個中隊を、六個中隊で一個大隊を組織し、中隊には本部、休養舎、炊事舎、浴場を備へ、五個大隊、その他の人々を加へて定員一萬といふ大家族のために、厩舎、廊下、風呂舎、洗濯場等々、萬端の施設が整ひ、その要所の中央に、監視塔の下に本部と監視塔、監視司令部が、厳めしい監視に覆られ、いつでも、壯快な大陸の空が、響いてゐる。そしてこの大世帯の運営は、總て「現地」の自給、自足生活を基調に置いて、衛生、清潔、秩序、規律、家屋、炊事、洗濯等々、全部が若い隊員自身の手で運ばれ、さながら理想家の形をなしてゐるのだ。そしてこの國家を、戦時訓練の目的に進ませるために、隊員には左の如き厳格たる日課が定められてゐる。(季節により多少の変更がある)

午前五時半起床、同六時一七時點呼、禮拜、體操、武道、教練、同七時十分朝食、同八時半一十一時學科、教練、作業、十一時半夕食、午後一時一四時半教練、武道、作業、同五時半夕食、六時一七時半入浴、自習、唱歌、八時點呼、禮拜、八時半消燈

上写真は大部分特別隊員による



# 四百年前の蓮の實

## 日比谷公園で發芽

### また千五百年は大丈夫



四百年前の蓮の實が日比谷公園で  
みごとに發芽して蓮の長さも七セ  
ンチ余に伸びて葉も開きかけてあ  
る。これは蓮の世界的權威元滿洲  
大學教授大賀二郎博士が先月  
半ば日比谷公園にその種子八粒を  
贈つたもので公園では種をかけた皮  
に厚付けて發芽を促した上、去月  
廿三日水鉢の中に入れて置くこと  
(實は發芽した蓮の實)



大賀二郎博士

の内五粒が發芽したものである  
大賀博士は東大理學部卒業後、  
大正六年滿洲大學に奉職して南  
滿一帶の植物研究を續けた當時  
奉天に近い曹家店の郊外、劉雨  
傳の泥炭中から出る古い蓮の實  
が、土地の故老の間で一萬年以

上も經た古代の種子といはれて  
ゐるのに興味を持ち付近の地質  
や遺蹟から推して少くも四百年  
以前のものゝ算定、世界最古と  
稱されたロンドンの大英博物館  
に送られた種子より遙に古いもの  
に屬することを證明した  
しかも博士はこの實がいまは十

#### カメフラ高價買入

本店銀座七丁目金城商會  
支店新宿三丁目金城商會  
分發することを實感して世界の  
學界にセンセーションを巻き起し  
この研究を擧げて渡米バルチモア  
のジョンズ・ホプキンス大學やボ  
イストムソン植物研究所で更に精  
きをかけて昭和二年、研究十

年の結語「南滿洲曹家店附近の泥  
炭地に埋藏せられ今なほ生存せる  
古蓮實に關する研究」の論文を母  
體東大に提出、學位を得た大賀の  
士で現在泥炭層上層合一の四六八  
の自宅にあつて蓮の發芽の研究に  
一身を捧げている

日比谷公園に贈られた古蓮子は  
博士が在滿當時多數採集した  
一つで、その後ながく土中に附  
藏してあつたもので、論文發表  
當時「この蓮子にはまた一千五  
百年間は發芽力がある」と斷定  
した博士の推論は十年後の今日  
立派に實現されたわけである  
右について大賀博士は略す  
「普通蓮の種子は長くて十四、  
五年しか壽命がないのにこの蓮  
の實ばかりが特に千年以上も活  
きてゐるのは皮が非常に固くて  
そのまゝでは絶対に水を吸込ま  
ぬことと泥炭の中に埋れて長く  
空気が運搬されてゐたためであ  
らうした好條件が二つ重なつて  
これを世界最古の種子にしたわ  
けです」



## 長者番附に葦平軍曹

### 税額一萬一千五百余圓也

○「若松電報」若松市昭和十四年度第三  
所得稅新葦平の税額一萬圓以上納稅者の中  
に「玉井勝則」といふ名が加はつてゐる  
○「その後「土と兵隊」「花と兵隊」と釣瓶  
打ちのヒットを飛ばして、すつかり戦争文  
○「火野葦平軍曹といつたら「はゝあん」  
學の王座に君臨してしまつた、この文壇流  
と誰でも承知してゐる「花と兵隊」の作者  
行兇が税務署に「税額一萬圓以上納稅者」  
—杭州歐戰即上陸に銃を執つて参戰した  
といふレツテルを貼られて、税額一萬二千  
火野葦平氏が、硝煙の間に體験した生々し  
五百余圓で戦線から一躍長者番附の六番目  
い實戰記録を「家と兵隊」の題名で銃後に  
に離り出した譯だ(電報は火野葦平軍曹)



# 四百年前の蓮の實

## 日比谷公園で發芽

### また千五百年は大丈夫



四百年前の蓮の實が日比谷公園で  
みごとに發芽して蓮の長さも七セ  
ンチ余に伸びて葉も開きかけてあ  
る、これは蓮の世界的權威元澤洲  
教授大賀二郎博士が先月  
半ば日比谷公園にその種子八粒を  
贈つたもので公園では種をかけた  
に傳付けて發芽を促した上、去月  
廿三日水盤の中に入れて置くこと  
(實は發芽した蓮の實)



大賀二郎博士

の内五粒が發芽したものである  
大賀博士は東大理学部卒業後、  
大正六年滿洲教育に奉職して南  
滿一帶の植物研究を續けた當時  
奉天に近い曹園店の郊外、劉雨  
傳の泥炭中から出る古い蓮の實  
が、土地の故老の間で一萬年以

上も經た古代の種子といはれて  
ゐるのに興味を持ち附近の地質  
や遺蹟から推して少くも四百年  
以前のものと算定、世界最古と  
稱されたロンドンの大英博物館  
珍藏の種子より遙に古いものに  
屬することを證明した  
しかも博士はこの實がいまは十

#### カメラ高價買入

本店銀座七丁目金城商會  
支店新宿三丁目  
分發することを實踐して世界の  
學界にセンセーションを巻き起し  
この研究を擧げて渡米バルチモア  
のジョンズ・ホプキンス大學やボ  
イストムソン植物研究所で更に研  
究を続けて昭和二年、研究十

年の經緯「南洋南洋」の泥  
炭地に埋藏せられ今は生存せる  
古蓮實に關する研究」の論文を母  
校東京大に提出、學位を得た大賀の  
土で現在泥炭層上層合一の四六八  
の自宅にあつて蓮の發芽の研究に  
一身を捧げている

り限中

奉仕 特別賣出

七五四番定電 三四七番電



## 長者番附に葦平軍曹

税額一萬一千五百余圓也

○「若松電話」若松市昭和十四年度第三  
所得税新葦附の税額一萬圓以上納税者の中  
に「玉井勝則」といふ名が加はつてゐる  
○「火野葦平軍曹」といつたら「はゝあん」  
と誰でも承知してゐる「花と兵隊」の作者  
——杭州鐵廠上座に銃を執つて参戦した  
火野葦平氏が、硝煙の間に體驗した生々し  
い實戰記録を「葦と兵隊」の題名で銃後に

問うて戦後好評を博したのは人も知る通り  
○その後「土と兵隊」「花と兵隊」と對瓶  
打ちのヒットを飛ばして、すつかり戦争文  
學の王座に君臨してしまつた、この文壇流  
行兒が稅務署に「税額一萬圓以上納税者」  
といふレッテルを貼られて、税額一萬二千  
五百余圓で戦線から「長者番附」の六番目  
に躍り出した譯だ(實は火野葦平軍曹)











医学  
叢書



## 江戸醫學館の醫書出版

藤浪剛一

徳川時代の中期頃から、儒學に考證學派が擡頭した、井上金峨が創めて之を唱へ、繼いで山本北山、吉田篁墩、太田錦城、龜田鵬齋等が起つたのである。この學風は醫學にも及んだ。そして、歴代諸家の醫書を採り、考訂の精詳を期することが一般に行れたのである。その徒は驅蠶逐蟬古醫書の校刻に一層の力を注ぎ、支那渡來の古典籍を梓行するに昂めた。隨つて其頃から刀圭金匱の舊書覆刻が目立つて來た。

江戸時代の幕府醫學と謂へば江戸醫學館である。その總裁は多紀家が世襲した。多紀家に於ける古書校刻の事業は、考証派のそれを代表するものと目すべきである。多紀家は、平安時代の名醫丹波康頼の遠裔で、その三十代に當る多紀元孝が、明和二年、醫學教育所疇壽館を神田佐久間町に創立し、その子元徳更に之を擴大し、寛政二年家塾を官に轉じた。そして、天下の醫家で漢醫方を奉ずるもの

は、皆多紀家を師宗と仰いだ。元徳の子元簡、元簡の子元堅、元胤、元胤の子元信、元堅の子元琰、相嗣いてその職にあつて、江戸の醫權を占め、一家の學説はもとより斯界の重を成した。

考證學派の規とする漁書涉獵には、江戸醫學館も一段の力瘤を入れた。しかも、醫學館は職權を以て校刻の事を爲すに便宜があつた。かくて、支那渡來の古醫書をそれからそれへと梓刊したが、一番狙つた書籍は醫心方三十卷であつた。これは多紀氏の祖丹波康頼の撰であると共に、支那では既に散佚した古書の引用が多く、有益なる資料であるからである。

抑も、醫心方は、圓融天皇天元五年に丹波康頼が年六十歳にて撰述し、永觀二年十一月朝廷に進獻した三十冊の書である。それは、隨唐の醫書を摺據して著したものであるが、その引用に供した醫書は、支那本國にては既に散佚し

て亡失してゐたから、古き漢醫方學の研究には必備の貴重本である。

醫心方は、進獻後五百七十餘年の間、禁闕の秘書となつてゐたが、正親町天皇が、典藥頭半井通仙院瑞策に賜つてから、半井家は家の秘寶として、世々此書を保管したのである。醫心方の書籍は、また京都仁和寺にも所藏されてゐる。幕府では寛政の初めに、仁和寺藏本を謄寫して醫館に藏收する積りであつたが、脱簡が多い爲めに中止し、改めて半井家藏本を底本に用ひようとした。そこで多紀家は官權を借つて、半井家に交渉することになり、そのため半井家との間に經緯が起つた。

半井家の醫祖は和氣清麿の末裔である、足利十一代義澄沿世のとき、和氣明親が明國に渡つて醫學を修めて歸り、後ち禁闕に奉仕した。半井家の居地は京都烏丸にあつた、邸内に大井戸があり、その井水の半側にて主上の御藥を謹製し、他の半側を日常の用水に充て、居つたことが、後柏原天皇の寮間に入り、半井の苗字を賜つて、爾來和氣氏を半井氏と改め、世々典藥頭に任ぜられた。その子瑞策も、父に劣らざる人物で、驢庵と號し通仙院と稱し、正親町天皇の御信任深く深黒素絹の著服を允され、醫心方三十卷を拜受した。半井家は今大路家と共に典藥頭を世襲する名門となつたが、名門必ずしも巨匠たること能はず、何時となく、

半井、今大路兩家の實權は離れて、徒らに尸位素餐の安佚を貪るに過ぎざることゝなつた。半井家は、その後成信、成忠、達時、成明、成庸、成美の代々を累ねた。成美の世になつて、幕府から醫心方借上げの命を受けたのであるが、實權弱き者の悲しさは、家秘の醫書も沒收せられるかも知れない、しかし醫祖の拜受した貴重本である、これだけは、死んでも固く保管せねば祖先に濟まない、だが有爲轉變の世である、幕府の命は奉せねばならぬ、しかも、祖先傳來の愛藏品を渡すことは出来ない。成美は大いに苦悶したのである。乃ち言を左右に托して、一事遁れを繕つてゐた。そして、遂には天明八年の京火事に京都の邸は焼失したと答へ、とかく何時も前後不揃な申し立てをするより外、致し方はなかつた。けれども、それが度重つた爲め、如何に名門の家であるからとて、その儘棄て置かるべくもなく、吟味は一層厳しくなつて、寛政二年三月二十六日、若年寄安藤對馬守信成の役宅に、成美の名代今大路式部大輔正福が召喚せられ、目付中川勘三郎立合の上、先達而所持之醫心方御尋有之候處前後不束之儀申聞職業之事に候得者他より求め候様も可有之處自分所持之書籍一覽も不仕剩へ去々申年京都屋敷之而焼失致候儀も不存罷在候段心懸疎なる故之事之相聞旁如何之事に候依之差控被仰付候











醫書の覆刻をした。今日市上で求められる古醫書の中には、この種のものが多い。

多紀家は漢醫方の師宗となつたが、文化文政の頃から江戸にも蘭學が起り、燎火の如くに、醫人の間に洋學熱が高まつて、漢醫が次第に壓迫氣味を覺えた。殿堂の搖ぎを怯びえた多紀氏は早く、これが防止策を講ぜねばならなかつた。時、恰も、鳥居耀藏が蘭學排除に力を注いだ折として、醫書開板の許可権を手に納めて、蘭醫書開板に、手加減を加へんと試みた。天保十三年七月六日の御觸に「醫書之分は藏板致度存候輩は向後醫學館に草稿差出し差圖に任せ彫刻出來之上一部宛同所可相納候萬一私に刻板いたし候輩も候はゞ急度御沙汰可有之旨被仰出候」云々とある。この禁令的な沙汰で、蘭醫學出版は大いに難澁となつた。醫學館も殊更に口實を構へて、容易に許可を與へなかつた。林洞海が空篤兒の藥性論を翻譯して允可を醫學館に乞うたとき、詮議が二年にも亘つても、一向に刊行を許さなかつたのである。

嘉永六年に米國から使節ペルリーが浦賀に來り、交通、通商の議を求むるに切であつて、國內囂々陸戰海防の事を説くものが多くなつたとき、大槻俊齋が銃創治療の要項を翻譯したが、それも未だ刊行の運びとならなかつた。江川太郎左工門はこの稿本を見て、時節柄、有益の書籍である

から刊行を急ぐべきものであるとし、若年寄遠藤但馬守胤統に説いて醫學館の手を經ずして上木することを許させた。かくて町奉行鳥居甲斐守忠輝から醫學館に對して、事務簡捷を圖るため、醫書出版に就き、醫學館に照會する手間を省き、町奉行より直接許可すべき達となり、醫學館は手足を挽がれて、出版許可の權を消失した。漢醫と蘭醫との反目状態も、形勢が次第に逆になつて、蘭醫が益々火の手を揚げて來つた。多紀家、醫學館の横暴はあるが、江戸時代に於て古醫書出版に力を盡したことは、今でも我々の感謝し居る所である。左にその覆刻書目の主なるものを掲載する。

- 醫略抄 (丹波雅忠著) 一卷
- 本草和名 (深根輔仁著) 二卷
- 醫心方 (丹波康賴著) 三十卷
- 千金翼方 (唐の孫思邈著) 三十卷
- 聖濟總錄 一百卷
- 備急千金要方 三十卷

醫略抄、本草和名の二部を除いた他書は、何れも影寫刻本で各書の終りに關係者一同の姓名が列擧せられて、その擔當責任を明にしてゐる。それは今日の諸書に見る監修などの看板名義でなく、部署を定めて、何れも忠實にその力を盡したものである。(完)

昭和九年五月四日第三種郵便物認可  
昭和十二年十月五日印  
昭和十二年十月十一日發行

第十卷第十號

(毎月一回十一日發行)

# 明治文化

第十卷第十號

次 目

スネルと新潟	尾佐竹 猛	出獄後の花井阿梅	藤田鐵造
「社會教育」といふ語	川原次吉郎	光妙寺三郎の墓	西川善三郎
大久保利通の各國政體調査	深谷博治	榎本對馬守?	落木正文
長野民會	高山長水	酒井三郎と伊勢新聞	西田長壽
小松清治さんの土産もの	石井研堂	雜誌所蔵參考論文一覽	
鈴木久さん	相良武雄	會 報	新刊紹介

## スネルと新潟

尾佐竹 猛

幕末の怪外人スネルが、新潟にて活躍したことは、拙著『幕末維新の人物』に於て略述して置いたが、その新潟に來りし日時が判明しなかつた。しかるに、舊新潟奉行田中康太郎(光儀)の筆記節略に

十二日(明治元年)和蘭コンシユル、名ハ、スネルト申外國人突然飛越、新潟開港之儀、於朝廷御差許相成候間、寺院借受、上陸止宿イタシ候旨届出候處、其頃新潟表ハ各路皆戰爭之巷ニ相成居、朝廷ヨリノ御達并舊主家ヨリ之申越等一切無之候得共、外國人之上陸、止宿、商賣等、於光儀ハ免許ヲ與へ

ズ、亦可相拒權カモ無之、御國人而已之儀ニ候ヘハ、官軍御撃入迄鎮撫盡力可致居覺悟之處、外國人之來港ニ會シ、光儀之力、右等之保護、新潟之政事難行届云々

とあり、爾來數回往復したやうである。つまり新潟開港の一番乗りとして抜目なき彼は、早速出掛けたものと見える。しかし新潟奉行は、とても保護は出來ないと斷つたが、外國人へ始テ面會之節、上陸止宿ハ勿論、諸物賣買等之儀、拙者ニ於テハ免許ヲ與ヘス候旨相斷候處、朝廷ノ御許ヲ受取計候故届置候儀之旨申之候間、無據承置候儀ニ有之候(田中康太郎の一件)

スネルの方では平氣で、ずん／＼上陸して居る。これは既に東北諸藩と聯絡があつたからとも考へらる。既に此頃となつては、米澤藩

はその先祖上杉謙信の舊領地回復の意味も含めて新潟に出兵し、次いで仙臺、會津、莊内、二本松等の諸藩の手に歸し、新潟の行政權は東北連合諸藩の掌握することゝなつたのである。これ、拙著中にある史料のスネルが新潟奉行所にて四藩人と會見記事がある所以である。

これからスネルは新潟を根據地として、盛んに東北諸藩に銃器彈藥を賣込んで居る。明治政府では、七月十七日各國公使に對し

新潟表之儀ハ專戰争中ニ付鎮定迄之間開港難相成等先頃中云々申進置候處尙ニ彼地へ飛越候外國船モ有之候趣ニ付以後右體之儀決テ無之様差留方急度御布告相成候様致度存候

と交渉して居るが、英米蘭の汽船も來て居る











加後八  
俗

俗  
志  
載

オカザリ(御飾)。十五夜は十五日午後から翌十六日午前とを休むのが普通であつた。夕方お餅を搗き相當大きさのオカザリを十五個マルめ、十五夜のお月様は満月で丸いからとて、これを丸いクリバチ(御鉢)に盛つてお月様に供へる。  
ジーゴヤバナ(十五夜花)。紫苑のことであるが十五夜頃美しい爲めに斯の名があり、十五夜のお花に無くてならぬものとされて居る。供へ物は前記オカザリの外葉附大根、八つ頭、枝豆、栗、柿、甘藷等で、月に面した横側へ机を突出して之に載せ、月の出を持つてお明し(家により御酒も供へる)を上げ、家内一同が月を拜むのである。老人などはお佛壇と十五夜様とにお念佛を上げたりする。

ジーゴヤノスト(十五夜盗人)。以前は夕食後男兒や小ワカイシ(小若衆)が、オカザリ等を竿にひつけて取歩き、ワカイシも他家の柿なきを平氣でもいだらしく、筆者の少年時代にはまだ此風が相當あつた。此夜の盗み即ち十五夜ノストはすべとお月様が見のがして下さるやうにいはいはれ、中にはそれをいふことにして晝の間から、よその畑を荒したりなり物をもぎ廻る不心得者さへあつた。

サイキョー(西行) 西行法師が諸國行脚の際十五夜の晩に或茶屋へ休んだ。茶屋のお内儀さんは西行を試めさうと思ひ、わざとオカザリを半分千切つてそつと袂へ入れた。そんなことは露知らぬ西行さんが半分のオカザリを見つけ、「西行はいかなる旅もして見たが、十五夜の半月これが初めて」ときめつけけるや、間髪を入れずお内儀さんが「雲に隠れてここに半分」と袂からオカザリの半分を取出して突附けたので、西行さん後をも見ずに逃出したといふ。何處にさあるこんな話を村の老人達は尤もらしく、十五夜毎に子供に聞かせたものである。

蒲原地方で語られる十五夜と西行さんは、もう完全に十五夜ノストの話になりきつて居り、其の節は次の通りである。西行さんが十五夜の晩に宿を取りはづし、道ばたの芋畠へ入り芋をおこして居ると、運わるく畠主に見つけられひきく叱責を受けた。わけから身許まで諒解を求めると、「宜し、都の歌詠みなら即座に一首詠んで見ろ」と言はれので、「明月を知らで寝て居る芋の子を、おこしに來たが、それがノストか」と詠んで示せば、畠主もすつかり感心して快く許したといふ。筆者の郷里では「馬鹿西行」、「この西行野郎」、「あんまり西行コクな」の如く、西行を聊か低能者扱ひにして居るが、しかし一方「クー(句、歌)詠みの名人」と考へられ、大概なのは皆西行のところへ持つて行く。

### 玉川新名所

### チュウリップ園

新潟農園經營

新潟名所として、全日本に、いや今では世界的に著聞する新潟農園のチュウリップ一望唯五彩の花々々——あの美しい風景は一度眺めた事のある人間にとつては忘れ難いものであらう。

さてそのチュウリップ園の支園が東京郊外玉川に一萬五千坪といふ廣大な地域を占めて出來上つた。

新潟農園を見た人の誰もが「あれが東京の近所にあつたら——」と歎聲を洩らしたのだが、今やその歎きがキレイに解消して、東京新名所が出來上つた譯である。その概略を記すと左の如くである。

△場所 世田ヶ谷區玉川町六六〇。讀賣兒童園ついで。  
△公園の廣さ一萬五千坪。

△チュウリップの植込數五十萬球。

△今春開花期 四月十五日より五月五日迄。

△秋は菊花壇 十月中。

△觀覽は讀賣學童園より入場。

△購買、園内には花卉、球根種子、チュウリップ、羊羹、繪葉書、其他の賣店あり。

△食堂の設備あり。(二百名集會充分)

△交通、澁谷より玉川行又は溝ノ口行。

△東横電鐵にて玉川驛(讀賣遊園驛)にて下車。數歩にして入口に達す。大井驛より自由ヶ丘を経て(電車に依る)玉川驛にも着し得られ又横濱よりも東横線により來園し得られる。

△經營方針  
年々五十萬球のチュウリップ其他ヒヤシンス、水仙等を植へ込み、又秋は大菊花壇を設置し、滿都の人士の遊園地たらしめ、東横電鐵、讀賣新聞等より多大なる協力を得つゝあり。尙今秋迄には園を擴張し、東横及讀賣では、十五萬圓を投じて大々的娛樂設備を造る豫定である。

△尙遊園地のみならず、園藝品の販賣、庭園の請負等を行ふ。

△球根は年々新しき球を新潟本園より送り込み植つけする。

△名稱。新潟農園東京營業所(電話玉川三四四)

園の概況は大體右の如くであるが、今春よりの開花期には、恐らく都人士の人氣を凌ぶものと見られ、新潟自慢のチュウリップは、今度一躍東京名物となる譯であるが同郷人各位、殊に縣人會員は此の郷土自慢を都人に紹介する爲にも、是非團體として觀覽せられたいものである。

### 卯年會取止め

四月十二日開催豫定の卯年會は大方各位の御賛成を得て居りましたが會場其他の都合に因りまして不仕得一時延期致しましたから御諒知の程お願ひ致します。

卯年會幹事



書影巡禮 (八十四)  
後陽成天皇勅板長恨歌首卷

長恨歌傳 前進士陳鴻撰  
開元中泰階平四海無事玄宗在位歲久倦  
于旰食宵衣政無小大始委于右丞相深居  
遊宴以聲色自娛先是元獻皇右武淑妃皆  
有寵相次即世宮中雖良家子千數無可悅  
目者上心忽忽不樂時每歲十月駕幸華清  
宮内外命婦媚耀景從浴日餘波賜以湯沐  
春風靈液澹蕩其間上心油然而若有顧遇在

標原製

勅板刊行並に傳本所在一覽

古文孝經 文祿二年 活字版  
傳本不明

錦繡段 慶長二年 活字版 一冊  
傳本——久原文庫(油小路家舊藏) 東洋文庫(梶井宮舊藏  
改装) 内藤虎次郎博士、杉浦三郎兵衛氏

勸學文 慶長二年活字版 一冊  
傳本——陽明文庫(京都帝大寄託) 東洋文庫(木村正辭博  
士舊藏) 神田喜一郎氏(應司家舊藏改装)

日本書紀神代卷 慶長四年 活字版 二卷一冊  
傳本(十五本) 圖書寮三本(内一冊は野宮家舊藏) 神宮文  
庫二本(豊宮崎文庫舊藏) 京都帝大圖書館(青蓮院宮・鈴  
鹿敬芳舊藏) 大阪府立圖書館(上賀茂社家舊藏) 大阪天  
滿宮文庫(葛城長兵衛納) 東洋文庫(雲村文庫舊藏) 靜嘉  
堂文庫(山田以文舊藏) 安田文庫(二冊西莊文庫舊藏) 成  
實堂文庫(曼珠院舊藏) 内野氏陵亭文庫(山田以文舊藏)

古文孝經 慶長四年 活字版 一冊  
傳本(四本) 吉田兼良子爵 東洋文庫(和田雲村氏舊藏)  
帝國圖書館(「藤原肅印」「淡川家藏」印記あり) 刈谷町立  
圖書館(村上忠順、野口道直舊藏)

四書 慶長四年 活字版 五冊  
傳本(完本一本) 近衛公爵家陽明文庫  
安田文庫本は大正十二年震災にて焼失  
論語一冊(葵文庫) 林復齋舊藏) 孟子二冊(東洋文庫) 雲  
村文庫舊藏) 禮記(刊行の有無不明傳本無し、但し版式の  
野紙のみ殘存す)

職原抄 慶長四年 活字版 二卷二冊  
傳本(三本) 久原文庫、安田文庫(曼珠院、西莊文庫舊藏)  
圖書寮(王生家所藏)

五妃曲 慶長八年 一冊 傳本不明  
長恨歌琵琶行 慶長年 活字版 一冊  
傳本(一本) 林森太郎氏(林復齋舊藏) 中臣祓(慶長御宇  
官版云々の文書あり傳本なし)

皇朝類苑 元和七年銅活字版 七十八卷十五冊  
傳本(十七本) 圖書寮(十五冊) 圖書寮(十三冊毛利元功  
所献本) 帝國圖書館(原裝) 近衛家陽明文庫(原裝) 東洋  
文庫(野間三竹舊藏) 東洋文庫(雲煙家藏書記印記あり)  
靜嘉堂文庫(青蓮王府舊藏原裝) 靜嘉堂文庫(不忍文庫舊  
藏改装) 安田文庫(西莊文庫舊藏原裝) 成實堂文庫(十四  
冊櫻山文庫舊藏) 久原文庫(姉小路家舊藏原裝) 内野氏陵  
亭文庫(島原候舊藏) 高木文庫(九條家舊藏原裝) 堺市祥  
雲寺、彰考館文庫(原裝) 布施卷太郎氏、岩瀬文庫(原裝)



田中光顯翁逝去  
 靜岡縣蒲原町寶珠莊に悠々自適してゐた田中光顯翁は去る三月二十一日風邪に冒され静養中であつたが肺炎を併發し、二十八日午後

六時五十分遂に逝去した。享年九十七。  
 翁は天保十四年九月舊高知藩士田中充美の長男として生れ夙に勤王の志を懐いて國事に盡瘁し、慶應三年時の鷲尾侍従が内勅を受け高野山に兵を擧げた折にはその參謀として奮闘、明治元年以來兵庫縣判事、大藏少丞、戸籍頭を経て同四年末には理事官として岩倉公に隨行滯歐米三年、特命全權大使會計兼務を命ぜられ、同七年歸國して陸軍に入り陸軍會計監督、次いで西南の役物發するや征討軍團會計部長として功を樹て後陸軍會計局長、陸軍少將兼參事院議員、恩給局長、元老院議員を歴任、同廿年勳功により子爵を授けられ華族に列した、爾來會計検査院長、警視總督、貴族院議員、宮中顧問官、學習院長、官内次官、圖書頭、宮内大臣、議定官に歴任、同四十年伯爵を賜はり、昭和七年七月卅日明治大帝廿年式年祭の當日辭爵、家督を養嗣子遜氏に譲つて隱居、

爾來靜岡縣蒲原郡蒲原町中村の「寶珠莊」に閑居鑿鑿壯者を凌ぐ健康さで悠々自適しながらも明治維新勤王舊同志の遺蹟を蒐集し慰靈顯彰につとめ維新史料編纂會顧問

であつた。また郷里の高知縣佐川町に青山文庫を、多摩に聖蹟記念館、水戸に常陽明治記念館をつつたものも翁であつた。

△(由比の濱邊をながめつゝ)  
 △黒髪をゆひてか瀧邊の海士少女何の思ひにぞしてはるらん  
 △(立春前日)  
 △冬の日は今宵一夜となりけり春や宿れる山のあたに  
 △(折にふれて)  
 △せりつみてだてまつりしは昔にて動に命をまかせつゝのみ  
 △(華房會廳)  
 △映の星の光のうすろひてあさ日のかげやせをたらすらむ  
 △研ぎあけし顔はさきに納むとも御國の光おとすへしやは  
 △(春月)  
 △遙しとも思はれぬかなおぼろよの月に歌ひて歸る家路は  
 △(阪本龍馬君の肖像)  
 △かしこも后の宮のおほん夢に入りしは君が眞心にして  
 △以上の和歌は、備かに數首を掲げたわけであるが、この歌の中からは翁の人情がはつきりと思はれる  
 △(終)

△(擧取)  
 △おのが身を汚しながらも世の中を清むる物は擧取にして  
 △(古橋になりて天蓋を賜はりける時)  
 △たまものよその蓋のそと深き大みめぐみに見える婦し。  
 △(雲雀)  
 △久方の空よりおつる夕雲雀もとのむきふや住よかるらむ  
 △(そりにふれて)  
 △花ととり雪ときえにし横田のますうたけを思ふけふ哉  
 △(手箱を賜りける時)  
 △たまものよ箱の多かけるかしの實の一つ心に我ははへむ  
 △(波)  
 △長閑なる春の日なれど池の面に上るさよ波はあの世なりけり  
 △(誠)  
 △結はれし國と國とのあらしむもとくは誠の一すちにして  
 △(夜ふかく起きてみて)  
 △御病はいかにと語るまにはや夏の夜のふけ渡りぬる

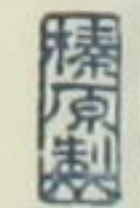
△(故郷の月)  
 △たけ馬に乗りて遊びし友の數年ふるさとの月にとはや  
 △(眞頂山和風院にて)  
 △いと高きみのりの華の頂はとほにのどけきはる風ぞ吹く

△(擧取)  
 △おのが身を汚しながらも世の中を清むる物は擧取にして  
 △(古橋になりて天蓋を賜はりける時)  
 △たまものよその蓋のそと深き大みめぐみに見える婦し。  
 △(雲雀)  
 △久方の空よりおつる夕雲雀もとのむきふや住よかるらむ  
 △(そりにふれて)  
 △花ととり雪ときえにし横田のますうたけを思ふけふ哉  
 △(手箱を賜りける時)  
 △たまものよ箱の多かけるかしの實の一つ心に我ははへむ  
 △(波)  
 △長閑なる春の日なれど池の面に上るさよ波はあの世なりけり  
 △(誠)  
 △結はれし國と國とのあらしむもとくは誠の一すちにして  
 △(夜ふかく起きてみて)  
 △御病はいかにと語るまにはや夏の夜のふけ渡りぬる

古人に學ぶ

樂翁公(松平定信)の樂亭賦書ほど居常心をひくものは妙し。その中より特に感懐ふかき章句を抄す。妄抄なり。

一、あるもなきにおとるは、誠なき人の才、稻妻のかけ、逢ふと見し夢。  
 一、おほきをいむものは、酒の肴、茶器、遅櫻、りうたんの花、ほととぎす、鈴むし。  
 一、よきはよく、あしきはあし、は、うたがひもの。  
 一、我ほどをしり、なすべき事をなしてこそいはめ。しひて古をしたひ、月花をめづるとて、いかにいはん。  
 一、埋もれて、をかしきものはあらじ。されど子の日の小松、夏草にかくれたるのみこそ。  
 一、うとむべきは、歎きいふ人、よそ見ぬりつく、蜘蛛のす、あしだの迹……  
 一、たふとぶべきものは、人にことなる人、たふとむまじきものは、人に異なるまじまゝの人。  
 一、梅が香を、櫻の花、柳の枝などに、おもふまじきことなり。花の紅、柳の緑、心をわけて楽しむべし。  
 一、たれりと思ふべきは、わが身。足らずとしてよきものは、つとむべき道。  
 一、楽しきと思ふが楽しきの元なり。いかで外に求むべきと、たのしむおきないふとぞ。









閣僚補充問題 首相兩相と協議

閣僚の意見を徴するため二日前

の主要閣僚の意見を

余が和平勸告通電は 國府最高機關の決定 汪兆銘第三次聲明發表



【香港特電廿一日發】廿一日夜汪兆銘は第三次聲明書を發表、昨年末

汪兆銘聲明全文

【香港一日新聞】曾仲鳴暗殺事件に關する汪兆銘の三月二十八日

國事のために死し國事主張のため

余は既に去る十一月二十九日和平

月六日午前九時、地點漢口中央

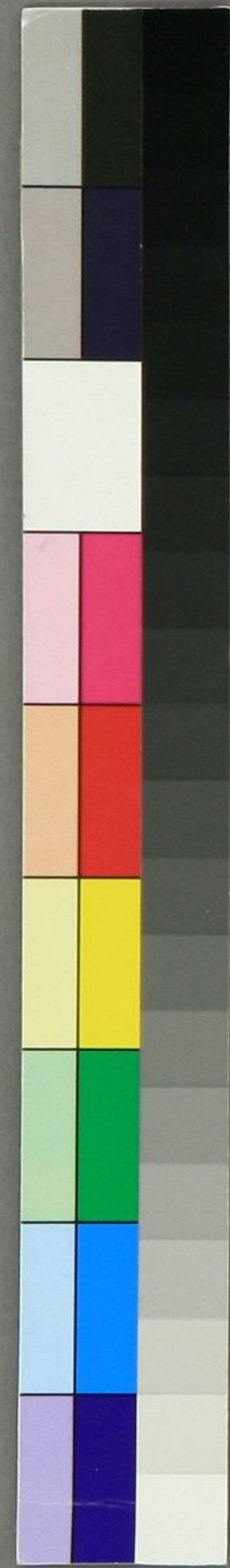
獨大使の斡旋經過

「中國の日本に對する今日までの

やまた我軍備に對する制限條項

以上の三つの疑問に

90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10





兩相と協議

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

表

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

陸軍の意見を徴するため一日午前...

大使の斡旋経過

余が重慶を離れずは通電を...

余が重慶を離れずは通電を...

余が重慶を離れずは通電を...

余が重慶を離れずは通電を...

余が重慶を離れずは通電を...

余が重慶を離れずは通電を...

余が重慶を離れずは通電を...

百年の大計樹立

熱烈！汪の和平要望

熱烈！汪の和平要望

熱烈！汪の和平要望

熱烈！汪の和平要望

熱烈！汪の和平要望

熱烈！汪の和平要望

熱烈！汪の和平要望

對支政策を協議

英大使上海へ

英大使上海へ

英大使上海へ

英大使上海へ

英大使上海へ

英大使上海へ

英大使上海へ

京濱湘甯電鉄 三浦半島ハイキング 花月園 羽田海岸

京濱湘甯電鉄 三浦半島ハイキング 花月園 羽田海岸

日南京に到着、先...

日南京に到着、先...

日南京に到着、先...

日南京に到着、先...

日南京に到着、先...

日南京に到着、先...

日南京に到着、先...



後鳥羽帝御縁りの

國寶七點獻上

式年祭の日原氏的美舉

蒐藏家として知られる横濱羽天皇宸翰御消息(五通)一  
市中區辨天通三ノ四八從五卷(奥に賀茂氏久の置文四  
位勳三等生糸貿易商原富太通あり)一、紙本墨書後鳥羽  
郎氏は後鳥羽天皇七百年式天皇宸翰新古今集拔書(二  
年祭に當る四日午後二時半十首)一卷(承元四年六月廿  
秘藏の天皇御像一幅を始め一日の御奥書並に文永四年  
天皇宸翰等左の如き貴重な御縁りの國寶七點を畏き邊  
へ献上した

一、絹本着色後鳥羽天皇御像一幅、一、紙本墨書後鳥  
皇宸翰御詠草(さみかよは)一幅、一、紙本墨書賀茂氏  
久置文(弘安五年四月廿一日、同十一年卯月廿八日)

日、同十一年卯月廿八日)一卷、一、紙本墨書賀茂氏久置文(建治二年十月十日)一卷、一、紙本墨書西連假名消息(五通)一卷

右献上の國寶七點は昭和十一年五月六日いづれも國寶に指定されたもので、後鳥羽天皇御像は九條大納言撰三十六歌仙繪でも知られてゐる藤原信實朝臣の筆に成つたものといはれてゐる。一、紙本墨書後鳥羽天皇宸翰御消息は天皇が隱岐遷幸以來第六皇子賀茂氏久卿に送られた宸翰。一、紙本墨書後鳥羽天皇宸翰新古今集拔書は天皇が藤原定家卿はじめ有家、家隆、雅經に命じ

て作らせられた新古今集から二十首を抜書き遊ばされたもの。一、紙本墨書後鳥羽天皇宸翰御詠草は天皇が古歌さみかよはちよに一たひあるちりのしらくもかゝる山となるまでを御親ら御書き遊ばされたものである。一、紙本墨書賀茂氏久置文は弘安五年四月二十一日、同十一年卯月二十八日附で記されてある。一、紙本墨書賀茂氏久置文(建治二年十月十日)と共に賀茂家代々に傳へるべき品とされたもの。一、紙本墨書西連假名消息は隱岐島に在らせられた上皇と氏久卿との間を往復した僧西連の手紙五通を集めたものである



藤原製





本社機による太平洋、大西洋、世界一周大飛行が発表された五日わが航空界の元老田中

# 本社機の「世界一周」禮讚

☆航空博士は夢の帝王大飛行  
究極で世界航空の足跡につぎ次の如く語った「真実は田中博士

## 『夢に見た國産機で 何と素晴らしさだ』

### 幼稚な日露戦争前後から

### 思出を語る 田中館博士

「よかつたね、今朝起るとすぐ君のこの新聞を見たよ、乗組員もみな優秀な人だし飛行機もなかなか優秀なものだ、必ず成功するよ、それに親善使節が乗つて行くのがいいね、あれは君、國際的に見てなかく、感服のあることだよ、ほんとにわが國の航空界も長足の進歩をしたものだね、これはこんどの支那事變のお陰だ、飛行機がなければあの廣い支那で戦争するにしてもなかくあんな素晴らしい結果を収めることは出来なかつた、全く日露戦争當時の幼稚

な航空界のことを思ひ出すと感服無量だね……日本ではじめて航空球をあげたのは、旅順の戦ひの時だ、ロシアもこれを使つたが、旅順港内にある敵の軍艦や、その他軍備がわからぬといふのでこれを見るために航空球を用ひたところが、その頃航空球につめる水を現地でこしらへるのはなかく大變なもので中野電報隊でこしらへてこれを持って行つたものだ、ところが大きな航空球にこの水を移すのがなかく大變なもので、僕等はこの研究をさせられたものだ、この時航空球といふものはなく、氣球班

といつた、日露戦争以來もつともつと研究しなければならぬといふので、今の政友會の中島知久平氏は當時海軍中尉だつたと思ふが、とても熱心だつた、それから自由飛行の研究に移つたが、私は歐洲の航空界を視察のため明治四十三年に出かけたのだが、あまり日本の航空界が遅れてゐるので驚いた、各方面を歩いて歩いてつと一生懸命金をかけてやらなければいけません、時、陸軍大臣の寺内さんも非常に熱心になられてとてもよかつたね、實際に飛行機を買ひ、やつてみなければならぬといふことになつて豊川中尉等をフランスにやつて機體も

いまでも遊覧機にのつてゐるが、この佛國製のアンリ・ファルマン機で所澤で練習をしたものだ、ところがね、その頃は午後になると風があつて飛行には都合が悪いといふので練習も断つたものだ、だからわしらは午前三時ごろから起きてははたとはいへばノコノコ出かけて行つたよ、だいたい六時、七時ごろ飛んだものだ、日本がはじめて戦争に飛行機を用ひたのは青島の戦ひの時だ、この時はドイツはなかなか優秀な飛行機を持つてゐるのでびつくりしたよ、支那でもモンハンでも日本の冠蓋たちがあんな素晴らしい神

按に近、航空の出来るのは日本人が最近小さい時から「フリス」が野球をやるとかと思ふね、あの一寸した體間に目標を設けずあんなにうまくなること出来るのは、スポーツの訓練があるためだと思ふね、今日の乗組員の技術の進歩、優秀な飛行機と、三十年前のことをくらべると、全く夢のやうな話さ、當時わたくしが夢に見た國産機によつて世界を一周するといふすばらしいことが實現するんだ

から、何しろ體いいよ、農生さにはするものだよ、ハハハ」  
と八十四歳の老博士は手をあげたり、足をのびたりとまるで孫が世界一周でもするやうに喜ぶのだつた

寫眞説明 飛行機の今昔比較「上」六萬キロの壯遊に上る本社機「一周機」(下)明治四十三年豊川好敏大尉(中)中島知久平大尉(右)初め飛行機をした佛國製アンリ・ファルマン機(この時の飛行時間は四分、高度七〇米、距離三キロであつた)

